

幸せになれないウマ娘

森森ノ森

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

虐待の果てに死んだ少年は、少女へと——ウマ娘へと転生した。
今度こそ幸せになれる。

何の根拠もない、馬鹿みたいな希望を抱いて。

※レース描写は少なめです。レースやウマに関する知識も、余り詳しくないので悪しからず。

目次

幸せになれないウマ娘	1
今、生きている筈の貴方	7
少女の学園生活 1	14
少女の学園生活 2	22
縛り付けられた夢	31
いない筈のもう1人	41
圧倒的で、一般的なレース	48
眩しすぎた舞踏会	59
どうしようもない過去と現在	69
ゴルシちゃんと愉快な仲間達―幽霊部員を捕まえろ、の巻―	79
出来ない退部届	89
誰も知らない。何も知らない	104
全てを失った末に	116
予想外は、想定内	128
馴れ初めと言う名の始まり方	140
死んで死にたい死なない死ねない	156
歪み切った存在意義	170
もう、楽になりたくて	185
第19話	202
0に戻った立ち位置	218

幸せになれないウマ娘

——『ストロングブラッド速い!! 彼の追隨を許さない、圧倒的な走り!! 最終コーナーを抜けても、その速さに衰えは無い!!』

——『ストロングブラッド速い!! 速すぎる!! 二着と圧倒的な距離を離して、今ゴール!! ストロングブラッド、優勝だ!!』

優勝。

アナウンスからその単語が発せられた瞬間、少なからず観戦席は沸いた。もつとも、只の優勝では対して驚きもしないだろう。

しかし、舞台は菊花賞。

彼女は皐月賞、優勝牝馬も制している。つまりは、三冠を達成したと言う事。その事実には、誰も彼もが反応を示す事だろう。

だからこそ、周囲は湧いていた。

——『三冠ウマ娘の栄光を手にしたのは、ストロングブラッド!!』

アナウンスからの放送を聞き、改めてその意味を噛みしめる観客達。さらに一層、声援は大きさを増して行き、耳を塞がないといけない程に。

しかし、三冠を手に入れた本人——ストロングブラッドに喜びは無かった。今までの努力が報われた、と泣く事が無ければ、喜びに震える事も無い。

至って普通。

三冠を手に入れたというのに、表情を変える事は無い。異様な雰囲気纏うウマ娘だった。

艶やかな肢体に、少し色白な肌。黒紫の長髪をツーサイドアップに結び、顔部分に当たる左右には編み込みが入っている。

本来であれば露わになる顔は切り揃えられた前髪で覆われ、今彼女がどんな表情を浮かべているのか誰も分からない。

身に纏う衣服はメイド服と、ゴスロリ——ゴシックロリータ——を混合させた、真つ黒な衣装だ。

細かな刺繍や装飾が施され豪華なデザインに仕上がっている。

本人は意に介した様子も無く、そのまま控え席へと戻っていく。長髪を靡かせて、他の選手達に挨拶をする訳も無く。

自身に投げられる、決して少なくない歓声を無視して。

※

何とも汚い部屋だ。

広さは六畳半と狭く、至る所にゴミが散乱している。台所と、時代遅れのブラウン管テレビ。後は冷蔵庫。この部屋にあるのは、それだけで全部だ。

「ふざけんじゃねえ！ この、クソガキがあ!!」

アイツに頬をぶん殴られて、僕の身体は吹っ飛ぶ。頬の痛みを感じた、と同時に煙草のせいで黄ばんだ壁に打ち付けられる。

肺の中に入っている酸素が、押し出される様に感じた。

そのまま床に倒れる。周囲にはビールの空き缶や、お菓子の袋。新聞紙などが散乱しており、異臭が漂ってくる。

痛みと苦しみがちや混ぜになって、思わず咳き込む。痛い、苦しい、どうして僕がこんな目に。

泣き言を呟きたいが、そんな余裕も無い。

「何テメエ、寝てるんだよ！ ざけんじゃねえぞ、ガキい！」

殴ったのに、まだ気が済まないのか。

サッカーボールを蹴るみたいに、アイツは思い切り僕のお腹を蹴り上げた。そうして、また僕は吹っ飛ぶ。

人間って、こんな簡単に吹っ飛ぶのか。

他人事のように、思わずそう感じた。宙に浮く感覚は、数秒程度だったのに、僕にとっては何十秒にも感じられた。

床に叩きつけられる。

痛みが襲う。「がっ、あっ……がっ」声にならない声を上げて、もが

き苦しむ。思考が纏まらない。

痛くて苦しくて、寒くて辛くて、どうにかなってしまいそうだ。胃の中身が、逆流している感触を味わう。

止めようとするが止まらない。

「うぶっ……おふっ……おゝええええ」

手のひらで受け止めようとするが、手のひらには収まりきらなかったのか、ボトボトと吐しゃ物は床に垂れる。

ツーンと鼻に付く、何とも言えない匂いが充満した。多分、昨日食べた残飯や生ごみのせいだろう。そして、また殴られる。

「デメエ、本当にいい加減にしやがれ！」

倒れても無理矢理立たされて殴られる。

何度も何度も何度も。

殴られた。

「おい！聞いてんのか！おい！」

顔中が痛い。頭がクラクラする。嘔吐感は今もまだ続いているし、アイツは殴るのを止めてくれない。

意識が朦朧として来た。痛みが段々無くなって来る。

「無視するんじゃない!!」

また僕は殴られる。

殴られて、飛ばされた場所が悪かったのだろう。台所の下に備え付けられた、棚の取つての部分に頭を強くぶつけた。

一瞬、鋭い痛みが頭を突き刺すが、直ぐに無くなった。

何かが聞こえて来る。アイツの慌てる顔が。ははっ、ざまあ見ろ。僕を何時も殴っているからだ。本当に、ざまあ見ろ。

瞼が重くなった。

何故か無性に眠たくなった。

眠るのは好きだ。嫌な事も、辛い現実も、眠れば全部見えない。拒む理由なんて無かったから、僕はそのまま眠りについた。

「——大丈夫か？」

目が覚めると、真っ白な世界だった。

「ここは、一体？」

「いわゆる死後の世界、って奴だ。まあ、少し意味合いは異なっちゃあいるが、おおよそそう言う認識で構わない」

僕の目の前には、人影としか形容する事の出来ない、異様な何かが居た。人の様な形をしているが、人間らしさは微塵も無い。

精々、顔についている口くらいだろう。

「そう警戒するな。別に危害を与えらるつもりは無い」

危害を与えないと言う意思表示のつもりなのか、手のひらをパーにして、両手を挙げる。一見すると胡散臭いが、一応、信用は出来るらしい。

事実、人影は何かをしてこようとはしていない。

「分かりました——って、さっき今、死後の世界って、言いましたよね？」

「ああ、言ったぞ」

「じゃあ僕はもう……」

「死んでいる。頭から血を流して。まあ、身体が衰弱していたり、虐待を受けていたと言うのも理由の一つには挙げられるが」

そうなのか。

僕は、死んでしまったのか。

唐突すぎる現実に、頭が追い付かない。死んでしまって、今は死後の世界。理解しろと言われても、はいそうですかと理解するのは難しい。

「貴方は何者なんですか？」

「神の様な存在、と思つて貰えば良い」

神様なのか。

七福神とか、大仏とか仏様とか、色々な神様の木像が存在していたけれど、本物がこんな姿なのは少々驚きだ。

「これから僕はどうなるんですか？」

「新しく、人生をやり直してもらおう。因みに拒否権は無い」

つまり、生まれ変わり、と言う事か。

しかも前世の記憶を引き継いで。

そうそうあんな状況に陥る事も無いのだし、次は多分良い人生を送る事が出来る筈だ。

「それじゃあ長話も何だし、そろそろ良いか？ 因みにだが、お前を殺したアレは警察に捕まり、裁判にて無期懲役を執行される。その後は一生豚箱での生活さ。まあ、お前にとっては、もうどうでも良い話だろうけどな」

「ええ、本当にどうでも良い話ですね」

アイツを父親と思つた事は一度も無い。

死んでから振り返ってみると、何ともまあ酷すぎる人生だった。母親は家を出て、僕はまともに学校すら行けなかった。

遊園地にも連れて行つてもらつた事は無いし、まともにアニメを見せてもらった事は無い。お腹いっぱいご飯を食べた事も無ければ、楽しい事なんて何一つ無かった。本当に酷過ぎる人生だったなあ。

だからこそ、次の人生では絶対に幸せになろうと決心する。

神様の話によると、僕は転生する時に、転生特典として何かを与えられるらしい。

チートでは無いらしいが、これからの人生で確実に役に立つ。

「それでは、汝の人生に、幸が在らん事を」

最後に神様は、神様らしい事を言って、僕の視界は暗転した。

ウマ娘。

彼女達は、走る為に生まれて来た。

時に数奇で、時に輝かしい歴史を持つ別世界の名前と共に生まれ、その魂を受け継いで走る。それが、彼女達の運命。

そんなウマ娘に僕は転生した。

今度こそ、僕は幸せになれる。

何の根拠も無い、馬鹿みたいな希望を抱きながら。

今、生きている筈の貴方

——中央トレセン学園。

正式名称を日本ウマ娘トレーニングセンター学園と呼び、在校生徒数は総勢2000人弱を誇る、日本屈指のウマ娘養成校だ。

数多の有名なウマ娘を輩出した実績を持ち、古今東西——様々なウマ娘が夢や大志を抱き、その狭き門を叩く。

そんなトレセン学園のとある一室。

贅の限りを尽くしたと言っても過言では無い部屋。何とも豪華で、格式と伝統に塗れてしまっている、西洋風の造り。

本来露わになる、白磁の床は一目見ただけでも高級品だと分かる絨毯に覆われ、至る所に装飾や絵画が。

もつとも結構値が張る、意外の事は分からず、真の値打ちなどは理解が及ばないだろう。既に、部屋の内装だけでも圧倒されるのだ。

1つ1つに目を配る余裕も無い。ましてや、この場所は他でも無い、トレセン学園を代表する生徒会長の部屋。

豪華な内装とは裏腹に、置かれている物は必要最低限。資料などを収納する為の、幾つかの棚と、来客用のソファとテーブル。

いずれも結構な値打ちモノ。

そして、壁に飾られたとある言葉。部屋中に敷き詰められた、豪華な装飾だけは無く、只々無骨な白紙に黒い文字が書かれているだけ。

——Eclipse first, the rest now hereと。

英語表記になっている、と言う事も理由の一つになるかもしれないが、この言葉の意味を知る者は一握りだろう。

「ストロングブラッド。前々から注意している通り、ウイニングライブには必ず出る。レースに出るだけが、ウマ娘の役割では無い。レースを重視して、ウイニングライブがおろそかになるとは言語道断。周りに示しが付かないだろうか？」

注意しているだけ。

恐らくは、本人もそのつもりなのだろう。しかし、一文字一文字を紡ぐごとに、身体に重く押し掛かる威圧感。

原因は他でも無い、目の前のウマ娘。

目の前に居るのは今代の生徒会長シンボリルドルフ。威圧感を全身に纏わせており、気が小さい者であれば数秒足らずで卒倒してしまうだろう。

類まれなる容姿は、まさしく『皇帝』の名に相応しい。可愛いと言うよりは、美しいと言う言葉の方が相応しいだろう。

ブラウンの髪に混ざるように、黒や白のメッシュが施されており、その整った容姿はさながら美を追求した芸術品の様だ。

美しいだけで無く、シンボリルドルフの名声は世界に轟く程だ。無敗で三冠を達成したと言う偉業に留まらず、七冠制覇と言う前代未聞の栄光を手にした。

まさに、全てのウマ娘が憧れ、慕い、羨望の眼差しを向けるに値するウマ娘と言えるだろう。そんな彼女の正面に立っているウマ娘こそが、件のウマ娘。

気圧されそうな威圧に動じた様子は無く、寧ろ心底面倒くさいと言うオーラを隠す事無く放っている。

隠そうともせず、取り繕うともしないその姿勢は潔いと褒めるべきなのか、怖いモノ知らずと驚くべきか、しっかりとしろと注意するべきなのか。

判断に困ってしまう程だ。

「お言葉ですが、ライブは不要です。僕達はダンスを踊り、雑音を浴びる為にいるんじゃないやありません。一着を取る為に、レースに出ています。ウイニングライブなんて、心底下らないモノに出る義理も理由もありません」

良い淀む事も無く、ハッキリと自身の意見を言う。

そして、その言葉は本心だったのだろう。シンボリルドルフは直ぐに言い返す事も無く、少し目を閉じる。

レースが終わった後は、決まってウイニングライブが行われる。レースを楽しみにしている人達も居れば、ウイニングライブを楽しみ

にしている人達も居る。自身を応援してくれる人が居るのだから、その期待に応えるのは当然の事だろう。

模範的とも言える理由を説明しようとして、止める。仮にそんな事を言った所で、目の前に居るウマ娘は決して納得などしない。

最悪、応援なんて無駄だ、と言うかもしれない。

こうやって呼び出す回数は数回目。最初は軽い注意だけだったのだが、ウイニングライブ無断欠席の回数が目も当てられず、こうして呼び出されている訳だ。

一度でも呼び出されれば、シンボリルドルフの圧倒的なカリスマと、身震いしてしまう威圧にあてられて改心する。

が、ストロングブラッドは例外だ。

そんなのは、知った事では無い。そう言わんばかりに幾度となく繰り返す。正直に言ってしまうえば、呼び出しただけで改善出来ない事は分かり切っている。

それでも彼女を呼び出し、こうして注意しているのはある種の見せしめの様なモノだ。1人でも例外が生まれれば、後に続く者は必ず現れる。

だからこそ周囲に釘を刺しているのだ。ウイニングライブに出なければ、こうなってしまうのだぞ、と。

「……一応、ウイニングライブに出る時もあるんだがな」

しかも結構な好評だ。

だが、ウイニングライブに出るよりも出ない方が圧倒的に多い。

シンボリルドルフとしても、ここまでの問題児と出会った事は無いので、ほとほと困り果てている。無論、改善させると言う思いが無い訳では無い。

が、効果が無い。暖簾に腕押し、糠に釘と言った具合に、全くもって効果が無い。余りにも効果が無いのだ。

「おい、会長の前だぞ。もう少し、口を慎め」

ピシヤリと鋭い指摘をするのは、シンボリルドルフの隣にて佇むウマ娘。さながら刃物のような少女だ。

猛禽類を彷彿とさせる鋭い相貌は、容赦なくストロングブラッドに

突き刺さる。淡い黒色の髪は肩辺りで短く切り揃えられ、耳には黄色いリボンが。

顔立ちは凛々しく、何とも高圧的な印象を抱いてしまう。彼女の名はエアグルーヴと言い、シンボリルドルフを支える副会長に就いている。

「何か不備でもありましたか？ 敬語は使っていると思えますか？」

「そういう事を言っているのでは無い！」

「では謙譲語や尊敬語を使えと言う事ですか？ いえ、謙譲語は少し意味合いが異なりますので、この場では尊敬語でしようか？」

「だから、そう言う事では無い！ 今のお前の態度に対して、私は言っているのだ！」

「……………」

何処かズレた発言に対して、エアグルーヴはこめかみを抑える。わざと言っているのでは無い、と言う事は分かる。

実際本人は若干首を傾げており、余りピンと来ていない様子だ。素でアレなのだから、頭を悩ませるのも仕方がないだろう。

「良い、エアグルーヴ」

険悪になりそうな雰囲気、シンボリルドルフが止める。言い足りない様子のエアグルーヴではあったが、会長からのお達しだ。

断る事も出来ずに従う。

「話は以上でしようか？」

「ああ、時間を取らせてしまい済まないな」

「いいえ。構いません」

それでは失礼します。挨拶を残して、ストロングブラッドは退出する。残ったのは、エアグルーヴとシンボリルドルフの2人だけ。

「アイツのアレは如何にかなりませんか？ 会長」

「如何にもならないだろうな。これで通算10回目だが、治る兆しは見えない。あの人が言えば、ちゃんと従ってくれるのだが……違いは何なんだ？」

シンボリルドルフから見て、ストロングブラッドと言うウマ娘は、何とも得体の知れない存在に見えてしまう。

幾度となく叱っているのに改善の兆しが見え無いのもそうだが、一般的な価値観とは異なるズレに、歪んだ考え方。

身に纏う雰囲気は異質で、存在感は余りにも希薄。まるで、幽霊でも見ている様な錯覚を覚えてしまう。

1つだけなら特に何も思わないが、数が揃えば見え方も変わる。だからこそ、どうにかしないとイケないと思っ居るが、努力が身を結ぶことはない。

「ままならないな……何事も」

「多少は厳しくすべきだと思います。会長は、少し甘すぎる気がします」

「そう言うな、エアグルーヴ」

見捨てる、と言う選択肢はシンボリルドルフの中には無い。自身が果たすべき夢の為に、何より自分自身の信念を貫き通す為にも。

そもそもストロングブラッドは頻繁に呼び出しを喰らうが、問題児と言う訳では無い。レースでは常に一着を取り続け、定期テストでは高順位をキープ。ウイニングライブ無断欠席の常習犯、と言う所に目を瞑れば優等生だ。

「……全くままならないな」

溜息を吐いて、窓を見る。シンボリルドルフの心の中に反して、天気は晴天。雲一つない、澄んだ青空が広がる。

不意に扉が勢いよく開き、1人のウマ娘が飛び出す様にやって来る。飛び込んできた衝撃で、腹部にダメージが走るが平然と振舞う。

グフツと微かに声が漏れたが、きつと気が付いていない筈だ。エアグルーヴが心配そうに見つめるが、気付いていない振りをする。

「カイチヨー……遊びに来たよ!」

「ああ、よく来たな。……そうか」

彼女を見ながら、ふと荒唐無稽なアイデアが思い浮かぶ。——ライバルの様な存在が出来れば、多少はマシンになるのでは? と。

「……いや、無理か」

考えて、即座に否定した。

※

「……失礼しました」

出た瞬間、ストロングブラッドは不躰な視線に晒される。見られる事にも、注目される事も嫌いだ。

当然、まるで全身を舐めまわす視線に対して、良い気もしない。視線を向けられた先を見る。なるべく自然に。

ストロングブラッドに見られた瞬間、向けられていた視線は鳴りを潜め、此方と目を合わせようとしなない。

まるで誰も居ない様に振舞う。

心底不愉快だ。本来であれば、そんな反応を示すのだろうか、ストロングブラッドは只小さく溜息を吐くだけで済みます。

それ以上の何かをしようとは考えない。

寮に戻ると、電気も付けずにそのままベッドに腰掛ける。制服から私服に着替えるべきなのだが、今はそう言う気分には慣れない。

部屋と言うのは持ち主の個性を映し出す、と言えるだろう。本来であれば2人部屋の部屋に居るのはたった1人。

理由が何故なのかはどうに忘れた。

置かれている物は必要最低限。

服が収納された棚に、幾つかの本が収納されている本棚。勉強する為の机に、椅子。身だしなみを整える為の姿鏡に寝る為のベット。

たったソレだけだ。下手をすれば、さつきまで居た会長室よりも少なく、何とも簡素な部屋にも見えてしまう。

「僕は……どうしたいんでしょうか？」

夢を見て、希望を見て、走り続けた。

幸福な日々が送れると信じて走り続けた。

走り続けて、走り続けて、走り続けて、その結果が現在だ。学友がいなければ、親しきライバルがいる訳でも無い。

この暗がりの孤独な部屋こそが自身の全てであり、全財産。

——これは幸福なのだろうか？

仮に質問をした所で、答えてくれる人は誰も居ない。

自分が今、ちゃんと生きているのかも分からない。生きていると言う事も、死んでいるという事も、心底簡単な筈なのに分からない。

何処から取り出したのか、赤い果実を取り出す。小さな口を精一杯開け、果肉に白い歯を立てて齧る。

シヤク、シヤク、シヤク。

乾いた音が部屋に響いた。

甘い味が口の中に広がる筈なのに、何故か錆びた鉄の味がした。

少女の学園生活 1

——ああ、これは夢なんだ、って何となく分かった。

気が付けば、僕は広大な草原の真ん中で寝転んでいた。ふわふわとした草の、気持ちの良い感触を全身で味わい、気を抜けば眠ってしまった。いそいだ。

不意に吹く風は青臭くも冷涼で、僕の頬を優しく撫でてくれる。

本来であれば、僕はトレセン学園の学生寮で眠っている筈だ。夢を夢と自覚する事は余り無いらしいが、寝転びながらそう思った。

「どうかしたの？ ストちゃん？」

不意に声を掛けられる。

誰も居ない筈の草原から。

聞き覚えのある、随分と心地の良い声。

「そっだよ、大丈夫？」「もしかしてお腹痛い？」「だったら大変、お薬もって来なきや！」「薬って何処にあるの？」「さあ、保健室とか？

それとも病院とか薬局！」「アンタたちは、もう黙りなさい」「とても気持ちよさそう」「もうお洋服が草だらけだよ」「アハハ、可笑しい！」「一つだけだった声は、どんどん数が増えていく。1つが2つ。2つが3つと、数えるのも馬鹿馬鹿しい位に。

「……大丈夫？」

心配そうに聞かれて、ようやく気が付いた。

頬を伝う温かな涙の存在を。

どうやら僕は泣いてしまっていたらしい。

見られたくなかったから、恥ずかしかったから、僕は乱暴に目元を拭う。多分、目元が赤く腫れるかもしれない。

けれど、構うモノか。だって、夢なんだから。

「ほら、ストロングブラッド。手を出しなさい」

手が差し出された。

拒む理由なんて無いから、僕は手を取る。感触なんて無い筈なのに、確かに仄かな温かさが手のひらにはあった。

立ち上がると、皆の顔がよく見える。不機嫌そうな顔。無邪気そう

な顔。嬉しそうな顔。普通の顔。楽しそうな顔。

全員が全員見知った顔で、見慣れた顔だ。

だから、これは夢なんだよ。目の前の夢を現実と受け入れそうになつてしまった僕は、自分自身に言い聞かせる。

だって、死んでしまった筈の——もうこの世には存在していない——皆が居るんだから。夢なんだよ。気が付けよ。

自分自身に言い聞かせるが、生憎僕は夢を夢だと受け入れられないらしい。

「そうだよ、これは夢だよ」

「……え？」

「二」だって、貴方が私達を殺したんでしょ？」

気が付けば、皆が笑っていた。酷く歪な笑顔。笑っているのに、笑っていない。向けられるのは憎悪か——はたまた。

瞳は空洞になつて、何も映らない。

何か言葉を発する暇もなく、僕の意識はテレビの電源を消す様に、唐突に途切れた。

※

カーテンから差し込むやや弱い日差しに充てられて、窓越しに聞こえて来る雀の泣き声が鼓膜に届いて、ストロングブラッドは眼を覚ます。

予めセットされていた目覚まし時計が、持ち主を起こす為にけたたましい音を発するが、既に持ち主は起きている。

鳴るや否や、ボタンを押してスイッチを止める。

いつもと変わらない毎日。

少しばかり呆けていたが、ああ朝なのか、と何となく気が付く。

「……おはよう、いってきます」

誰に言う訳でも無い。しいて言うのであれば、自分自身に言い聞かせる様にして、ストロングブラッドは小さく呟く。

新しい朝が来た。

希望の朝、だなんて言われているが、彼女にとっては憂鬱な朝だ。何か、夢を見た気がする。

が、夢の内容は覚えていない。

まるで最初から無かった様に、記憶の片隅に残る事すら許されな
い。

思い出そうとするが、思い出せないのでストロングブラッドは途中で考えるのを止めた。嫌な夢だったのか、楽しい夢だったのか。

それすらも分からずじまい。

取り敢えず、身支度を整えよう。

寝起き直後の酩酊感を味わいながら、備え付けられたロッカーへと赴き服を着替える。降ろした髪もツーサイドアップに結って。

そうして、また1日は始まる。

ストロングブラッドは早朝からランニングする事を毎日の日課としている。

走るコースは何となくと言った理由で適当な為、法則性や一貫性は全くもって無い。街を走る事があれば、山を走る事もあるし、海沿いを走る事もざらにある。

とある市街地の歩道。

信号が青から赤に変わってしまった為、ストロングブラッドはそこで一旦足を止める。少しペースが速すぎたのか、淡い呼吸を幾度となく繰り返す。

珠の汗が頬を伝い、地面に落ちる。

黒紫の髪も汗を吸い取ってしまったのか、少ししっとりとしていた。

ストロングブラッドが身に着けているのは、赤と白のトレーニングウェア。トレセン学園に在学するウマ娘達も使っている代物で、学生寮の自室にはこれと同じものが何着も常備されている。

ふと空を見上げる。

前髪で覆われた目に飛び込むのは、雲一つない仄かな青い空。

優しい光を帯びた太陽も、段々と光力が強くなっていく。普段見慣れた輝きを取り戻すのも、時間の問題だろう。

朝日も、青空も、何もかもがストロングブラッドにとっては鬱陶しい。

キツと睨みつけるが、太陽が消え去る事も、青空が灰色に染まる事も無い。全くもって忌々しい事この上ない。

口には出さずとも、不満げな雰囲気雄弁とそう物語っている。やがて信号が青に変わった。

最初に横に居た乗用車が動き出し、ストロングブラッドはその後に続く形だ。ストロングブラッドが一步出遅れた。が、そんなモノはストロングブラッドにとっては只のハンデにしかない。

レースを想定して、少し本気で走ってみよう。

大きく息を吸い、アスファルトで舗装された地面を思い切り蹴る。

車のエンジン音も、青空も、周囲を取り巻く住宅も——その悉く全てが、ストロングブラッドの意識から隔絶される。

見えるのは正面だけ。

地面を思い切り蹴る——たったそれだけで爆発的な推進力が生まれる。ウマ娘は常人と異なる、類まれな身体能力を持ち合わせている。

だからこそ、車を容易に超える事が出来た。

「……遅すぎます、ね」

これならトレセン学園の適当なウマ娘の方が、まだマシな結果を見せてくれるだろう。とは言っても、車なのだから仕方が無い。

運転手は、窓越しに突如として現れたストロングブラッドを目にしてい、ギョツとした顔で驚いている。

しかし、本人にとってはさして注目するようなことでも無い。ペースを上げて、そのまま車を追い越し、引き離す。

車がストロングブラッドを追い越す事は無かった。

そうして走りに走り続けた結果。

「少し、走り過ぎてしまいましたか」

一体どれ位走ったのか、川沿いの通りまでストロングブラッドは

やって来ていた。走り過ぎてしまったせいか、身体が水分を欲している。

手近な自動販売機にて水を買う。

喉が渴き過ぎていたのか、一口で飲み干してしまう。何度か淡い呼吸を繰り返しながら、周囲を見回す。気が付けば、随分と遠くまで走ってしまった。

一度集中してしまうと、周りが見えなくなってしまうのは昔からの悪い癖だ。

これからの予定をどうするか余り考えていないが、そろそろ時間的にも頃合いだ。取り敢えず、一度寮に戻ってから考える事にしよう。ストロングブラッドはまた走り出そうとして、一度足を止める。

そして、空を見上げた。

空は先程見た時よりも、一層濃い青に塗れ、優し気な日の光は煌々と照り輝く日差しへと変わってしまった。

「今日は本当にいい天気ですね」

前髪の隙間から覗かせる、紫紺の瞳を細めながら、吐き捨てる様になぞう言うのだった。

トレセン学園は、数多の有名なウマ娘を輩出しているが、文武両道を掲げている為、教育にも余念が無い。

ウマ娘と言えど、学生の本分は学業だ。その為、午前は授業を行い、午後からトレーニングが始まると言う流れになる。

当然定期的にテストも設けられ、学年順位も張り出されてしまう。最悪、成績が悪いと補修などになってしまい、レースに出られなくなる可能性も存在している為、おいそれと無下にする事も出来ない。

その為、テストとレースの板挟みになってしまい、四苦八苦するウマ娘は後を絶たない。

「でさ、それがあってとても面白かった……」

「本当に？ 私も、中々良いなと思ってたけど……」

授業が始まる前は、決まって教室や廊下で友達達と談笑に勤しむの

が通例だ。レースの話で盛り上がり、下らない話で笑い合い、共通の話題で意気投合。

ウマ娘養成校とはいっても、中身は何ら普通の学校と変わりない。只レースがあるか、ウマ娘かそうじや無いのか、程度の違いだ。

しかし、1人のウマ娘が来訪した瞬間、樂し気で和氣藹々とした雰圍氣は鳴りを潜める。その場に居る全員が口を噤み、まるで嵐が去るのを待つように、ジツと息を潜める。

やって来たのは紫紺の髪を靡かせた、目元が隠れたウマ娘——ストロングブラッドだ。不躰な視線にさらされるが、当の本人は氣にした様子も無い。

教室の中に入ると、教室もまた同じようになっていて。が、本人にとつてはどうでも良いのだろう。

一番後ろの窓側の席——そこがストロングブラッドの席だ。椅子を引いて座り、通学カバンを横に掛ける。

そして、中から文庫本を取り出して読み始める。挨拶はしない。

した所で、どうせ無視されるのは目に見えているから。

数分程度経った後、周りはようやく談笑を再開する。自身の教室の片隅にいる、ストロングブラッドの存在を意識から外して。

間もなくして担任がやって来て授業は始まる。

授業構成はストロングブラッドが中等部と言う事もあってなのか、国数理社英と言った基本的な五教科と体育。

家庭科や保健などは無い。

担当教員が黒板に文字を書き、身振り手振りや言葉で説明。ソレをノートに書き写したり、教員から出題される質問に答えたりするのが一通りの流れだ。

たまに理科の時間、実験室にて実験もしたりする。が、実験室は現在使用禁止になってしまっている。

何でも突如として爆発してしまったり、まともに使用する事が出来ない状態に陥ってしまっているらしい。

尚、犯人は未だに不明との事。

予定していた授業が全て終わり、教室に備え付けられたスピーカーからチャイムが鳴る。授業終了を知らせると同時に、昼食の時間を知らせる合図でもある。

各々が席を立ち、友達と一緒に食堂へと向かう。

しかし、ストロングブラッドは席を立たない。一緒に食べる人が居ないから、何て言う下らない理由では無い。

そもそもの話、彼女にとって食堂に行く理由が無いからだ。自身の通学カバンを漁り、目当てのモノを取り出す。

真つ赤な果実——りんごだ。

ソレに歯を立てて、ゆつくりと咀嚼する。1人寂しく、シヤクシヤクと音を立てて。酷く不味そうにしながら。

昼食は終わればトレーニングが始まる。

伊達に日本ウマ娘トレーニングセンター学園を名乗っている訳では無く、トレセン学園の設備は充実している。

体育館は勿論の事、スポーツジムや室内プール、レッスン用のダンススタジオ。そして、ストロングブラッドが観客席にて眺めている、練習用のレーストラックもその一つに挙げられる。

円環状の、芝生が生い茂るそこには、数名のウマ娘達が居る。面々から推察するに、今使っているのはチームリギルだろう。

チームと言うのは、複数名のウマ娘が加入している、サークルの様なモノだ。チームに加入しなければ、レースには出られないので加入は必須。

複数存在するチームの中でも、最強と呼び声が高いのがリギル。あの、シンボリルドルフが所属しているチームだ。

観客席にいるお陰か、全体をよく見渡せる。ストレッチをしているウマ娘や、ウォーミングアップを始めているウマ娘。

既にレーストラックを走り始めているウマ娘も居る。

全員が全員、真剣な面持ちで練習に打ち込んでいた。つまり、それ程までにレースに並々ならぬ思いがあるのだろう。

「僕は……嫉妬しているのでしょうか」

誰にも聞こえない程の音量で、ポツリと無意識に呟く。

自分が一体何を言ったのか改めて気が付き、頭を振るう。どうやら今日は調子が優れないのかもしれない。

さっさと寮に戻ろう。

通学カバンを手に取り、踵を返す。

が、足に途轍も無く気持ちの悪い感触を味わった。鳥肌が一齐に立ち、背筋が凍っていく感触を味わう。

原因が何のかは、当に分かり切っている。

ストロングブラッドは勢いよく、自身の足を触っているであろう変態を蹴り飛ばした。

「何をやっているんですか、貴方は」

「げぼふっ!!」

足の裏には、命中した確かな感触が。事実、変態は無様な声を上げながら吹っ飛び、観客席の一つに身体をめり込ませる。

「いやあ、やっぱり何度触っても良い脚だ。お前も、そう思わないか？」

ストロングブラッド?」

蹴られたにも関わらず、爽やかな笑みを浮かべるのは一人の男性。鼻から血が垂れてしまっているので、イマイチ締まらない。

ストロングブラッドは心底呆れたように、大きく溜息を吐く。

「いい加減、僕の足に触るのは止めて下さい」

何とも不思議な雰囲気な男性だ。

血色の良い肌に、普段から鍛えているのかしなやかな身体。左側頭部にそり込みが入っており、くせ毛は一房に纏められている。

精悍と言うよりは、寧ろ「もつと熱くなれ!!」何て熱血漢なセリフが似合う顔立ち。黙っていればモテる事は間違いないのが、中身が聊か残念過ぎている。せめて、他者の足を勝手に触る癖を直せば多少はマシになるのだが。

口に加えているのは煙草——などでは無く棒付きのキャンディー。黄色いシャツの上から、黒いベストを羽織っている為、遠目に見ても一体誰なのか分かるだろう。

彼は沖野と呼ばれている、チームスピカのトレーナーだ。

少女の学園生活2

「頼むから、一度くらい顔を出してくれないか?」

「お断りします」

ストロングブラッドの行く手を阻むように、沖野は佇んでいる。

早くそこを退け、と言うオーラーを明らかにに出しているにも関わらず、沖野は避けてくれる様子が無い。

余りの強情さに、思わずストロングブラッドの口から溜息が漏れてしまう。ああ、全くもって鬱陶しい。

ストロングブラッドは一体何の因果なのか、チームスピカに所属している。別に特筆すべき理由などは無い。皆無だ。

只レースに出る為に席を置くだけだったのだから、チームは関係ない。適当に選んだチームが、たまたまスピカだった、と言うだけだ。

それ以外の理由などは存在していない。

実際入部届を出したきり、ストロングブラッドはスピカのトレーニングは訪れていなかった。いわゆる、幽霊部員と言う奴だ。

幽霊部員なんて居ても居なくても同じなのだから、放っておいても良い筈だ。にも関わらず、目の前の男性——沖野は何故か絡んでくる。

幾ら拒絶して、嫌がっても。

「と言うか、スピカのトレーニングはどうしたんですか? 沖野さんはスピカの皆を引っ張る担当トレーナーですよね?」

「今日は休みだ。最近、アイツら頑張り過ぎてるからな」

頭を乱暴に掻き、棒付きのキャンデーをプラプラと揺らしながら、心底楽しそうに語る。が、ストロングブラッドにとってはどうでも良い話だし、興味なんてモノも存在しない。

頭の中で考えているのは、どうやったらこの変態から離れるかの方法だ。とは言っても、今動けば角が立ちそうになるので、動くに動けない。

「そう言えば、最近もレースで一着を取ったらしいじゃねえか。おめでどう」

「別に褒められる様な事でもありません。一着なんて、普通ですから」
沖野が言っているレースとは数日前に行われたレースを差しているのだろう。名前は思い出せないし、対戦相手の名前も記憶には無い。

只、覚えている事は一着を取ったこと位だ。

とはいっても、ソレはストロングブラッドにとっては当たり前の事で、誇るべき事柄には当てはまらない。

随分と時間が経過していたのか、レーストラックからは威勢の良い掛け声が聞こえて来る。横目に見て見ると、リギルの面々が走り込みをしている。

そろそろ時間的にも頃合いだろう。

「もう帰って良いですか？ 正直、沖野さんとの会話は面倒くさいので、お暇させてもらいたいのですが。と言うか、もう帰ります」

これ以上考えていては駄目だ。

早めに話を切り上げて、帰ろうとする。

が、ガシツと腕を掴まれてしまい、逃走に失敗してしまう。

「……何ですか？」

他に何か、話す事などあっただろうか。考えてみるが、思い当たる節は無い。大体、今日話し掛けてきたのも、偶然出会ったから、またいな感じだったのだから……。

「いや、今日は普通に個別でトレーニングする日だったよな？ あれ？もしかしてお前……忘れてた？」

「……あ」

そう言えばそんな約束をしていた、と思い出すのに時間は掛からない。

話している理由はこれだったのか。

「すいません。忘れていました」

取りあえず、忘れてしまったので謝る事にした。尚、沖野の顔を思い切り蹴った事は謝っていない。

アレは明らかに、向こうに非があるからだ。

——じゃあ頼むから一回だけ……駄目か？

アレを一度でも了承してしまった事こそが失敗だった。

とは言っても了承してしまいうのも仕方が無いと言える。チームで行われるトレーニングを拒んでいたにも関わらず、沖野はめげず何度でも誘って来たのだから。ソレにウンザリしてしまい、等々折れてしまったと言う訳だ。

結局は、沖野の粘り勝ちと言う扱いになる。

それから色々あつて、気が付けば週に何回か個別でトレーニングする様な間柄になってしまっている。

本当にどうしてこうなったのか。

頭を抱えずにはいられないだろう。

仮にタイムマシンがあつたら、必ずやり直したい過去の一つだ。

もっとも、タイムマシンなんて非科学的なモノは存在していないので、どうしようもない。

「？　どうかしたのか、ストロングブラッド？」

しかし、何とも不思議な男だ。そんな感想は紛れも無い、ストロングブラッドの本心だった。ストロングブラッドとしては、沖野の事を鬱陶しいし忌々しい変態とは思っているが、嫌ってはいない。

寧ろ好意を抱いていると言つても良いかもしれない。

ストロングブラッドの立ち位置は幽霊部員。本来であれば真っ先に切り落とされる存在だ。それこそ、教室の様に。

にも関わらず、目の前の男はめげる事も無く、何度もぶつかつて来た拳句、こうやって会話をする程度には仲を深めてしまう。

さらには今まで拒み続けたトレーニングの約束まで取り付けてしまふのだから、その行動力には脱帽してしまふ。

トレーナーと言う職業はそう簡単になれるモノでは無い。

ウマ娘達に必要な様々な知識——トレーニングに関する事や、身体構造に関する事。その他にも、必要な知識は沢山ある——を習得し、ライセンス試験を受けて合格して、初めて一人のトレーナーとして迎えられる。

中でも、複数のウマ娘達が所属しているチームを受け持つ事になるトレーナーは、ベテランの証とも言えるだろう。

本来であれば、チームのトレーニングを優先すべきで、その他の事にかまけている暇はほぼ皆無と言っても良い。

なのに、目の前の沖野は真摯に取り組んでくれる。嫌な顔など少しもせずに、寧ろ途轍もなく楽しそうに。

だからこそ、ストロングブラッドの頭の中では疑問が尽きない。と同時に、どうしようもない程の呆れもある。

大きな溜息を吐き出せる位には。

が、約束は約束だ。

結んでしまったモノを今更無しなどには出来ない。仮に出来たとしても、それはストロングブラッドのポリシーに反する為、決してしない。

「別に、何でもありません。さっさとトレーニングを終わらせましょう」

思った事も、考えた事も、決して口には出さない。出したくないから。伝えたくないから。出せないから。出さないから。

それらしい理由を盾に、言葉にしない。

声に出さない。

だから自身の思いは、そっと胸の内にしなう。

トレーニングとは言ったモノの、身体を限界直前まで鍛えぬくかどうか、体力が無くなるまで走り込むかどうか、そう言ったスパルタな事はしない。

身体を限界だなんて言うトレーニングはオーバーワークになりかねない。最悪、足が駄目になったり、身体を痛めたりしてしまう。

ストロングブラッドが行っているトレーニングは随分と簡単で分かり易い。効果的なのかと聞かれると、余り実感が湧かないので何とも言えないが、トレーナーである沖野が提案したのだから大丈夫だろう。

トレーニング場所は練習用のレーストラック——などでは無く、体育館。従来の体育館の数倍は広く、清潔さを保っている。

本来の学校なら部活動などによって使用されているが、ウマ娘にとってはチームがある意味部活動の様なモノだ。

そして、ウマ娘達が使うのは体育館などでは無く、レーストラック。レースに出るのだからソレに準ずるものを使うのは当然と言える。

よって体育館には誰も居ない為、沖野とストロングブラッドの2人は伸び伸びとトレーニングに励む事が出来る。

身に着けているのは他のウマ娘も着ている白と赤のジャージだ。

そもそもたった一人の為に、大多数が使うレーストラックを使える訳も無い。

練習はその後、数時間程続いた。

「よしっ。それじゃあこれで今日のトレーニングは終わりだ」

体育館の窓から、橙色の日差しが差し込む時間帯にトレーニングが終わった。終わった直後は、チームの皆と談笑したりするが、生憎ストロングブラッドには話す相手は居ない。余韻を感じる暇も無く、そのまま立ち去ろうとする。

「それじゃあまた明日な、ストロングブラッド」
声を掛けられる。

ああ、まただ。沖野はトレーニングが終わると、決まってストロングブラッド声を掛ける——また明日、と。

「……あの」

咄嗟に振り向く。

押し殺したような、か細い声が出る。

自分は一体何を言おうとしていたのだろう。

「ストロングブラッド、どうかしたのか？」

「あ……いえ、何でも、ありません」

自分は一体何を言おうとしていたのだろう。

分からない。

疑問はしこりとして残ったまま、ストロングブラッドは体育館を後にした。

時間も時間なので、大半の生徒達は下校している。その為、トレセ

ン学園内は、気味が悪い程の静寂に支配されていた。微かな音でさえ、やけに大きな音に聞こえて来る。

誰も居ない教室は橙色の日差しに被さっている事もあってか、何とも言えない物寂しさを感じてしまう。

そんな中、ストロングブラッドは備え付けられた更衣室にて、ジャージから制服に着替えていた。スピカの所へ行き、着替えると言う選択もあったが、誰かと出くわしてしまうと後々面倒くさいので却下。

トレセン学園の制服は、水色を基調とした冷涼感漂うデザインとなっている。胸元につけられている大きなリボンも特徴の一つだ。

夏も段々と近づいているので、袖の短い夏服だ。

きついトレーニングでは無かったにしろ、数時間は体育館にいたせいなのか、ジャージは汗で濡れてしまっている。

脱ぐのに若干手間取ってしまうが、さして問題にはならない。

「……何が言いたかったんでしょうか」

あの時、どうして自分はトレーナーに——沖野に声を掛けたのか。理由を説明する事はできない。

考えれば考える程、頭の中はぐちゃぐちゃになっていく。関係の無い、取り留めも無い事まで考えだしてしまい、考えは纏まらない。

——分からない。

ソレが結論だった。

やっぱり今日は調子が悪いのだろう。汗まみれのジャージから、冷涼感のある制服へと着替えを済ませて大きく溜息を吐く。

憂鬱だ。

何て言っても仕方が無い。取敢えずさっさと着替えを済ませて帰ろう。どうやら今日は本当に調子が悪いらしい。

考えに区切りをつけて着替えを済ませる。

更衣室の扉を開けて帰ろうと思った時、ふと廊下の窓越しに1人のウマ娘を見かけた。そして、ストロングブラッドにとって、彼女とは一方的に面識があった。

普段からトレーニングを心掛けているのかもしれないが、華奢な身体つきだ。それこそ、力強く抱きしめれば折れてしまいそうな程に。可愛らしく、愛らしい顔立ちは面影を無くしており、今は真剣そのもの。遠目に見ている今でも、その気迫は嫌でも伝わってくる。

白いメッシュが施された亜麻色の髪は腰辺りまで伸びており、走りやすさを考慮してなのか、ポニーテールに結ばれている。

身に着けているのは先程までストロングブラッドも身に着けていたジャージ。にも関わらず、勝負服を着けているような華やかさも存在していた。

「確か、アレは……恐らくは、トウカイテイオーですか、ね？」

太陽の様な少女が、夕日に背を向けて、レーストラックを走っていた。

既に下校時間も近くなっている。

しかし、テイオーはトレーニングを終わらせる雰囲気では無い。

寧ろ、これからと言わんばかりに、縦横無尽にレーストラックを駆け回る。酷く辛そうで、酷く苦しそうで——でもとても楽しそうだった。

「……………」

気が付けば、随分と長い時間見てしまっている。

これがある種の才能と言う奴なのだろうか。

それとも、

「…………羨ましい、とそう思っているから？」

輝いている存在は、数多の眼を引く。

自分では無い存在に、自分では到底なれない存在だから、こうして熱心に魅入ってしまったのだろうか。

トウカイテイオーの走る姿を眺める。

——分からない。

沖野の件と言い、テイオーの件と言い、今日は分からない事だらけだ。調子が悪いと言っても、流石に限度があるだろう。

これ以上見ていたら、何となくいけない気がして、何となく駄目な気がして、ストロングブラッドは立ち去ろうとする。

「君の眼から見て、ティオーはどう映る？」

不意に背に声を掛けられて、足を止める。

しまった。気が付かない振りをしておけば良かった。止まった直後に後悔するが、無視して帰る訳にもいかないだろう。

一体何時からそこに、何て事は考えない。

既にそこに居るのだから。

「さあ、僕にとってはどうでも良いことです。特に、興味はありませんが、可もなく不可もなく、じゃ無いんですか？ まだ、どうなるか分からない訳ですし。そうですね——シンボリルドルフ会長さん？」

玉虫色の解答を投げかける。

纏っている空気が他のウマ娘とは違った。

身に着けている制服は、ストロングブラッドの制服と何ら変わりないデザイン

黒と白のメッシュが施された茶髪の髪も、夕日に照らされているせないなのか、やけに神秘めいて見えてしまう。

ストロングブラッドにとって、今一番会いたくない人だった。

「困った奴だろう？ さっきもオーバーワーク気味だと注意したんだが一向に止める気配は無くてな、私も困っているのさ」

「ソレを僕に言っただうするんですか？ もう一度注意したらどうですか？ そろそろ下校時刻も過ぎそうな訳ですし」

話されても興味が無い。

ストロングブラッドは生徒会長に対して、慇懃無礼に意見する。迷惑がられている、と言うのはシンボリルドルフも薄々察しているのだろう。

それでも怒らないのは、年長者としての余裕なんだろうか。

苦笑するだけに留まっている。

普段から真顔や仏頂面しか見ていないストロングブラッドにとって、少し意外だった。

「分かるか？ ティオーと君の違いは」

「……………」

沈黙は肯定だ。

シンボリルドルフが何を言いたいのかは、ある程度予想がついている。

「君は……」

「止めて下さい」

シンボリルドルフの言葉に覆いかぶさるように、ストロングブラッドは少し大きめに声を上げた。

分かっているのだから、言わないでくれ。

自分は今、どんな顔をしているのだろうか。睨んでいなければ良い。恐い顔をしていなければ良い。普段通りの表情を保っていたら良い。

けれど、少し無理かもしれない。

「用事があるので、失礼します」

用事なんて無い。この場から逃げる為の嘘だ。何故か、この場から離れる為には、正当な理由が無ければいけないような気がした。

校門から出る直前で、足を止めた。

朝に見た時と同じ、雲一つ無い茜色の空と、もうすぐで沈んでしまおうと言うのに、燦々と照り輝く夕日。

——太陽は嫌いだった。

——とても眩し過ぎるから。

——自分が霞んで見えて仕方が無い。

縛り付けられた夢

「ねえ、皆って将来の夢とかある?」

1人の少女が問いかける。呼び声に顔を挙げたのは、数名の少年と少女。その中に、1人だけ容姿の異なった者がおり、頭には二つの耳が。

下半身には箒の様な尻尾が出ている。

「将来の夢……ですか?」

「ストちゃんはウマ娘なんだし、やっぱりレースに出て世界一になるとか?」

「世界一?! すげー、ストすげー!! でも、ストは足も速いし、力も強いし、俺達の事を守ってくれているし、行けるだろ!!」

「いや、流石に難しいかな、と」

世界一と言う言葉に反応して、1人の少年が興奮気味に肯定する。周りもそんな少年につられる様にして、肯定の意を示す。

が、ストちゃんと呼ばれる少女は余り乗り気では無い。走る事は余り嫌いでは無いのは確かだが、レースに出るなんて想像もつかない。

正直な所、今こうやって皆と遊ぶ方がずっと楽しい。けれど、小さく呟いた否定は周囲に聞き入れられず、寧ろ余計に場を沸かせてしまふ。

「……これ、どうしましょうか?」

「うんうん。どうしようかな?」

助けてくれ、と懇願を含めて視線を送るも、一番仲の良い友人は只々ニコニコしているだけだ。どうやら、手を貸すつもりは無いらしい。

「僕はそんなのには出ませんし、世界一になるつもりなんてありません」と断言するのは簡単だ。口に出せば、全てが終わる。

けれど、皆が期待してくれていた。何時か友人がレースに出て、テレビに出演して、周囲を沸かせてくれる。

世界一のウマ娘になって、感動や希望を世界中に届けてくれると。

友人達は心の底から、本気で信じているのだ。

「だったら……裏切れる訳無いじゃ無いですか」

否定なんて出来ない。

仮に否定してしまえば、きつと友人を悲しませる事になってしまふ。少女は皆の事が大好きで、大切で、だからこそ出来ない。

悲しむよりは、笑顔になってくれた方がずっと良い。ああ、なんて馬鹿なんだろう。自嘲も含めた溜息を吐き、少女は——ストロングブラッドは言う。

「分かりましたよ！ なります！ なければいいんでしょう！ だったら僕——ストロングブラッドは世界一のウマ娘になってやりますよ！」

声高らかに宣誓する。聊か声が大きすぎたようだ。言い切ると、皆はポカーンとした様子でストロングブラッドを見つめて、歓声を上げる。

まるで、今世界一になったみたいでは無いか。

余りの熱狂にストロングブラッドはつつい苦笑してしまう。そして、皆と一生に歓声を挙げる。一緒に、喜びを分かち合う。

言ってしまうば只の夢。

必ず叶うなんて保証は無い。けれど、その事実を知らない子供達の純粹無垢の特権だ。何時か叶う。必ず叶う。

何の根拠も理由も無い幻想を胸に抱いて、そして大人になる。だから、きつと何時かは忘れてしまうのだろうか。

皆も、自分自身も、夢を叶える事も無く、記憶の片隅に置いておくだけ。何時か叶う、なんて時は来なくて、何時かの笑い話になるのだ。あの時はこんな事があったよね、と。酒のツマミや肴にでもするみたいに、馬鹿みたいに笑い合っつて。

笑い合っつて、笑い合っつて、昔を懐かしむ。

そんな未来もあつたのに、そんな未来は無くなった。記憶の中の皆の顔が、1つ、また1つと黒に染め上げられる。

あの時の記憶も段々と薄れていき、夢みたいな時間も色あせる。

皆死んだ。誰もかれもが死んで、残ったのはたった1人のウマ娘

と、叶えるつもり何て無かった夢の二つだけ。

——世界一のウマ娘になる。

この夢こそが、彼女の生きる理由であり、存在理由になった。叶える、叶えないといけない。絶対に、何が何でも、

例えばどんな手を使ったとしても。

絶対に。絶対に。必ず。

それが唯一の償いなのだから。

※

時間帯は深夜。

凡そ、日本に居る全ての人達が寝静まっている時間帯だろう。トレセン学園の学生寮もその例外などでは無く、立ち並ぶ部屋の全ての明かりは消えている。

窓越しに見えるのは黒。つまり寝ていると言う訳だ。その筈なのに、1つの部屋の明かりが突如として灯された。

その部屋の人物は、ストロングブラッド。

「……さて、行きますか」

これから何をするのか。自分自身に言い聞かせる様にして、寝転んでいたベットから起き上がる。向かうのは幾つもの洋服が収納されているロッカー。

その中からトレーニング用のジャージを取り出し、寝間着からジャージへと着替える。姿鏡を見て、身だしなみを整え、鞆に必要なモノを詰める。

準備はこれで全て完了。しかし、これで終わりにとはならない。何故なら、ストロングブラッドがこれから行うのは無断外出なのだ。

門限外と言うおまけ付き。

仮に見つかれば寮長からのカミナリは確定だし、反省文やら何やらと言った、重い罰も課せられる事になるだろう。

無論、ストロングブラッドもそんな事は分かっている。分かっている上で、こんな無謀な事をしようとしているのだ。

ゆっくりと鍵を開けて、扉の外を確認する。長い廊下に照明はつけられておらず、ほんの少しの距離ですら暗闇に溶け込んでいる。

耳を澄ませても声は愚か。微かな音すらも、ストロングブラッドの耳に届く事は無い。完全な静寂。

ああ。やっぱり、今は夜なのか。

当たり前の事実を再認識した後、ストロングブラッドはゆっくりと扉から出る。階段を降りて、玄関の扉を開ける。

最初に目に飛び込んできたのは、煌々と輝く月。形は球体で、満月。深夜と言う事もあってなのか、やけに明るく見えてしまう。

不意に奇麗、と感じてしまう。

月は好きだ。

少なくとも、太陽みたいに眩しくは無いのだから。優しい光なのだから。伸ばせば手に届くのでは無いか？ 何て錯覚出来るから。

だから、好きだ。

月を一瞥した後、軽く準備体操。通りかかる車の数もまばらで、行人の姿も居ない。今なら外に出たとしても、気付かれる事は無い。

軽く準備運動をした後に、走り始める。普段のレースとは異なり、別に一着になる必要は無いので、少しペースを落として。

体力にも余裕を持って。

「よーい、スタート」

それでもレースを想定して、走り始める。

走り始めは意外にも上手く言ったな、と思いつながら一歩、一歩と確実に地面に。足跡を刻みつける程に、力強く。

一歩ずつ駆け抜けていく度に、周囲の風景は足早に変わっていく。明かりらしい明かりは、等間隔で設置されている街灯のみ。

窓越しに差し込まれていた光も無くなり、誰もかれもが寝静まっているという事を、改めて理解する。

と同時に、まるで世界中で自分ただ一人しかいない様な、孤独感を微かに感じた。が、それもほんの一瞬。

自分は一体何を馬鹿な事を考えているのだろう、と頭を振って霧散させる。寂しいだなんて慣れた環境だ。

ソレを今更になって感じるのは、只の笑い話に他ならない。先程の考えを振り払う様にして、少しペースを上げる。

少しとは言ったモノの、人とウマ娘では身体の構造も、基本的なスペックも異なる。傍から見れば、結構な速度。

その上時間帯は深夜。薄暗い環境下で、爆走するウマ娘を見ればアレは一体何なのだろうか!? だなんて驚き、戦々恐々する事は間違いない。

都市伝説に取り上げられる可能性もある。

しかし、そんなリスクは考えていないストロングブラッド。目的地に到着する為に、淡々と走り続ける。

立ち並ぶ色とりどりの高層ビル、住宅街、24時間営業のコンビニ、通り抜ける高級車、ギョツとした表情の通行人。

普段から見慣れた当たり前の風景。

けれど、時間帯が変われば見方も異なり、綺麗だと思える事だろう。だが、ストロングブラッドは周囲を見る事は無い。

あくまでストロングブラッドの目的は、目的地へと向かう事。風景を見る事も、楽しむ事も必要では無い。

只、走るだけだ。

只々走り続けるだけだ。

走って、走って、走って、走って。

目的地へと辿り着く。

何とも大きな運動場だ。楕円型に広がっており、仮にウマ娘が1人走るには持て余してしまいそうな広さを誇っている。

普段から見慣れている校舎とは異なり、少々年代が古そうな、木材造りの校舎。

長方形の形に仕上がっているが、真ん中は少し上に出っ張っており、丸型の時計が埋め込まれている。

但し、既にその時計は壊れている。

時計だけでは無い。運動場は至る所に雑草が生えており、誰が手入

れをした後も無い。そのまま放置されている。

校舎は所々が痛んでおり、窓ガラスの大半が割れている。壁には一体誰が書いたのかとてもヘタクソなラクガキや大きな文字が描かれていた。

空き缶やお菓子の袋などが処理されずに散乱しており、誰かがそこに居た形跡は残っていたモノの、校舎としての本来の役割は既に終わってしまった。

目の前に広がっているそこは廃校だった。

深夜と言う事もあってか、不気味さはより一層際立つ。

窓から此方を覗く人影が現れるのでは。はたまた、誰も居ないのに明かりが点くのでは、何て幽霊やお化けを信じているモノなら、少しは不安がってしまうだろう。

どうして廃校なったのか、と言った背景などは全く知らないので、幽霊が現れる可能性もゼロでは無い。

「タイムとしては……少し、伸びましたか」

しかし、本人にとつては見慣れた光景で、仮に幽霊が現れても気にも留めないだろう。さして気にした様子も無く寧ろ、寮からここに到着するまでのタイムの方を気にしている。

ここから寮までは結構な距離だ。が、ストロングブラッドに掛かれば——異常な身体能力を持つ、ウマ娘に掛ければ造作でも無い事だ。

額に浮かび上がった汗をタオルで拭い、水分補給をしながら、

「それじゃあ始めますか」

小さく呟く。

この廃校に来た目的は、トレーニングをする為。ストロングブラッドは余り睡眠を必要としない身体の為、時々ここを訪れる。

見つけたのは只の偶然で、朝の日課であるランニングの最中にたまたま見つけたのだ。以降、誰も使っていないので勝手にしようしている。

勿論、誰にもバレない様に細心の注意を払って。

やる事は今日沖野と行ったトレーニングの反復練習と、体育館では行えなかった走り込み。廃校の運動場とは言え、広さは十分だ。

レーストラックの代用として使える。
そうして、ストロングブラッドはトレーニングを開始した。

時間も深夜。

静寂と暗闇に支配される時間。

こんな時間帯まで起きていれば、眠気が全身に襲い掛かり、目の前にベツトがあれば飛びつきたくなる程に眠たいのかもしれない。

だが、ストロングブラッドは他とは違う。

少し特殊な身体をしており、それ程までに睡眠を必要とはしない。
3, 4時間。最低でもその程度眠れば、体力は回復するし、明日に響かない。

他のウマ娘達のように、過度な食事をとらなかつたとしても、身体は健康的な状態を保つし、食事の必要性も微々たるモノ。

だからこそ、こんな時間帯まで起きていられる。

そして、こんな時間帯でもトレーニングをする事が出来る。

廃校があるのは人里から離れた場所だ。

周囲は山々に覆われており、自然が豊か過ぎる。普段見慣れた建物も、等間隔で設置されていた街灯も無い。

あるのは淡い光を放つ満月と、校舎の周りを囲むように植えられた樹々だけだ。

辺りは静寂に満ち満ちており、まるで世界に自分一人しかいない様に錯覚してしまう。何時もだったら聞こえてくる虫の音すらも、今夜は聞こえない。

聞えてくるのは、地面を駆ける音。

踏みしめる音。

荒い息使い。

微かに漏れ出る声。

全て、ストロングブラッドから発せられる音だ。

運動場をトラックレースに見立てて、思い切り駆け抜ける。通り過ぎると、一陣の風が吹く。凄まじい速度だ。

だが、見えているのは自身が走るコースのみ。それ以外の全ては意識の外へと切り離され、隔絶される。気にしないし、気にならない。今、この瞬間は、レース以外の全てがどうでも良いのだから。

芝生の柔らかい感触とは少し異なる、硬い地面の感触を足の裏で十分に味わいながら、ゴールした——と言う想定。

誰もストツプウオッチを切ってはくれないので、手に持った自分自身で計測する。食い入るように結果を見て、納得できなかった。

髪を思い切り掻き毟り、また走り始める。

休憩はほんの数分程度、リュックサックの中にあるペットボトルを取り出し、水を乱雑に喉に流し込む。

無理矢理流し込んでしまったせいなのか、淡い呼吸を繰り返す。口元に塗れた水をジャージの裾で乱暴に拭う。

「もう一回」

満足するまで。

納得するまで。

安心できるまで。

繰り返し走る辛さも、全力疾走した時に感じる息苦しさも、走り過ぎてしまったせいで発せられる足の痛みも、全てを噛み砕いてストロングブラッドは走り続ける。

まるで何かに憑りつかれてしまったように。

何度も何度も、ストロングブラッドは運動場を駆け抜けた。気が遠くなる程の時間。数えるのも馬鹿馬鹿しい程に、運動場を往復する。

そして、体力が尽きてしまったのか、はたまた足をくじいてしまったのか、呆気なく地面に倒れた。

気が付けば、砂埃が漂う地面の感触を味わっていた。何をしているのだろうか。まだまだ納得できるタイムは出ていないのに、寝ている場合じゃない。

力を込めて立ち上がろうとして、また倒れる。足はプルプルと震えて、まともに動いてくれない。腕は力が入らず、使い物にならない。

何故かうつ伏せから仰向けになっていて、視界の中に満月が映っ

た。必然に尽くしがたい程に奇麗なお月さまだ。
届かない。

分かり切った結果なのに、僕は月に手を伸ばしていた。
届く筈なんて無い。

それでも手を伸ばして、虚空を握った。

——幸せになりたかった。

昔の僕はそんな事を目標にしていた。

優しい家族に囲まれて、毎日笑顔が絶えなくて、学校に欠かさず
言って、良い高校良い大学に入って、良い仕事に就いて、とてもいい
人と結婚して、最後は良い人生だった何て言って死にたい。

そんな事を思っていた。きっとそんな人生を送れるだなんて思っ
ていた。何の根拠も理由も無い癖に。

僕は転生したんだから。前世の記憶、って奴を持っているのだから
楽勝だ。何て、完全に人生を舐めていた。

いや、違う。調子に乗っていたんだ。

だから、だから、あんな事が起きた。どうにか出来た筈なのに。ど
うにも出来なくて。何も出来なかった癖に、僕は今も生きている。

今日もこうして、呼吸している。歩く事が出来るし、声を発する事
も出来るし、食べ物を食べる事が出来ている。

「何、やってるんですか」

本当に僕は何をやっているんだろう。こんな所で眠って、寝転ん
で、意味が分からない。こんな事をしていてる場合じゃ無いだろう。

幸せになる権利なんて何処にも無いんだ。

足も腕も震えている。酷使しすぎたのかもしれない。けれど、どう
だって良い。生きている。呼吸している。死んでいない。

だったら問題なんて全然無い。

頑張るんだ。

文字通り、死に物狂いで。

命を削り取るほどに。

それしか出来無いんだから。

「——世界一のウマ娘になる為には」

いつか交わした約束。

いつか笑いあう為の約束。

戯言みたいだった約束。

もう、永遠に笑い合う事が出来なくなった約束は、彼女を縛り付ける鎖に変わった。それだけでしか、彼女は償う事が出来ないから。

不意に夜風が吹く。

雑草たちが靡き植えられていた樹々も揺れる。そして、ストロングブラッドの覆われていた前髪も払われ、隠されていた顔が露わになる。

透き通るような紫紺の瞳。

見つめられれば、余りの透明度に、まるで心を見透かされている様に錯覚してしまうだろう。但し、ソレは片方だけだった。

痛々しい火傷跡がもう片方には色濃く刻まれ、瞳は紫紺の色素を失い、淀んだ白色に変わってしまったている。

一生癒える事が無い傷跡。

そして、彼女の罪の証。

ストロングブラッド——彼女は眼に涙を溜めて、歯を食いしばりながら、また走り出した。世界一のウマ娘になる為。

いない筈のもう一人

スピカの部室。

複数のウマ娘達が利用する、と言う事もあつてなのか、部屋はそこそこ広い。

着替える為のロッカーが並び、中心には白い机に複数の椅子。作戦会議などを行う為の、キヤスター付きのホワイトボードも置かれている。

レースなどに使う必要な備品も置かれている他に、ここでの生活も懸念してなのか、はたまた頻繁にお泊り会でも開催されているのか、薄型の液晶テレビや冷蔵庫なども置かれており、本来の部室とは少々異なる風変わりな様だ。

椅子に座っている、赤と白のジャージを身に着けたウマ娘——スペシャルウィークは腕を組みながら、うーんと頭を悩ませている。

色の濃い茶髪は、しかしソレ一色で染まっている訳では無く、無く隔てる様にして、中心の髪は白色に染まっている。

瞳は夜空の隅々までも閉じ込めた、青紫に彩られ、人懐っこいその面差しは見る人を自然と笑顔にしてしまう魅力があるだろう。

「どうしかしたのか？ スペ？」

何かを悩んでいる素振りのスペシャルウィークに声を掛けたのは、腰辺りまで伸びた銀髪に、長方形の帽子とヘッドホンの様な何かを身につけたウマ娘——ゴールドシップだ。

黙れば美人、喋れば奇人、走る姿は不沈艦との呼び声も高く、ウマ娘界屈指の変人でもある。が、今は心配そうにスペシャルウィークを見つめている。

「あ、別にそこまで大した事じゃ無いですよ。只、スピカって今は7名の筈ですよ？」

「うん。まあ、確かにそうだな」

スピカに在籍しているメンバーは、海外留学中のサイレンススズカを除いて、スペシャルウィーク、ゴールドシップ、ダイワスカーレット、ウオツカ、トウカイテイオー、メジロマックタイーンの総勢六名だ。

「で、それがどうかしたのか？」

「いえ……別に気にする事も無いんですけど——スピカって7名居る筈なのに、8名になってるんですよ」

「おいおい。それはマジかよ！ トレセン学園七不思議が八不思議になる程に、ヤベエ事じゃねえか!!」

気が付いたのは只の偶然だった。最初は何かの間違いかと思っていたのだが、考えれば考える程良くない方向へと思考が傾き、収拾が付かなくなってしまうている状態だ。

気になり過ぎて、普段であれば5杯位は食べるご飯も、精々4杯位にまで落ちてしまった。スペシャルウィークとしては、由々しき事態なので、出来る事なら早急な解決が求められている。

「何々、どうかしたの？」

「皆さん、今日は速いんですね。それで、一体何の話？」

少し遅めにやって来た、見るからに気品溢れる、絹の様にサラサラとした銀髪が特徴的なマックイーンとトウカイテイオーも話に加わる。

スペシャルウィークが一連の流れを説明して、全員が頭を抱えてしまう。

「7名、にも関わらず8名、と記載されている。それは確かに、少々不気味ですわね」

「記載ミス、って訳でも無いんだよね？」

了承する意味を込めて、スペシャルウィークは力強く頷く。調べてみると、8名だと言うのは事実だと嫌でも理解してしまう。

にも関わらず、スピカに居るのはスズカを除いて6名だけだ。数が合わない。

「いや、もしかするとこれはある種の供養なのかもしれない」

「……く、供養、ですか？」

「急に何ですの、ゴールドシップ。真剣な顔をして」

唐突にゴールドシップが真剣な面持ちで話し始める。供養、と言う不穏なワードを聞き、三人はそれぞれ耳を傾けてしまう。

マックイーンは少し呆れ顔だったが。

「スピカは少し前までは誰も居なくてな。加入していた奴らも、ほとんどが諸々の事情があつて辞めてしまった訳だ。しかし、その中で思い詰めていた奴が居てだな……」

「え？ ま、まさか」

「そう、そのままかだ!! 在ろう事か、思い詰めていたソイツは何を血迷ったのか、この部屋にて首を括つて自殺してしまつたんだよ!!」

顔面を近づけ、おどろおどろしい口調で叫ぶゴールドシップ。

内容の恐ろしさと、ゴールドシップのホラー演出のせいもあつてなのか、三人は悲鳴を漏らしながら抱き合つてしまう。

「だから、ソイツの為に今でもお前はここに居るんだぞ、と言う供養も兼ねて、本来であれば7名を8名にしている……つて言う怪談をゴルシちゃんが今考えました!」

「貴方、本当にいい加減にして下さいまし!」

「本当に、さっきの話は怖かつたんですからね!」

「嘘だよね?! 本当に作り話だつたんだよね!!」

その時、扉が開き、2人のウマ娘がやつて来た。1人は茶色の髪をツインテールに結び、頭には豪華なティアラを乗せている。

勝気そうな顔は自身の現れなのか、中等部一年とは思えないプロポーシオンを持ち合わせた——ダイワスカーレット。

もう一人は黒い髪は短く切り揃えられ、片目は前髪で覆い隠されている。全てが黒一色か、と言われればそうでは無く、所々に白も混じっている。

耳や髪の両側には飾りが施されており、身体つきは中等部としては年齢相応。ダイワスカーレットとは好敵手の関係にある、ウオツカ。「すみません。遅れました……つてどうしたんですか?」

「まだ始まつていないみたいだけど……?」

部屋にておりなされている光景はおおよそ一瞬で理解できる様な状況でも無く、2人は固まつてしまう。

取りあえずスペシャルウィークが事のあらましを話し、人数も多くなつてきたので、各々椅子に座つて会議を行う事に。

ホワイトボードにはでかかど『居ない筈の8人目を暴け!! ゴル

シちゃんの奇妙な事件簿』などと書かれている。

一体どうしたのか、様々なフォントまで使われていた。

誰も突っ込まない。

マックイーンはツツコミたそうにしていたが、ツツコンだら負けだと思っ居るのか、グツと堪えて我慢する。

机にはスナック菓子や、チョコレート菓子。はちみつドリンクなどと言ったモノまで並べられており、ある種のお祭り騒ぎだ。

「と言う訳で、私達は8人目の謎を解き明かさなきゃいけない訳だ!!」どこから持ってきたのか、お天気キャスターなどが使う、矢印のついた棒を取り出してゴールドシップはホワイトボードを叩く。

「とは言ったモノの、手掛かりらしい手掛かりは無いんですよね?」

「いや、手掛かり位は……確かに無かったな」

ダイワスカーレットとウオツカは、それぞれチョコレートがコーティングされた棒状のお菓子を一本ずつ口にしながら言う。

「確かに、そもそも手掛かりが無いんじゃないですかね」

マックイーンも紅茶を飲みながら同意する。

「スペちゃん。そう言った手掛かりはあった?」

「え? いや、気になって探ってみたりしましたが……見つかりませんでした」

はちみつドリンクを啜っていたテイオーの問いかけに、スペシャルウィークは数本の人参を齧りながら答える。

申し訳ないと言いたげに下を向く。

「別にそこまで気にする事でも無いでしょう。大体、8人目と言うのが怪しすぎますわ。私達スピカは総勢7名なのでですから、8名はどう考えても記載ミス。それで事足りるんじゃないのです?」

「え——、それじゃ面白く無いじゃん」

マックイーンが結論を述べると、ゴールドシップは心底つまらなそうにしながらブーブーと文句を垂れる。

「つまらないとかつまらなくないとか、そう言う問題じゃ無いでしょう! 大体、何ですか! そのゴルシちゃんの奇妙な事件簿とは! ちゃんと私達の名前も書きなさい!」

「いや、突っ込む所はそこじゃ無いですよね！」

議論は纏まらず、段々とヒートアップしていく。

とうとう収集が付かなくなってしまうかけたその時、

「お前ら。部屋が騒がしいが、何かあったのか？」

扉から顔を出したのは、側頭部にそり込みを入れ、くせ毛を一つに結んだ、何とも特徴的な髪型の男性。

黄色いシャツの上から薄手の黒いベストを羽織っており、スピカの面々は見慣れた人物だ。沖野トレーナー。

スピカを担当しているトレーナーだ。

「うん？ 何だこれ 『居ない筈の8人目を暴け!! ゴルシちゃんの奇妙な事件簿 withスピカ andメジロマックイーンii』って。……いや、訳が分からない」

最初に目に入ったホワイトボードの内容を見て、苦笑する沖野。そんな沖野に対して、スペシャルウィークは勇気を出して質問した。

「あの。トレーナー」

「どうかしたのか？ スペ」

「実は、何故かスピカの人数が7人では無く、8人と記載されているのを知ったんですけど」

「うん？ ……ああ、ストロングブラッドの事か」

少し考えて、口にした。

聞きなれないウマ娘の名に、各々が沈黙と言う反応を取る。沖野はやべえ、言ってしまった、とでも言いたげな表情で口を抑えている。

これはマズい。

本能的に身に迫る危険を感じ取ったのだろう。

「悪い。実は少し急用を思い出した……今日は自主練とす……」

「行かせる訳無いだろうが!!」

ダツシユで出口に向かおうとする沖野に対して、ゴルシはドロップキックを喰らわせる。見事に入り、沖野は床に倒れる。

「マックイーン!!」

「任されましたわー！」

まさに阿吽の呼吸。そう断言しても良い程に、ゴールドシップの意

思をくみ取り、すぐさまマックイーンは沖野に関節技を決めに掛かる。

「ちよっ、ちよっ……タンマ！ タンマ！」

「良いぞマックイーン！ お前お得意の関節技で、トレーナーを締めちまえー！」

「さっさと吐いて下さいまし！ じゃないともっときつくなりますわよー！」

「痛い！ 痛いから！ 一度離せ！」

懇願も虚しく、関節技の痛みは増していくばかり。

「お願いしますトレーナーさん！ 教えてください、八人目を！」

「お願いだよ、トレーナー！」

「お願いだから！」

「頼むから！」

ゴールドシップとマックイーン以外はトレーナーを助けようと動くのでは無く、そのまま自身の要求を通そうとする。

傍から見れば、酷すぎる絵面だ。

「分かった。分かったから、早く俺を助けて！！」

沖野の絶叫にも聞こえる叫び声が、スピカの部室に轟くのであった。

「——ストロングブラッド。それが、8人目の名前、ですか」

「ああ、そうだ」

観念したトレーナーの口から聞かされた名前に、全員覚えは無いのかと頭を唸らせる。そうして、最初に思い出したのは、ゴールドシップだった。

「ああ、そう言えば居たな」

ポンと手を打ちながら、納得したような快活そうな笑みを浮かべる。メカクレ、と言う聞きなれない単語に、一同の視線はゴールドシップに集まる。

「どう言う事なんですか？ ゴールドシップさん」

「いやあ、一時期このスピカには部員が居なかったんだけどさ、そんな時にソイツ——ストロングブラッドは加入して来たんだよ。まあ、その後一度も顔を合わせてないから、忘れちゃってたけど」

「って事は、結構な古株ですよね？」

「でも、一度も会った事は無いんだよな？」

「だったら尚の事、どうして私達と顔を合わせないのでしょうか」

「もしかして、とつても恥ずかしがり屋だったりして？」

「出来れば、スズカさんにも会わせられたです」

ダイワスカーレットは驚き、ウオツカは疑問そうに。マックイーンは少し不満げな様子になり、テイオーは考察しながら。

スペシャルウィークは少し悲しそうにしながら、各々が反応を見せる。

「少し込み入った事情があつてな。まあアイツもお前らを邪険に……いや、割と一癖も二癖もある面子だし、もしかすると妥当な判断か？ ……って、ちよつと待て！ 俺が悪かったから！ ストップ！ ストップ！」

沖野が余計な事を口走った瞬間、大半の眼がギロリと鋭く光り、獲物に襲い掛からんとする肉食獣になる。

沖野の謝罪や説得も難しく、スペシャルウィークを除く他はトレナーに襲い掛かり、各々得意な関節技を決めに掛かった。

「もう少しでストロングブラッドのレースがある！」

沖野の一言で、全員の動きは止まる。

「それに連れていくから、勘弁してくれ！」

「二二分かったけど、それはそれ。これはこれ二二」

結局沖野は関節技を決められ、また絶叫が響き渡るのだった。

圧倒的で、一般的なレース

レースに出場する選手の控室。

その内の一つに、ストロングブラッドはいた。プラスチック製の椅子に座り、シャクリ・シャクリと微かな音を立てながら、リングを齧っている。

部屋の中は意外にも広く、中心にはソファと椅子。着替え用のロッカーが並び、身だしなみをチェックする為の鏡が埋め込まれた台まで用意されている。

ストロングブラッドの私物は少なく、数個のリングと小さな肩掛けの鞆。

たったそれだけだ。

レース直前。

本来ならば身体を忙しなく動かしたり、手の震えが止まらなかったり、と言った感じで少なからず緊張していたりするが、ストロングブラッドにソレは無い。

手持ち無沙汰な感じで、黙々とリングを齧っている。

一言も声を発する事は無く、只々室内はリングを齧る音だけで埋め尽くされる。

誰かが応援にやって来る事も無く、只々レースが始まるその時を待っていた。身に纏う衣服は普段から着用しているトレセン学園の制服でも無ければ、赤と白の専用のジャージでも無い。

ゴシックロリータと呼ばれる服と、メイド服を混ぜ合わせた様なデザイン——レースに出る際に身に着ける、勝負服。

黒を基調としており、所々に細かな刺繍や装飾も施されている。気合の入れようもレースに向ける真剣さも、普段とは異なっているのは明白だ。

「ストロングブラッド、大丈夫か？」

控室の扉が開き、黄色いシャツに黒いベスト。特徴的な髪型の、一応ストロングブラッドのトレーナーでもある、沖野がやって来る。

友達や知人が居ないストロングブラッドを気遣ってなのか、彼はこ

うしてレースが始まる前には、いつもこうやって顔を見せに来る。

「別に問題はありません。普段と変わりませんし。いつも通り僕が勝ちます」

勝ちたい。や、勝てるかも、と言った曖昧な言葉で濁したりはしない。

勝つと断言する。

「そうか。お前がそう言うんだったら、まあ大丈夫だろう」

『お前が勝つって、俺は信じてるぜ』と。反応なんて返って来ない事を知って居ながら、沖野はそう言い残して控室を去る。

残るのは、ストロングブラッド只1人。

沖野の能天気さに呆れたのか。

はたまた、一切反応を示さないにも関わらず、こうやって律義にやって来るひた向きさに呆れたのか、リングを口から離して深く長い溜息を吐く。

不意に、何となく鏡に映る自分を見る。

顔は前髪に覆われ、どんな表情を浮かべているのかは分からないが、仏頂面だという事は本人が良く知っていた。

口元を指で動かし、少し上に上げた。果たして、これは上手く笑えているのだろうか。不出来でぎこちない笑みが、鏡には映っている。

チラリと時計を見る。

どうやら時間の様だ。口元を元に戻す。

奇麗に食べ終えた、芯だけが残ったリングをゴミ箱の中へと投げ捨てる。そして、ストロングブラッドはレースへと向かう。

当たり前前の勝利を掴む為に。

レース当日は天候に恵まれず、雨に見舞われていた。降り注がれる無数の雨粒に一切動じず、無数の人だけが出来ている観客席。

本来なら数が減ったり、立ち退く人が現れてもおかしくないが、それが居ないと言うのはレースと言う存在が慣れ親しんでいる。

もしくは、ウマ娘達の頑張る姿に、楽しみを抱いてもらっていると

言う、確固たる証拠なのだろう。

「あ、トレーナーさん。遅いですよ！」

「悪い悪い。少し用事を済ませていてな」

「用事って、何かあったっけ？」

「馬鹿、お前。ソレはアレだろ。お花摘み」

「ええ！ トレーナー、お前トイレして来たのかよ！ 大きいのか？」

「ゴールドシップ！ 余りそう大きな声でトイレって言わないで下さいまし！」

「マックイーンも十分に大きいって」

その中でも一際目立つのが、頭に耳が生えている——紛れも無いウマ娘の集団。チームスピカの面々である。

トレーナーは傘を持っているが他はカッパに身を包み、雨風なんのその、の精神でレースの行方を見守っている。

次々とレースに選手であるウマ娘が、アナウンスと共に現れる中、ストロングブラッドもまた、アナウンスと共に現れた。

『やって来ました！ 一番人気ストロングブラッド！ 威風堂々とレースに入場！ これがまさに、常勝無敗の称号を手にする、強者の貫禄なのでしょうか！』

観客席が湧き、熱狂に包まれる。

が、それに呑まれる事は無かった。

何故なら、一目見た瞬間背筋が凍る様な、本能的な恐怖を覚えたから。

一見すれば普通だ。勝負服も普通。身体付きも普通。表情は前髪に覆われているせいで、一体どんな感情を抱いているのか分からないが、さして気にする事でも無い。

しかし、雰囲気。

ストロングブラッドと言う少女が纏う雰囲気こそが、本能的な恐怖の原因。一体それが何なのかは分からない。

凄みなのか。

瘴気なのか。

邪気なのか。

けれど、嫌なモノであるという事だけは分かった。

「トレーナーさん。今の、常勝無敗って言うのは？」

「文字通りの意味だ。アイツはレースに出てから、一度も負けた事が無い」

「マジかよ！ え？ でも、髪型的に前見えないよな？」

「本人が言うには一応、見えている訳だ。まあ、結果は出しているし大丈夫だろ」

「無敗って、普通にあり得る訳？」

「実際に居ないわけでも無いですし、途中までであれば結構多いんじゃないのですの？」

「そう考えると、意外に普通なのかな？ でも、無敗って普通に凄いよね？」

「なあ、誰かこのルービツクキューブの一面揃えるの手伝ってくれねえ？」

ゴルシの声は取り敢えず全員無視して、レースの行方を見守る。全員がレースに入場すると、各々ゲートの中へと入る。

その中には、当然ストロングブラッドの姿も。

『さあ、今ゲートに全員が入りました。本日は生憎の雨ですが、果たして勝利は一体誰の手に渡るのか、今ゲートが開きました！』

ゲートが開いた。

その瞬間、たった一人のウマ娘が、眼で追う事すら不可能な速度で——気が付けば、ゲートから出ていた。

反則にならない擦れ擦れの時間差で。

たかだかコンマ数数秒の差。

にも関わらず、明確な差と言うモノが、既に出来上がっていた。

「……なっ!? 何時の間に!?」

「速すぎない!」

一同が驚く中、ゴールドシップだけが黙々とルービツクキューブの一面をそろえようと頑張っていた。

ゲートに入る。

幾度となく見た、隔たりの鉄扉。正面を見れば、自身が進むべき道であるレーストラックが良く見える。

生憎の雨。降り注がれる雨粒の数は次第に多くなっていき、芝生はさぞ湿っている事だろう。にも関わらず、観客席の勢いは増すばかり。

見ている全員がこのレースを楽しみにしていた、と言う事が見取れる。

「……五月蠅いですね」

が、ストロングブラッドにとってはどうでも良い話だ。仮にソレを聞かされた所で、出てくる感想はその程度。

彼・彼女達がストロングブラッドを応援していても、期待していても、楽しみにしていたとしても、無関心を貫く事だろう。

軽く左右を見ると、相対すべきウマ娘達が並んでいる。それぞれが色とりどりの勝負服を身に纏い、全員が真剣そのもの。

張り詰めた緊張感の中、ストロングブラッドは首を回した、指を鳴らしたりと軽くウォーミングアップを行う。

「……今日は絶対に勝つから」

横を見ると、1人のウマ娘が宣戦布告をして来た。その姿に見覚えは無い。単にストロングブラッドが覚えていないだけかもしれないが、向こうはストロングブラッドの事を良く知っている様だ。

「はあ、頑張ってください」

きつと勇気を出して言ったのであろう宣戦布告にも、ストロングブラッドは興味を示す事は無い。当たり前だ。誰が勝つのかは分かり切っているのだから。

『さあ、今各選手が全員ゲートに入りました！ 果たして、今回のレースでは、一体誰が勝利の栄光を掴むのか！』

アナウンスに呼応する様に、観客席も湧く。他のウマ娘にとっては、自分自身を鼓舞する為の大事な要素なのかもしれないが、ストロングブラッドにとっては違う。只の『雑音』以外の何物でも無い。

レースに取り組む為の、自身の弊害。妨害。障害。障害。そして、公害。勿論、只の好意や善意と言う事は理解している。

しかし、ソレがストロングブラッドの本音でもある。

アナウンスによつて、より一層緊張感が増す。心なしか、左右のウマ娘達の表情も真剣さを増していく。

ストロングブラッドは大きく深呼吸した。

鼻から吸つて、口から出す。青臭く、湿っぽい匂いが鼻腔を刺す。普段とは異なる、レースストラックの匂い。

瞬間、彼女の視界映る世界は目まぐるしく変わった。何もかもが、一切合切全てのモノが意識の外へと隔絶された。

左右に居るウマ娘も、観客席にいる観客達も歓声も、スピーカーから流されるアナウンスも、幾度となく降り注がれる雨粒ですら。

唯一見えているのは、ゲートによつて阻まれてる緑色の道。自身が駆け抜けて、勝利を掴み取る為のレースストラックだけだ。

——超集中。

これをストロングブラッドはそう呼んでいた。一体何時から身についていたのかは分からない。生まれつきだったのかもしれないし、外部的な要因によつて発現してしまったのかもしれない。

しかし、ある種の才能だと言えるだろう。

読んで字の如く、驚異的な集中力を発する事が出来る。

深呼吸は『超集中』を発動させる為のスイッチで、ストロングブラッドは意識的にオンオフの区分が可能となっている。

一見すると、何とも地味な能力だ。文字通り、ただ集中するだけではない。が、ストロングブラッドは上手く扱っていた。

だからこそ、その効果は絶大で、一度も負けた事は無い常勝無敗の伝説を築き上げる事が出来たと言つても良いだろう。

『さあ、全ての選手が全員ゲートに入りました！ 果たして、勝利の栄光を掴むのは一体誰なのでしょうか、今ゲートが開く！』

まるで示し合わせた様に、アナウンスの声に従つて、ゲートは開く。ストロングブラッドの視界では、やけにゆっくりとゲートは開き始める。

ゲートは少し開いた。

まだ駄目だ。

ゲートは半分程開いた。
まだ無理だ。

ゲートが今まさに、全開になろうとしていた。
もう少し待とう。反則になってしまうのは避けなければいけない。

——ああ、もう大丈夫だ。

タイミングを見計らって、ゲートが開いた瞬間に、芝生の地面を力いっぱい蹴り上げて、そのまま先頭に躍り出る。

地面が抉れて、土がばら撒かれる。芝生は爆ぜて、幾つモノ葉っぱが風に乗って流されて行ってしまう。

観客が湧く。アナウンスも湧く。

けれど、ストロングブラッドにその声が届く事は無い。

『ストロングブラッド！ 開始と同時に飛び出したアアア！ やはり、今回も圧倒的な逃げを見せつけてくれるのだろうか！』
時間にしてみれば、ほんのコンマ数数数秒。レースの序盤も序盤だ。しかし、他のウマ娘とは異なり、数センチの差が出来上がっている。

揺るぎない事実だ。

傍から見れば、何時の間にかゲートから飛び出たと言う風にか映らない。全員が全員、眼を見開き驚く。唯一驚いていないのは、本人位だろう。驚きつつも、それでもストロングブラッドと圧倒的な差が開かない様に他もゲートを飛び出す。

本日の天気は生憎の降雨。降り注がれる雨粒は、容赦なくストロングブラッドの勝負服を、顔を、髪を湿らせていく。

芝生にも雨粒は吸収されており、少々滑りやすくもなってしまうている。けれど、本人は気にしない。気にも留めない。

柔らかい感触は、寧ろ普段走っていた運動場とは異なり、走りやすい位だろう。ふと思った意識は、すぐさま消え失せる。

そんな事はどうでも良いと言わんばかりに、只々駆け抜ける。足を思い切り動かし、手を容赦なく振りながら。

後続もストロングブラッドに何とか追いつけようとするが、距離は一向に縮まる事が無い。寧ろ、どんどん引き離されていつてしまっ

ている。

最初はほんの数センチの差が、時間が経つ事にどんどん開いていつている。数センチが、数十センチ。数十センチが、数メートル。

もう手を伸ばしても、ストロングブラッドには届かない。

やっている事は対して変わらない。足を動かし、腕を振り、レースに勝ちたいと貪欲にがむしやりに頑張っている。

その筈なのに、開いた差は埋められない。寧ろ、どんどん深くなっていき、埋めようとする気力すら湧かなくなってしまふ。

これが常勝無敗の実力。聞いたただけだったら、笑って信じなかったかもしれないが、圧倒的過ぎる実力を目の当たりにすれば認めざるを得ない。

ストロングブラッドは『逃げ』。対処方法としては、スピードが落ちたその瞬間を狙って、追い越すのがセオリーかもしれない。

だが、ストロングブラッドのスピードが落ちる気配は無い。スピードが上がってしまっている始末だ。

一瞬諦めそうになる。辛くて、苦しくて、頑張つて走っているのに追っている背中はどうしようも無い程に遠い。

足を止めたいと思った。もう諦めてしまおうと思った。けれど、最初に言ったあの言葉を思い出す。勝てないと分かってたけど、悔しくて憎くて、だからこそ口から自然と零れ出た只の強がり。

けれど、ここで止めてしまえば、自分はどうしようも無い程にカッコ悪くなってしまふ。流石に、そんなのは御免だ。

歯を食いしばって、追いかける。自身の遙か先を走っている、ストロングブラッドと言う圧倒的な存在を。

しかし、追いつく事は——出来なかった。

『一着をもぎ取ったのは、ストロングブラッド!! また、常勝無敗の伝説の新たな一ページに刻まれたア!!』

淡い呼吸を幾度となく繰り返しながら、ストロングブラッドは息を整える。周りからは割れんばかりの歓声が響き渡るが、達成感はない。

満足感も無ければ、充足感すらも皆無だ。あるのは、一着を取って

当たり前だと言う感想と『無』。それ以外は何も無い。

レースが終わったのだから、他に興味は無い。観客席に向かつて会釈をするわけでも無く、他の対戦相手とも会話はしない。

そのままストロングブラッドは控室に戻ろうとする。

「ストロングブラッドさん!!」

やって来たのは1人のウマ娘。ストロングブラッドの記憶が正しければ、試合前に何かを言っただけの1人だった筈だ。

「とても、いい試合でした。また、やりましょう」

手を差し出してくる。

顔を見る。何とも満ち足りた、満足そうな顔だ。何故か、胸が痛くなってしまった。どうしようも無い程の、怒りが湧き上がって来た。

けれど、顔には出さない。

そして握手には応じない。

「そうですか。僕にはどうでも良いことです」

一瞥する事も無くストロングブラッドは控室へ戻る為に、その場から離れる。まるで、先程の彼女から目を逸らす様にして。

「感想！ 今日素晴らしい走りだった！」

控室に戻る際に、1人の少女とストロングブラッドは出会った。張り上げた声は、そこまで狭くない通路に響き渡る。

とても元気の良い声だ。

身長は低く、身体つきは幼子と間違えられたとしてもおかしくない程に小柄。腰辺りまで届く程に長く、手入れを怠っていないサラサラとした亜麻色の髪。

ソレを覆う様に被さる、青い花の装飾が付いた帽子と、白いブラウスに、青いジャケット。誰なのかが——少なくともストロングブラッドにとっては、一目見れば分かる装いだ。

普段なら頭に猫を乗せているのだが、今回は見受けられない。単純に雨に濡れるのが嫌だから置いてきたのだろう。

彼女の名前は秋川 やよい。

トレセン学園にて、理事長を務めている。そして、ストロングブラッドの恩人に当たる人物でもある。

「理事長。貴方もご覧になっていたのですね」

「肯定！ 今日少し用事があった、そのついでに見に来たのだ！」

他と話す時とは異なり、少し態度を軟化させて会話に勤しむストロングブラッド。質問に答える様に、元気よくハキハキとやよいも答える。

「そうでしたか。すいません。お見苦しいモノを見せてしまって。本来なら、もう少し速くゴールする事も出来たのに……僕が不甲斐ないばかりに」

「否定！ そう自分を悲観する事は無い！ 君は良くやっている！ だからこそ、こうして人は集まっているし、人気も出ている！」

力強く励ましながら、畳まれている扇子を広げる。扇子には筆で大きく『天晴れ!!』と書かれている。

やよいと会話している時のストロングブラッドには、会話に散りばめられている棘が無く、冷たい雰囲気も幾分柔らかくなっている。

慕っている、と言うのが見てとれた。

「それじゃあ僕はここで失礼します」

ぺこりと会釈をして、控室に戻ろうとするが、

「質問。走るのは楽しいか？」

文字通り、質問をされた。

はい、と。

たった二文字を言えば簡単に済む話だったのに、一瞬言葉に詰まってしまう。柄でも無く声の調子を上げてしまう。

「……勿論、楽しいですよ」

「僥倖！ それは、良かった！」

嬉しそうに秋川は頷く。

罪悪感を感じる事は無かった。

「追加！ ウイニングライブにもちゃんと出る様に！」

「……理事長がそうおっしゃるのであれば、今日が出る事にします」
不承不承と言った様子で、今日を強調整せながら了承する。

秋川は特に何も言わない。

改めて、もう一度会釈した後、ストロングブラッドは今度こそ控室
に戻る。そして、残されたのは秋川 やよい只一人。

憂いを帯びた顔はほんの一瞬。

小さく溜息を吐いた後、彼女も同じくこの場を去るのだった。

眩しすぎた舞踏会

「しかし、さっきのレースはとても凄かったですね！」

カップを羽織ったスペシャルウィークが、少し興奮した様子で、同意を求める様にそう言った。

「確かに、あの速さは凄かったですね。まさに圧巻と言うんでしょうか？」

「それでも、聊か愛想が無かったと言いますの？ 何と言うか……」

「確かに少し素っ気なかった感じだよね」
それぞれがそれぞれ思った感想や意見を交わす。レースを見た限りでは、その実力は本物だと言わざるを得ないだろう。

他者の追隨を許さない、圧倒的過ぎる走りのせいで、差はどんどん開いて行くばかりだったのだから。常勝無敗と言う文字も、嘘偽りでは無い事は明白だ。

「ウイニングライブもあるが、今日はどうなんだろうな」

時計を見ながら呟く沖野。

レースが終わった後は、レースにて一着二着三着を取ったウマ娘達が、ウイニングライブを行うのが通例となっている。一着を取ったのはストロングブラッドなのだから、当然見る以外の選択肢は無いと思っただけだが。

「何馬鹿な事を言ってるんだよ、トレーナー。ストロングブラッド先輩もウイニングライブに出るんだろ？」

「皆で行きましょうよ！」

全員が全員乗り気になっているが、沖野はやや気まずそうに頬を掻く。ウイニングライブに行く事自体に対して、嫌がっている訳では無いらしい。

「どうかしたんですの？」

「なんか少し様子が変だよ、トレーナー」

詰め寄られる形で言われる。

結局、仕方なく暴露した。

「実を言うとな、ストロングブラッドはウイニングライブに出ない事

の方が多いいんだ」

「それってありな訳？」

「前にカイチョー、ウイニングライブに出る事はウマ娘としての義務って言ってたよ！」

反応は様々。

唯一反応していないのは、未だにルービックキューブを回しているゴールドシップ位だろう。ストロングブラッドよりも、ルービックキューブの気になっているのだろう。全色揃う兆しは無い。

「実際アイツが出るのは貴重だからなあ。大体、30%位か？ だからこそ、今日は踊ってくれるかもしれないと、観に来る人もいる訳だが……」

「考えても仕方ないですし、取り敢えず言ってみませんか？」

「確かにそれもそうですね」

「ま、お前らがそう言うんだったら、取り敢えず行ってみるか」

どうするかを決めたスピカの一行は、ウイニングライブへと向かうのだった。

ウイニングライブは人に魅せる為と言う理由よりも、見ている人に楽しんでもらいたいから、と言う理由で設備は充実している。

備え付けられている機器は全てが一級品で、スポットライトも心なしか輝いている様に見える。

天気は雨。

屋外にも関わらず、ウイニングライブを見る観客席は既に埋め尽くされている。レースが人気であるのと同時に、ウイニングライブも同等に——もしくはそれ以上の人気を誇っているとと言う証明でもあった。

実際、レースを見に来ている人の半分は、ウイニングライブ目当てで来る人らしいのだから、寧ろ当然と言うべきなのかもしれないが。

「やっぱりと言うか……何と言うか、人多いわね」

「ウイニングライブが人気と言う証拠でしょう？ だったら、喜ぶべ

き事だと思えますわ」

「お前ら、余り離れるなよ」

沖野が引率の先生のように、スピカの面々をまとめ上げながら、ウイニングライブが開催するその時を待っている。

ウマ娘達が躍るであろうステージは、身近にファンと寄り添える様に設計されているのか、正面には色とりどりのネオンによって装飾されているスクリーン。下にはカラフルな色合いの階段が設置されている。

ステージに接合するように円環状の——走りやすいようにしている為なのか——通路が設置されており、歌い踊るウマ娘達を間近に見れる設計となっている。

その時を今か今かと待っている観客の中には、カラフルなサイリウムを片手にしている者や、団扇などを持っている者も少なくは無い。中には少々奇抜な装いをしている者もいるので、視界に入ってしまった沖野は苦笑しながらもそつと目を逸らす。

「ねえ、トレーナー」

「どうかしたのか？ テイオー」

服の裾を引っ張られる。

もしかしてトレイに行きたいのか？ などと言う言葉が出掛かるが、デリカシーに欠けるなどと、マックイーン辺りから関節技を決められかねない。

そこはグツと堪えた。

「何でストロングブラッドは、ウイニングライブに出てないの？ 普通通だったら、叱られたり、怒られたりして出ると思うんだけど」

「と言われもなあ、それはアイツ本人にしか分からないからなあ。ウイニングライブ以外にも、メディアとかを嫌っているから、インタビューにもまともに相手しないし、裏では『メディア泣かせ』だなんて言われている位だぞ」

「それって、駄目じゃ無いの？」

「少なくとも普通なら駄目だ。でも、アイツは許されている。それが、どうしてなのか。テイオー、お前に分かるか？」

まるで此方を試すような問いかけに、すぐには答えは出てこない。ムムム、などと声を出しながら頭を唸らせる。

首を少し動かしたり、頭を揺らしたり、叩いたりしていたが、結局答えを見つけない事はお出来なかつたらしい。

「分からないよ！ 降参！」

「ま、そりやそうか。この答えは、多分お前だつたら納得しにくいモノかもしれないからな」

沖野の発言にピンと来ず、首を傾げるテイオー。

答えを言う。

「言つてしまえば、アイツは強かつたからだ」

「……強かつたから？」

「そうだ。アイツは強い。強すぎた。だからこそ、ウイニングライブに出なかつたとしても、メイディアにそれ程顔を出さなかつたとしても、許される。言い方は悪いかもしれないが、アイツは力によって他を黙らせた、つて感じだな」

「でも、それつて余り良くない事なんじゃ無いの？」

「良くない事だつたとしても、アイツは強くなつた。他を黙らせる位の強さを手に入れた。正直、結果が全てみたいだな奴だからな。過程はどうでも良いと言う節がある事は確かだ。まあ、少しストイック過ぎたりする気もあるが」

ふと沖野は思い出す。

自分が初めてストロングブラッドと言うウマ娘と出会つた事を。今と比べれば、より一層冷たい雰囲気纏つていて、まるで世界中の全てを敵だと思ひ込んでいる様な棘のあり過ぎたウマ娘だつた。

言われた事は素直に取り組み、完璧に仕上げる。だからこそ、冗談で言つたあの発言も鵜呑みにしてしまい、あんな風になつてしまつた……。

勿論原因はソレだけでは無いだろう。

それでも、その原因の一端を自分が担つているのかもしれないと思えば、笑い事でも他人事でも済まされる事では無いだろう。

「質問！ 隣に座つても良いだろうか！」

元気の良い声。

夥しい数の人がいるにも関わらず、その声は良く響いた。何処かで聞いたような声だな、と思いつつも構いませんよ、と言おうとする。

「はあ?! 理事長!?!」

しかし、代わりに出たのは素っ頓狂な声。

沖野の目の前に居るのは、見慣れた顔と姿。当然だ、自身が勤務するトレセン学園の理事長——秋川 やよいなのだから。

「隣を宜しいだろうか!」

「え、ええ。全然構いませんよ。どうぞ」

若干困惑しつつも、沖野は何か平静を保つ。流石に学園以外で上司に出会うだなんて、気が気では無いだろう。

テイオーを初めとするスピカ一同も眼を丸くしている。

「提案! そんなに緊張しなくても良い。私も只見に來ただけだからな」

「成程……そうですか。それじゃあ、お言葉に甘えまして」

とは言ったモノの、やはり緊張してしまうのも無理はない。常日頃から、気になったウマ娘の脚を触り、最悪警察のお世話にさえなってしまうている。そんな彼が今も尚トレーナーを続けていられるのは、理事長などの存在があつてこそ。

おいそれと気安くや、軽々しくも出来ない。

「時に、君は彼女——ストロングブラッドのトレーナーだったりするのか?」

「一応そうなつてはいますが……ソレがどうかしましたか?」

「いや、君のお陰で彼女にも明るさを取り戻しているからな、一応ありがとうと言っておきたくてな。感謝する!」

理事長の発言に、沖野は首を傾げる。理事長とストロングブラッドには、接点と言う接点も無いだろう。

強いて言えば、同じトレセン学園に居ると言う位。

「じゃあ何故感謝を述べるのか。」

「彼女は元々地方のトレセン学園に所属していた。そこを、私がスカウトして、この中央トレセン学園に移籍したのだ。だからこそ、君に

は感謝している」

「ああ、確かにそんな話が……って、理事長がスカウトしたんですか」
まさか理事長とストロングブラッドにそんな関係性があつたとは。
元々、ストロングブラッドは自分の事を話そうとはしない。

何時でも距離を置かれている。

知らないのも無理ないだろう。

「地方から中央って、結構凄い事なんですか？」

「うーん、どうなんだろう？　ボクは余り分らないかなあ」

「確かスぺ先輩は途中入学でしたよね？」

「えーっと、でも私もそこら辺の事情とかは、余り把握してませんね」
「確かオグリキャップさんが、地方から中央に移籍したんじゃないやありませんの？」

段々と騒がしくなっていく。

流石に周りに迷惑なので、少しボリュームを下げる様に促して、また理事長と向き合う。普段見慣れた元気ハツラツな笑みは無く、どことなく陰が垣間見える。

「肯定。とは言っても、実力を見抜いたからと言う訳では無い。ハツキリ言ってしまうえば、あのスカウトは打算だらけだった。まあ、今ではこうやってウイニングライブで踊れる位まで成長しているのだから、いう事無しなのだがな」

「そう、何ですか……」

打算と言うのが、一体何を指しているのかは分からない。しかし、理事長の顔を見れば、ソレが余り良くなかった事は一目瞭然と言えるだろう。

憂いを帯びた表情から、普段見慣れた元気がハツラツとしている顔に戻る。周りの雰囲気は暗くしないように、と言う配慮しているのか。

「感謝！　それじゃあ私はそろそろ失礼させてもらう！」

「え？　ウイニングライブは……いえ、何でもありません」

理事長と職業は多忙だ。恐らくは、スケジュールをやりくりして、何とか無理矢理時間を作ってここにやって来た筈だ。

だとしたら、沖野には何も言えない。

言える立場じゃ無いからだ。

「……最後に1つだけ」

そのままいなくなるのかと思ったが、真剣そうな声音で前置きをする。身に纏う雰囲気は、年相応の少女が纏う雰囲気では無い。

無意識に固唾をのむ。

「彼女は走る事を楽しんでいない。勝つ為、優勝する為、只の義務感でしか走っていない。だからこそ、救って欲しい、なんて大それた事は言わない。けれど、彼女の取り巻く悩みを少しでも和らげて欲しい」

「……分かりました」

やよいの言葉には、途轍もない重みがあった。一体彼女が何を知っているのかを、沖野は知らない。

しかし考えるよりも先に、頷いた。そんな沖野の返答に満足気に笑いながら、秋川 やよいはそのまま出口へと消えて行った。

「理事長さん、一体どうしたんでしょうか？」

「他にお仕事があるんじゃないんですか？」

「あ、そろそろ始まるみたいだよ！」

考えに浸る時間はほんの数分程度。

ウイニングライブの始まりを告げるブザーが鳴り響き、設置されていたスポットライトがそれぞれの色合いの光を周囲に放つていく。

ステージから現れるのは一着を取ったストロングブラッドと、二着三着を取った2人のウマ娘達。

スピーカーから流れるのは『うまぴよい伝説』。曲が流れ始める、と同時に三人も歌い出す。元気よく。心底楽しそうに。

たった一人を除いて。

そんな事は知らずに、観客席は湧き上がる。屋外にも関わらず、雨が降っているにも関わらず、熱狂に包まれる。

どうして自身はあの時、言葉に詰まってしまったのか。どうしてあの時、自分は楽しいだなんて嘘をついてしまったのか。

い止めてほしい止めてほしい止めてほしい。

出来る事なら今すぐ逃げ出したい。出来る事なら、今すぐウイニングライブを台無しにしてしまい。暴力を振って、罵って、罵倒して、台無しに——しようと思えば出来る。やろうと思えばできる。

けれど、そんな事はしない。約束してしまったのだから。秋川 やよいに「ウイニングライブに出ます」と。

約束は必ず守る。ソレが、ストロングブラッドの唯一のポリシーだ。震えていた身体も、強張っていた表情も、誰にも気付かれる事は無い。

感づかれる事すら無いだろう。

「……ここから見える景色は、僕には眩し過ぎますよ」

だから、ウイニングライブに出るのが嫌だった。自分と言う存在は、そこまで大層な存在では無い。賞賛を浴びられる様な生き方はしていない。誰かに期待されるような前世など、全く持ち合わせていない。

嫌だった。まるで全てを見透かされるような、隅々まで見られそうになる視線が。自分が張っている虚勢が、どうしよう無い矛盾が露わになってしまいそうだ。

ふと、何時かのシンボリドルフの言葉を思い出す。分かっていた。わかり切っていた。あの時、握手してきた彼女の顔は、凄く満ち足りていた。

楽しんでいた。

喜んでいた。

満たされていた。

けれど、自分と言う名のちっぽけな存在にはそんなモノは無い。それが堪らなく悔しくて、悲しくて、眩しくて、憎くて、羨ましくて、どうしようもない。

そんな本音すら、全て虚勢と言う名の仮面で覆い尽くす。当然だ。自分には、ソレを如何にかする権利など無い。

出来る事は精々苦しみ抜く事だ。

苦しんで苦しんで、世界一のウマ娘になる事だけだ。

スピーカーから流れる曲は『ウマぴよい伝説』。ウイニングライブ
においては、結構な頻度で流れる曲だ。ろくに練習はしてないが、大
丈夫だろう。

大きく深呼吸をして、踊り始める。

『楽しそう』な雰囲気演技して。

自分の本心は隠したまま。

どうしようもない過去と現在

とある病院の一室で、1人の女の子が誕生した。

全体的に白く、少々広く作られた病室のベッド。そこに座っている、患者衣を身に纏った妙齡の女性を囲む様にして、様々な人が集まっていた。

皆が皆、ソレを見て笑顔を浮かべている。

女性の腕に抱きかかえるようにしてスヤスヤと眠る赤ん坊。性別は女の子。しかし、他とは少し異なる容姿を赤ん坊はしていた。

顔の左右に存在する耳は無く、代わりに頭に二つの三角形の耳がくるまれた白い布からは、箒みたいな尻尾が伸びている。

見れば女性も似たような容姿だ。

——ウマ娘。

女性と赤ん坊はそう呼ばれている。が、身体的な特徴と能力以外は、普通の人達と何ら変わりはない。だからこそ、周りに居る人達は忌避するような視線など向けないし、怯えた様子も全く無い。

やがて1人の男性が女性から赤ん坊を受け取る。女性は苦笑しながら男性に赤ん坊を渡す。男性は嬉しそうにしながら赤ん坊に頬ずりをする。

恐らくは父親なのだろう。

しかし、父親の愛は受け入れられずに赤ん坊は泣いてしまう。生まれたばかりなのだから、仕方ないと言えば仕方がない。

だが、泣かせてしまった張本人は気が気では無く、慌てふためいてしまう。容姿は整っているのに、余りの情けなさに周囲からは笑いが漏れてしまう。

試行錯誤を繰り返すが赤ん坊は泣き止まない。

女性は呆れた様に溜息を。しかし、男性に対して愛おしそうに笑みを形作ると、赤ん坊を返してもらおう。

事前にインターネットや本などで調べていたのか。はたまた、自身の母親や父親に効いていたのか。慣れた手つきで赤ん坊をあやす。

余りにも簡単に終わってしまった、また周囲は笑う。

男性は胸を撫で下ろす。

そんな笑顔が絶えない空間で、赤ん坊の意識は眼を覚ます。前世の記憶を持つている。だから、自分と言う自己を確立させている。いわゆる転生者という奴だ。

赤ん坊は自身の視界に映る光景をジーツと眺める。誰も彼もが笑っている。笑顔が絶えない。何とも幸せそうな空間だ。

ああ、ここなら大丈夫かもしれない。何となくそう思った。そう思っ、安心してしまったのか、赤ん坊の瞼は途端に重くなる。

まるで空を飛んでいる様な何とも言えない不思議な感覚に抗える訳も無く、少々の抵抗の後に瞼は閉じられた。

「……おやすみなさい。ストロングブラッド」

最後に聞こえて来たのは自分の名前。

ああ、今度こそは幸せになれる。そんな事を考えながら、赤ん坊――後にストロングブラッドと呼ばれるウマ娘は眠りに付いた。

目まぐるしく日々は過ぎ去っていく。

――暗転する。

最初はハイハイでしか歩けなかったストロングブラッドは何時の間にか二つの足で立てるようになって両親を驚かす。

――暗転する。

2, 3歳程になると、スキーや遊園地。水族館や動物園。今の今まで行った事が無い場所へ連れて行ってもらい、家族と一緒に楽しんだ。

――暗転する。

美味しいモノを沢山食べて、お昼に眠ってしまうなんて事もあった。ピクニックに出かけたりもした。

――暗転する。

取り留めも無い事で笑い合っ、下らない事で喧嘩もして、けれどストロングブラッドは両親が大好きで、幸せだった。

――暗転する。

幸せだった。

幸せだったのに。

幸せだった筈なのに。

——暗転する。

気が付けば、ストロングブラッドは黒い服——いわゆる喪服に着替えていた。自身がいる場所はとあるホール。

中はとても広く、幾つもの椅子が並べられ、正面には見慣れた二つの写真が並べられている。見間違え様の無い両親の写真。

沢山の花が添えられ、至る所に装飾が施されている。まるでお葬式みたいだな。何処かで見た事のある光景と照らし合わせて、そんな他人事みたいな感想が出てしまう。否、そう言うしか無かった。

我慢する。

「……………」

見なかつた事をする。

「……………」

目を逸らそうとする。

けれど、出来なかつた。

気が付けば、ストロングブラッドは泣いていた。大粒の涙を流しながら、只の子供みたいに泣きじやくる。

羞恥心なんて感じない。

そんな事を考えている余裕も無い。

両親が死んだ。大切な両親が。大好きな両親が死んだ。死んだ。死んでしまった。嘘じゃ無かつた。夢じゃ無かつた。これは現実だ。頬を抓る。肉が引き千切れるのでは無いかと思ってしまう程に、力の限り抓る。痛い。痛い。痛い。と身体は叫ぶ。

夢じゃない。

夢なんかじゃない。

「ど、おしてえ！ ねえ、どおじてえ!!」

どうしてなのかは知っている。只の事故だ。仕事の都合で二人は海外に赴いた。ストロングブラッドは祖父母に預けられた。

その最中に2人は死んだ。

どうして死んだのか分からない。飛行機が墜落したのかもしれないし、何かしらの事件に巻き込まれたのかもしれない。

けれど、ストロングブラッドにとってそんな事は心底どうでも良かった。そんな事を聞いた所で二人は返って来ない。

傷は深くなるだけだ。

大切だったモノは、掛け替えの無かったモノは、大好きだったモノは、もう帰ってくることは無い。

もう帰ってくることは無いのだ。

ストロングブラッドはまた泣いた。泣いて。泣いて。泣きじやくる。泣いたってどうにかなる訳でもないのに、馬鹿の一つ覚えみたいに泣きじやくった。

目が覚めた。

瞼をゆつくりと開くと、見慣れた天井。窓に備わる、ブラインドカーテンの隙間から柔和な日差しが差し込み、微かな雀の鳴き声が鼓膜に届く。

普段と変わらない朝。

「……嫌な夢ですね」

仰向けになつていた上半身を起こす。頭痛を堪える様に、おろされている黒紫色の髪をかき分けて、額に手を当てる。

どうやら、寝汗をかいていたようだ。

掌は少し濡れてしまう。

夢を見る時は大抵こう言った夢を見てしまう。楽しい夢。面白い夢。奇妙な夢。そう言った類の夢は、もう何年も見ていない。

ストロングブラッドが見る夢は必ず悪夢だ。悪い夢。嫌な夢。怖い夢。悲しい夢。辛い夢。哀しい夢。痛い夢。

病院に行った方が良いのだろう。病院に行つて薬を貰つて、少しずつ直していく。ソレが本来であれば正しい対処法だという事は分かっている。

理解もしている。

けれど、ストロングブラッドが病院に行く事は無い。そもそも、この悪夢を見てしまう、と言う自信の精神状態を直したいとも思っていない。

ない。

——なんで？

誰かがそう聞いたような気がした。

自分に言い聞かせるようにして、

「ソレが僕の罪……ですから、ね」

ベッドから起き上がり、寝巻からトレーニング用のジャージに着替えようと、ロッカーに向かう。朝の日課であるランニングをする為だ。

立ち上がると少し眩暈がした。

焦点が若干おぼつかない。

ふと、立てられた姿見を見る。自身の身長程はある、大きな姿見は余すことなくストロングブラッドを——自分自身を映し出す。

艶やかな肢体に、色白な肌。ウマ娘としては少々小柄で、儂い雰囲気醸し出している。普段はツーサイドアップに結ばれている髪も、今はおろされてしまっている為にストレートなロングヘア。

覆われた前髪は、ヘアピンで掻き上げられているお陰で露わになっている。透き通るような紫紺の瞳は。しかし片方だけ。

もう片方は色褪せた白色をしており、その上から顔の半分を覆うように痛々しい火傷跡が刻まれている。

そつ、と優しく火傷跡に触れる。

絶え間なく痛みを発し続けられていたあの感覚は、今も尚色あせる事は無い。心に深く刻み込まれている。

傷は既に完治している。それなのに、鋭い痛みを感じたように錯覚してしまう。

只の幻痛だ。

顔を若干顰めるだけに留まり、ストロングブラッドは自身の顔から手を離す。もしもこの痛みを忘れてしまえば、自分は罪から逃れる事が出来るのかもしれない。

考えて、嘲笑するように口元を歪めた。

そんな事ある訳が無い。そもそも、自分自身を許す訳が無い。全く笑えない、馬鹿馬鹿しい冗談だ。

寝間着からジャージへと着替えて、ストロングブラッドは外にでる。朝の日課であるランニングをする為。

そして、今日も一日が始まった。

トレセン学園にあるスピカの部室。

そこに置かれた椅子に座っているのは『黙れば美人、喋れば奇人、歩く姿は不沈艦』として名高いゴールドシップ。

神妙そうな顔つきで、腕を組んでうんうんと唸っている。見た所、何とも真剣そうな悩みを抱えている様に見えるが、相手はあのゴールドシップ。

見当はずれな悩みを抱えている。もしくは、心底下らない悩みで悩んでしまっている、だなんて可能性も無い訳では無い。

事実。

「どうしたんですの？ ゴールドシップ。そんな真剣そうな顔をしていまして、貴方に悩みなんて似合いませんわよ」

授業が終わり、部室にやって来たマックイーンに、いの一番に言われてしまう。そこに遠慮と言うモノは片隅も無い。

しかし、ゴールドシップは特に何かを言い返す様子も無く、只々腕を組んで何かを悩んでいる仕草を続けている。

よくゴールドシップと言うウマ娘を理解している証拠だ。

部室内を見回して、自分とゴールドシップしか居ない事に気が付く。まあ、後々他の皆もやって来る事なのだからさっさと着替えてしまおう。

これから行われるであろうチームトレーニングを見越して、トレセン学園の制服からトレーニング用のジャージへと着替えようとする。

ゴールドシップが、一体何について悩んでいるのかは聞かない方針らしい。本人が眼を閉じて真剣な面持ちで座り込んでいるが、時々眼を開いて此方を見る。

『え？ 聞いてくれないの？ マジで？ お前、マジなのか？』とでも言いたげな熱烈な視線を向けられるが、マックイーンは平然とした様

子で着替え続ける。

なんやかんや言っても、マックイーンはゴールドシップとの付き合いは長い。こういう流れの時は大抵下らない話の時だ。

雰囲気は何となく察せられる。

やがて、熱烈な視線が無くなった事を肌で感じて、ようやく諦めてくれたかと胸を撫で下ろす。が、気が付けばゴールドシップは自身の目の前に。

足音は聞こえない。

気配は全く感じていない。

にも関わらず、ゴールドシップは眼前まで迫っていた。腰を低く落として、此方の顔を見上げる風に。目が合ってしまう。

「ちよつ?! な、何ですの! 驚きましたわよ!!」

真顔ならまだしも、目が合った時のゴールドシップの顔は何とも言えない、哀愁が漂ってしまう悲観的な表情。

とても不気味過ぎる。

仮に夜に出会えば腰を抜かす事はまず確定だ。

実際マックイーンは驚いてしまい、地面に尻餅をついてしまう。勢いよく倒れてしまったせいで尻餅をついてしまう。

若干涙目だ。

「なあ、マックイーン」

「一体何なんですの! 驚いたじゃありませんか!」

「聞いてくれよお! アタシが一体何を考えているのかさあ! な

あ、頼むよお! マックイーン!」

項垂れるように、纏わりつくように、マックイーンの身体に抱き着く。マックイーンは何とかして引き剥がそうと身体を揺らす、本人は全く動じていない。寧ろ締め付けはどんどんと強くなっていき、鬱陶しさは半端では無い。

一瞬無視しようかとも考えたが、放っておくと面倒くさいパターンだと瞬時に判別。心底嫌そうに溜息を吐きながらも、取り敢えず要求を呑む。

「仕方ないから聞きますけれど、じゃあ一体何で悩んでいましたの?」

先程はとても深刻そうな顔になっていましたけど」

「いやさあ、最近将棋ばっかしていると飽きたから、囲碁にサッカーを取り入れた、囲碁サッカーにするか。はたまた、将棋とバスケットを組み合わせた将棋バスケットをしようかなって悩んでたんだよ」

「さて、先にトレーニングを始めておきますか」

「冗談！ 冗談だから！ ちよっぴりお茶目なゴルシちゃんジョーク！ だからさあ、一回待ってくれよ、マックイーン!!」

聞いた自分が馬鹿だった。そう言いたげにマックイーンは扉に手をかけて、そのまま出て行こうとする。

が、ゴールドシップはマックイーンの足にしがみ付いてゆく手を塞ぐ。動かそうとした足に新たな重りが乗ってしまい、身動きが取れなくなってしまう。

引き剥がそうとするが、先程と同じく離れない。

全くもって鬱陶しい事この上ない。

「ああ、もう！ 邪魔だから離して下さいまし！」

「へっ！ 誰が離してやるもんか！ マックイーンと一緒に、このゴルシちゃんも死んでやらあ！」

『死ぬ』何て話に無かったですわよね!」

その後も、2人の離せ・離さないの押し問答は続いていく。部室中に響き渡る騒がしさは、その外までも聞こえてくる程に。

「こんにちは。今、来たんですけど……」

「2人して一体何やってんの？」

部室にやって来たスペシャルウィークとトウカイテイオーは何方も困惑した様な、呆れている様な、その両方が混ざり合った複雑な顔だ。

決め手はゴールドシップの左目に小石が命中した事。恐らく、マックイーンの靴の裏に挟まっていたモノが運悪く命中したのだろう。

眼を焼かれるような激痛に、咄嗟に手を離してしまう。ゴールドシップは何とも喧しい悲鳴を上げながら悶え苦しむ。

三人はソレを心底呆れた様子で眺めるのだった。

それから数分後。

ようやく落ち着きを取り戻したゴールドシップは、自身が真剣に考えていた内容を述べる。最初からそうすれば良かったのだが、途中で忘れていたらしい。

申し訳なさそうな顔は、マックイーンとしては心底ムカついたのだが、このままでは話は全く進まないので取り敢えず促す。

「まあさあ、一応スピカにはストロングブラッドが居る訳じゃん」

「一応書類上はそうなってますわよね」

「それがどうかしたの？」

ゴールドシップは一体何が言いたいのか分からず、各々は首を傾げる。が、しかし、ゴールドシップの思惑にハマった者は1人。

少し困った様に、ゴールドシップの狙いに気付く。

「ま、まさか……ストロングブラッドさんを……」

「そうだ！ 正解だぜ、スペ！ アイツはアタシ達の事を一応知っているが、アタシ達はアイツの事をそこまで知っていない。これは余りに不公平って奴じゃねえか？」

悪戯好きの悪ガキが浮かべそうな、何とも悪意に満ちた笑みを浮かべる。周りに同意を求めるように言う。

「確かに……本人は余りココに来たく無さそうな、そんな素振りでしたわね」

「トレーナーの話を聞く限り、こっちの事を避けているみたいだし」

「そう考えると、一応道理は叶っているんでしょうか？」

普段なら否定する筈のゴルシの考えに、各々が悪くない反応を示す。これはまさしく好感触。

内心ガッツポーズをしつつも、ゴールドシップは話を続ける。

「つまりだ、アタシ達とアイツには大きな壁があるって事だ。だからこそ、その壁を取って仲良くなってしまうおうと、そうアタシは思っている訳だ」

「うーん。でも、どうやって仲良くなるの？ 多分、ストロングブラッドはこっちの事を警戒していると思うよ」

「だとしたら正攻法では難しいですわよね。ソレこそ、前に効いたスペシャルウィークさんみたいに無理矢理拉致して……って、ゴールド

シップ。貴方まさか」

「そう、そのまさかだぜ、マックイーン!!」

同意の意を示しながら、ゴールドシップは高らかに告げる。

「ストロングブラッドを取り敢えず、拉致してしまおうぜ!!」

余りにも無謀で、奇妙奇天烈な考えに一同は苦笑いをする。が、同時にこうも思つて居た。流石はゴールドシップだと。

ゴルシちゃんと愉快な仲間達―幽霊部員を捕まえろ、の巻―

その日、ストロングブラッドは心底ウンザリしていた。何時もと変わらない無味乾燥な毎日―だと思つて居たのに、予想外の方向からその認識は打ち砕かれてしまう。トレセン学園の校門をくぐった時に感じた、確かな視線。

敵意や害意を含んだ視線では無く、此方を見定めるような、鑑定しているような、観察しているような、敵意や害意とは寧ろ真逆。

ストロングブラッドが余り感じた事の無い視線だ。

視線の方を向くと、一瞬ビクリと身体が跳ねた様に見えるながら、すぐさま視線の主は姿を隠してしまう。

草むらに身を隠しているのはバレバレだが、余り関わりたくない。だからこそ、ストロングブラッドはソレを無視して教室へと向かう。

どうせ放つておけば大丈夫だろうと高を括っていたが、その考えが間違いだという事に気が付かないまま。

自身の教室がある、三階の廊下を歩けば、周囲のウマ娘達は蜘蛛の子を散らした様に逃げていく。見慣れた光景だ。

さして気にする事も無い。

教室に入ると先程まで騒がしかった教室は一斉に静まり返っており、窓越しに聞こえる小鳥の泣き声しか耳に届く音は無い。

別に気にした様子も無く、ストロングブラッドはそのまま自身の席―窓側の一番後ろの椅子へと座り、授業に必要な教科書を机の中に入れる。

カサツ、と何か変な感触がした。

肌触りから推察するに紙類。ベタな展開としてはラブレターだなんて考えなくも無いが、生憎ここはウマ娘―つまりは女性しか居ない。

そういう事が無い訳でもないとは思うが、自分には縁の無い話。で

あれば、悪口や陰口などが書かれた紙だろうか。

直接言わないのはやや意気地無しだが、直接机の中に入れる勇氣は中々に評価したい。まあ、少しを目を通して破り捨てておくか。

と考えて、机から紙を取り出す。

平然を装っているが——そもそも、前髪で目元が覆われているのだから分からない——内心では頬が引き攣っている。

「な、何なんですか……これは」

机の中にあつたのは、ピンク色の便箋。所々に可愛らしい装飾が施されており、差出人は不明。誰かに送る筈が、間違えて送ってしまったのでは無いだろうか、と一瞬思ったのだが、便箋にはストロングブラッドさんへ、と書かれている。

ラブレターだ。

紛れも無いラブレターだ。

便箋にも、ソレを止めるシールにも。果ては、自身の書かれた名前の真横にですら、自己主張が激しいハートが添えられている。

まず間違いなく、これはラブレターだ。しかし、どうして自分の所にこんなモノが？　そもそも一体誰が送って来た？　何故？　どうして？　こんなモノを？　全くもって理解し難い。意味が分からない。

たった数秒間で頭の中を駆け巡る、無数の意見や考え。軽くストロングブラッドは、眩暈を感じてしまう。

軽く放心状態に陥っているが、ようやく意識を取り戻す。はてさて一体コレはどうすれば良いのだろうか、と考えて答えは出る。

何ら迷う事など無かった。

——捨ててしまおう。

ラブレターらしき手紙は封を開けられる事も無く、ぐしゃぐしゃに丸め込まれて、粗悪な丸い球へと変わる。

席から立つことなくそのまま丸い球を投げ捨てると、ゴミ箱に入っ
てカコンと気持ちの良い音が響き渡った。

「はい、授業を始めますよ。皆、席に着いて」

担任が扉から入って来て授業は始まる。席を立っていたウマ娘達

も、各々が席へとついて授業の準備を始める。
ストロングブラッドも準備を始める。その時には、ラブレターの事
など頭の片隅からも消え去っていた。

午前中の授業が終わる。備え付けられたスピーカーから、昼休憩の
合図でもあるチャイムが高らかに鳴り響く。

昼休憩、であると同時に昼食の時間でもあるので、先程まで席に着
いていたウマ娘達はこぞって食堂へと向かう。

廊下に目をやると、他の教室からも食堂に向かうウマ娘達が居るの
か、廊下はある種の人の波の様になってしまっている。

食堂は食べ放題形式だ。主な理由としては、ウマ娘の身体能力や特
性に由来している。ウマ娘は異常な身体能力を持っており、レースに
出場すると言う理由もあってなのか、日夜トレーニングに明け暮れて
いる。

その為、運動力は半端では無い。健康的な肉体を作る為には食事は
必須だ。ましてやウマ娘。食事は常人の比では無い。

だからこそ、食堂は食べ放題形式を取っている。

一部のウマ娘——オグリキャップやスペシャルウィーク——など
は聊か化け物じみているが、ソレでも大半のウマ娘は大食漢。

よって、大半のウマ娘達はこぞって食堂に赴くわけだ。

がしかし、ストロングブラッドはその中には居ない。誰も居なく
なった教室で、通学カバンの中に入れていた文庫本を読んでいる。

丁度良い所まで読んで、ようやく食事は始まる。取り出したのは数
個のリンゴ。普段と変わらない昼食のメニュー。

リンゴを小さな口で噛む。

シャクリシャクリと瑞々しい音が、教室中に響き渡る。シャクリ、
シャクリ。幾度となく歯を突き立てて、果肉を食う。

何度も。

何度も。

何度も。

前髪のせいで、顔は分からない。美味しそうに食べている様にも見えるし、心底不味そうにして食べている様にも見える。

何方とも取れる雰囲気だ。

不意に歌を口ずさむ。

特別な理由などはない。強いて言うなら、何となく。只、何となく。口ずさむ歌は昔よく歌っていた歌だ。

記憶は朧げ。思い出せない。

小さい頃歌っていた様な気がする。多分、楽しかった頃の幼少期。

「これは……僕が弱い証拠……なんでしょうか、ね」

自嘲気味に呟いた。

別に強い訳では無い。強くなりたかったけれど、強くなつてなれなかったのだから。太陽に憧れている癖に大嫌いだとのたまう。

勇気なんてモノは持ち合わせていないし、何時も後悔ばかりしている。これの何処に『強さ』の二文字が存在しているのだろう。

自分自身を嘲るしかない。

また歌を口ずさむ。歌詞はうる覚えだったが、歌としての形はなっている。水晶の様に澄んだ声は誰も居ない教室中に響き渡る。

微かに楽しいと思ってしまう。

しかし途中で頭を振って雑念を払う。一体自分は何を考えているのか、自分自身を叱咤する。はあ、と溜息を吐きながらリンゴを食べる。

一体どれ位そうしていたのだろう。誰かが、廊下を走っている足音が聞こえてくる。勢いよく走っているのか、足音は等間隔で響いている。

誰かが忘れ物をして、ソレを取りに来たのだろうか。そんな事を考えながら、ストロングブラッドはリンゴを齧る。が、耳に届いた足音の主の声に、思わずリンゴを吹き出しそうになってしまう。

「あれ？ 確かここだったかな？ ストロングブラッドさんの教室は？」

聞き覚えのある声。

答えをすぐさま出す。確か——恐らくは、スペシャルウィークだつ

た筈。しかし、どうして彼女がストロングブラッドを探しているのか。

原因は不明だが、取り敢えず逃げなければいけない。

彼女が所属しているチームはスピカ。ストロングブラッドが所属しているチームもスピカだ。そして、ストロングブラッドは極力スピカの面々と関わりたくない。

故に逃走だ。

しかし相手もウマ娘。最初は微かに聞こえていた足音も、時間が経つ事に段々と大きくなっていく。

同時に、近づいてきている事が嫌でも分かってしまう。

理想としては姿を見られる事無く逃げる事だが、難しいのが現状だ。仮に姿を見られれば、後々面倒な事になるのは間違いない。

そうこうしている間にも、足音と声はどんどん近くなっていく。逃走は不可能。であれば、他に取れる選択はただ一つ。

一瞬躊躇いを覚えるが、背に腹は代えられない。

仕方なくストロングブラッドはもう1つの選択肢を選んだ。

ゴールドシップがストロングブラッド拉致作戦を計画してから翌日。状況は思ったよりも余り芳しくはなかった。

朝に登校してきた事は確認できたが、ラブレターを装って捕獲する『ドキドキラブレター大作戦』は失敗。

ゴールドシップはずっと待っていたがやって来なかったらしい。

では他の策を実行に移そうとしたが、基本的に休憩時間はストロングブラッドの姿は無く、所在も掴めていない。

だからこそ昼休みに——つまりは昼食時に突撃すれば会えると思ったのだが、どうやら当てが外れてしまったらしい。

教室に存在しているのは幾つもの机と椅子。教卓や黒板と言った、スペシャルウィークの教室にもあるモノばかりだ。

ストロングブラッドの席が何処かも分からないので、判別もし辛い。

「やっぱり遅れてしまいましたか。しかし、何処に行つたのでしょうか？ 普通に考えるのであれば食堂ですが、食堂に姿はありませんでしたし」

トレセン学園の敷地は広い。

練習用の各レーストラックや、体育館。ウイニングライブ用のダンスルームやトレーニングジム。その他にも、人参畑や各部室。

屋内プールと設備は充実している。仮に探そうとすれば、軽く半日は掛かってしまう程の広さを誇っている。

今も尚、他の皆が頑張つて探しているが、恐らく見つけるのは難しい。

一体どうすれば良いのだろうか。頭を悩ませてしまう、難問だ。ストロングブラッドは基本的に影が薄い。

目立つ事を極端に嫌っているし、常勝無敗の称号を持っているのに、余り噂が流れたりなどはしない。だからこそ、もっと仲良くなりたいと思っている。

そして、一緒に走りたいとも思っている。
が、

「ストロングブラッドさん。全く見つからないんだよなあ。うーん、どうすれば良いんだろう？ ここはやっぱり、人参を使ったトラップとか作つた方が良いのかな？ いや、でも、人参を使うのは……」

スペシャルウィークの頭の中に思い描かれるのは、御伽噺のヘンゼルとグレーテルよろしく、地面に等間隔でおかれる人参。

ストロングブラッドがその人参を拾いに拾つて、最後の一つになった時、下から檻がガツシャーンと降りて来て見事確保。

なんてシナリオだが、まあ成功はしないだろう。

取りあえず教室に戻ろう。午後からはトレーニングなので、待ち伏せでも何でもして、絶対に本人を捕まえよう、だなんてゴールドシツプも言う所だろう。

グーツとお腹が鳴る。

「ああ、お腹が空きました」

思えばまだ食堂に行つてご飯を食べていない。教室に戻るその前

に、まずは腹ごしらえに行こう。腹が減っては戦は出来ぬ、という言葉もある訳だし。

スペシャルウィークが、そのまま教室を後にしようとした時、何故かガコン!!　と言う金属質な物音が。

不審に思ったスペシャルウィークは一度教室に戻り、辺りを見る。が、特に気になる所は無い。おかしいな、と思って思い出す。

「そう言えば、ここに来る前に歌が聞こえて来ましたけど……確かこの教室じゃ無かったでしたっけ？」

ウマ娘は身体能力が高いだけでなく、耳も良い。だからこそ、聞き間違えでは無いと断言する事が出来る。

であるならば、やはりここには誰かが居ると考えるのが自然。例えば隠れていたりして——と考えて自然に眼が行くのは掃除用具が入ったロッカー。

入ろうと思えばウマ娘1人は余裕で入れる大きさだ。若干重苦しい空気になってしまい、無意識に固唾をのんでしまう。

たかがロッカーの扉を開けるだけだ。

いざ尋常に、と前置きした後、勢いよくロッカーを開ける。そこにはロッカーの中にて佇むストロングブラッドが——居る訳も無く、数本の箒と塵取りが立て掛けられているだけだった。

ガコンと物音が立ったのは、箒やチリトリが落ちてしまったせいだ。

「まあ、流石にそこまで簡単じゃ無いですよ。という事は、さっき聞こえて来たのは只の空耳……なんでしょうか？」

にしては、随分とリアルだったと言うか、何とも綺麗な歌だったよな。とか何とか呟きながら、スペシャルウィークは教室を去る。

そして、教室はまた無人になる。

「……行きましたか」

誰も居なかった無人の教室に、ストロングブラッドの声が聞こえてくる。ストロングブラッドが現れた場所は教室の窓。

懸垂の要領でストロングブラッドは窓の縁に、張り付く様にして隠れていたのだ。腕の力のみで、自分自身の重みに耐えないといけない訳だが、日々トレーニングに明け暮れていたお陰なのか、余り負担にはなっていない。

窓をよじ登り一息ついたあと、これからどうしようか考える。

「まあ、取り敢えず今日は帰りますか」

幸い沖野とのトレーニングの日では無い。

であれば善は急げと言う奴だ。早速下校しようとして、足元に何か当たってしまう。拾って確認してみると、ソレは人参。

眉を顰めながら、どうしてこんな所に人参が？ と困惑してしまう。誰かの落とし物？ しかし、日常的に人参を携帯しているウマ娘何てそもそもこの教室には居ない。であれば、消去法的にこの人参の持ち主は分かって来る。

「あれ？ 人参ここに落としちゃったかな？」

いなくなったと思ったスペシャルウィークは、もう一度教室へやって来る。人参に気を取られていたせいで気付くのに遅れる。

咄嗟に窓に隠れようとしたがもう遅い。

スペシャルウィークとストロングブラッドは互いに互いを見つめ合う。前者は先程までいなかったのに、どうしてここに居るのか。

後者はこの状況をどうやって乗り越えようか、と。

先に動き出したのはストロングブラッド。呆気に取られているほんの一瞬、スタートダッシュで魅せ付けた俊敏性を披露して逃げる。

「え!! 速い!!」

スペシャルウィークが驚愕に声を上げるが、気にしている余裕も無い。見つかったという事は、面倒事に発展するのはまず確実。

取れる唯一の方法は学園からの逃走。ただ一つだ。向かう場所は校門。流石に時間も時間なので、スピカの面々はマークしてないだろう。

数分足らずで校門へ向かう事に成功するが、何故か自身は追いかけてられている。追いかけてくるのはスペシャルウィークに加えて、サポートでやって来ているのか、トウカイテイオーとメジロマツクイー

ン。

「待って下さーい！」

「ちよっと待ってよー！」

「一度足を止めて下さいましー！」

何かを言っているが足を止める気は無い。足を止めれば、まず確実に面倒な事になってしまうのは確定しているからだ。

数メートル先には校門が。そこまで行けばストロングブラッドの勝利だ。しかし、見えて来た校門には、幾つモノ不穏な影。

行く手を阻むゴールドシップとダイワスカーレットとウオッカ。

「よくやったなあ、3人とも！ さあ、ストロングブラッド！ もうお前に逃げ道はねえ、大人しくアタシ達に拉致される!!」

RPGに出てくる魔王のような雰囲気で、ストロングブラッドを待ち構えている三人。校門は大きく、仮に三人で塞いだとしても、大きな隙間が出来上がる。

が、今現在。そんな校門は、工事現場にある黄色いフェンスによって、隙間が塞がれている状態だ。

校門の大きさは結構あるので、全てを覆い尽くす程では無い。が、ウマ娘1人が通り抜けるのは難しい。

ゴールドシップが近くの工事現場から拝借して来たのだ。

まさに絶対絶命の状況にも関わらず、ストロングブラッドの走りが衰える様子は無い。寧ろ、徐々に上がっている。

スピードは上がる。

上がって、上がって、上がって。

フェンスにぶつかるその瞬間、ストロングブラッドは石造りの床を蹴って、跳躍した。凄まじい跳躍力は、柵を優に越えようとする。

走り高跳びの要領で、身体を仰向けにして、柵フェンスを余裕で通過。

そして綺麗なフォームで着地した後、そのままトレセン学園を後にする。まさか、そんな方法で切り抜けるとは思って居なかった一同は啞然とした様子でソレを眺める。

ゴールドシップは何処か悔しそうにしていた。

次の日。

ドゴンツ!! と勢いよく、扉が開け放たれる。

場所は沖野のトレーナー室。

中に居て業務に勤しんでいた沖野は、一体何事かと眼を白黒させる。が、扉からやって来たストロングブラッドを見て事態を察する。「今までお世話になりました」

感情の乗せられていない、平坦な声が逆に恐ろしい。

退部届が机に叩きつけられた。

不出来な退部届

「今までお世話になりました」

スピカから脱退する旨が綴られた紙——退部届を叩きつけた後、即座にその場を後にしようとするストロングブラッド。

しかし、彼女がその場を後にする事は出来ないでいた。

「ちよつと待て！ いきなりどうした！ 流石に突然過ぎるだろう！」

行く手を阻む様に、素早く沖野はストロングブラッドの前へと立ち塞がる。脚と腕を大きく広げて、何とか行かせまいと。

「どうしたもこうしたも無いでしょう。貴方、僕の事をスピカの面々に漏らしましたよね」

「……え、えつと。それは……」

頬を掻きながら視線は泳ぐ。

そこを突かれると、何も言えない。

事実、沖野はポロリとストロングブラッドの事を口にしたたり、出場するレースに連れて行ったりしたのでから。

どう言い訳をしたモノか、と考えているが、肯定している様なモノだ。ストロングブラッドは長く深い溜息を吐く。

「だから辞めます。お世話になりました」

「待った！ 待ってくれ！ 一度話をしよう！ どうしてそんな考えに行き着いたのか、そこら辺の経緯とかを！ 頼む！」

右に空いた隙間をすり抜けようと動く、沖野も右に動く。左に動こうとすれば、沖野も左に動く。どうやら逃がしてくれるつもりは無いらしい。

ストロングブラッドはさっさとここから出せ、と言わんばかりの陰鬱なオーラを出しているが沖野はどこ吹く風だ。

真剣な眼差しで此方を見ている。

仮に抜け出そうとすれば、抜け出す事は可能だ。ストロングブラッドはウマ娘。対する沖野は只の人間。身体的スペックは、根本的に違う。

本気を出せばどうとでもなるだろう。

しかし、ストロングブラッドは考える事は出来ていても、行動に移す事は出来ない。出来なかった。出来ないでいた。

此方を見つめる、真剣な眼差しが。前髪で隠れたストロングブラッドの眼に向けられている。だから、動けない。

もう一度、溜息を吐く。心底嫌そうにしながら。しかし、溜息を吐いた所で、目の前の男が諦めない事は既に分かっている。

渋々、ストロングブラッドは事の経緯を話し始める。

騒動があつた後日から、ストロングブラッドの日々は平穏とは言い難いモノとなつた。事ある事にスピカの面々に絡まれて、ウンザリとする日々。

ある時はジャージに覆面の姿で拉致——尚、ガッツリ正体を明かしていた——されかけたり、事ある事に教室を突撃された。

その他にも、何故か人参が童話のヘンゼルとグレーテルの様に、点々と置かれてあり、最終的には罾が張られていた。

棒切れに支えられた、斜めに傾く籠が。

極めつけは、此方が接触を拒むと、諦めずに何度でもアタックしてくる強靱な精神。数日もすれば諦めるだろう、と思つて居たがスピカの侵攻が緩む事は全く無かつた。昔、スピカの悪行を耳にした事はあつた。

当時はそんな訳があるかと思つて居たが、自身がその被害者になつてしまえば笑い話にすらならない。

性質の悪いことに、噂は全て事実だったのだから。

どうにかしたいが、どうにもならないのは明白。であるならば、原因を究明してどうにかするしか無い。

考えれば答えは割と簡単に、すぐに見つかった。

自身の存在を知つており、尚且つスピカ一同に知らせる事が出来る人物。言わずもがな、沖野以外にいない。

大方、何かしらの弾みでうっかり口にしてしまったのだろう。スピカは、全員が色々な意味で過激派。

沖野の口はそこそ堅いが、連中の手に掛かれば吐いてしまうのは

当然と言える。だからこそ仕方ないとは思うし、多少なりとも同情はする。

が、それはそれ。

これはこれ、だ。

「……辞めますか」

ストロングブラッドはスピカに加入するにあたって、幾つかの条件を沖野に提示していた。その内の一つが、自身の存在を他者に明かさないう事。

他者と馴れ合うつもりは無いし、馴れ合いは好まない。故の条件だったが、見事に破られてしまった。

当然、退部だ。

善は急げと一筆したためて、沖野のトレーナー室に乱入。退部届を押し付けた後、そのまま帰ろうと考えていた。

チームに関しては、特に問題は無い。

ストロングブラッドにとっては只、レースに出る為に加入しているだけだ。最悪、そこら辺の弱小チームでも問題は無い。

が、沖野が引き留めるのは予想外だった。

自身はチームにおいて異物だ。チームトレーニングには出ないし、言動は傲慢で高飛車。生意気な小娘だ。

チーム脱退に関して喜びはすれど、悲しんだり引き留めようとするのはどう考えてもおかしいだろう。

何故なら『異物』でしか無いのだから。

「どうして僕を引き留めるんですか？ 第一、僕はそこまでスピカに貢献していません。関わるのは拒絶していますし、愛想も無い。客観的に見ても、僕みたいなのは居なくても良いと思います。貴方はそうは思わないんですか？」

自分自身を卑下して。

嘲るように言う。

口に出した言葉は、全てストロングブラッドの本心だ。迷惑をかけている事も、嫌われている事も、疎まれてる事も理解している。

関心が無いだけであって、興味が無いだけであって、どうでも良い

と思つて居るだけで、向けられる悪意には気付いている。

気が付いていて、ソレでもどうでも良いと思つて居るのだから。だからこそ、目の前に立ち塞がる男も——自身のトレーナーもそうでなければならぬ。

外面では気の良い、面倒見の良さそうなトレーナーを繕つていても、中身はストロングブラッドと言うウマ娘を憎み、見下す、黒くてドロドロしたモノを持ち合わせてなければいけない。そうでなくてはいけないのだ。

なのに、

「そんな事、思つてる訳が無いだろ！」

沖野は予想を打ち砕く。声は決して大きくない。その筈なのに、空間が震えた。やけに耳に言葉が残つてしまう。

その上、先程否定していた声は、全くもって上っ面だけの言葉じゃない。沖野と言う男は本気でストロングブラッドと言うウマ娘に、悪感情を抱いていない。

悪感情と言うのは言い過ぎかもしれない。

けれど、彼が他者が向ける様な悪意を向けていないという事は分かった。分かつてしまった。理解してしまった。

——ああ、駄目だ。この感覚は駄目だ。

直感的にそう思った。

駄目だ。駄目だ。ここに居ては駄目で、ここから直ぐに立ち去らなといといけない。後ろ髪を引かれる思いが、自身をここに立ち止まらせようとする。

けれど、無視する。考えない。

「良いから、そこをどいて下さい」

ストロングブラッドは大声をあげる

感情は乗せられていない。けれど、大声をあげたのだから、多少なりとも迫力は増している。拒絶の意思も、読み取れる筈だ。

しかし、沖野はそこから動かない。

「駄目だ！ お前はスピカの一員だ！ 絶対に脱退する事は許さない！」

事も理由になるし、若干テンパってしまったのも理由に挙げられる。

実際、机を動かせば解決しただろうし、身体を支えれば被害は最小限で済んだだろう。だが、物事はそうそう上手く行かない。

余り考えずに動いたのも良くなかった。

だからこそ、こんな事態に陥ってしまった。床に倒れているのは、ストロングブラッド。沖野はその上に覆い被さる様になっており、辛うじて両腕で床を支えている為、密着するような事態には陥っていない。

が、誰がどう見ても非常事態だ。男と女。ましてや、ウマ娘が担当トレーナーに押し倒されている風にも見えなくも無い。

ここで第三者が現れれば、騒ぎになるのはまず間違いない。

しかし、沖野はそんな事は気にならない。気にすら留めないだろう。何故なら、沖野の目の前には1人の少女の顔が露わになっているのだ。

人形と見紛う程に、恐ろしく整った容姿だ。もつとも、両目が不揃いで無ければ、の話ではあるのだが。

片方は紫紺の瞳なのに対して、もう片方は濁った白色。

おまけに痛々しい火傷の跡だ。

「お前……その顔は、一体どうしたんだ……」

今の今まで知る事の無かった、担当ウマ娘の素顔。余りにも衝撃的な光景に、沖野は絶句してしまう。

問いに、ストロングブラッドは答えない。

只々、ばつが悪そうに眼を逸らすだけ。

「これは……別に、貴方には関係がありません」

「関係が無いって……。でも、これは明らかに普通じゃ無いって……」

「……ッ。やっぱり、これって普通、じゃ無いですよね」

ここで沖野は、自身の失言に気が付いた。

顔を見る。ストロングブラッドの顔を。担当している、ウマ娘の顔を。ちゃんと見た。

年相応で、大人びても居ない。

普通の少女の顔。

泣きそうな顔だった。

悲しそうな顔だった。

しかし、一瞬見せた弱さすらも、瞬きをした刹那の時間で元の無表情に——能面へと戻った。

「ご迷惑をお掛けしました。もう……大丈夫です。そこを……退いて下さい」

目元を前髪で覆う。

まるで何事も無かったように、平然とした態度。かける言葉が見つからず、沖野はその場から言葉通りに退く。

ゆっくりと立ち上がって、少し離れて。

「それでは失礼しました」

引き留めることは出来ない。不意に伸ばされた手は、宙を掴むだけ。バタン、と扉が閉まった。

先程のストロングブラッドの様子は、明らかに普通では無かった。怒っているようにも、憎んでいるようにも、悲しんでいるようにも見えた、何とも複雑な感情だ。

そして、一瞬見えた——見えてしまった火傷跡。

出来る事なら早急に質問しておきたい所だが、今は聞ける状況ではない事は確か。今は何もしないのが正解だ。

「俺は一体どうすれば良かったんだ？」

自分自身に問いかける風に、小さく呟く。

自身の行動は間違っていないと沖野は思っている。しかし、その行動の何処かがストロングブラッドの琴線に触れた。

だが、その何処が触れたのかは全く分からない。ストロングブラッドと言う少女は、どんな時でも極めて冷静だ。

何事にも関心を示さないし、与えられた課題を淡々とこなす。ミホノブルボンの様なサイボーグと見紛う程に。

けれど、そのストロングブラッドが尋常じゃない程に取り乱した。彼女の過去に、何があったというのか。

「……はあ。放置していた、ツケが回って来たって事か」

気にしていない訳じゃなかった。しかし、見通しが甘過ぎたと言う他ない。

髪を乱雑に掻き毟る。

引き攣った笑みを浮かべながら、沖野はポケットから棒付きのキャンディーを取り出す。口に入れると、じんわりとした甘さが広がるが、今日は普段よりも苦く感じられた。

一体何時からだったのだろうか。

ストロングブラッドは廊下を歩きながら考える。道行く同級生達は、ストロングブラッドを一目見た瞬間に顔色を変えて道を開ける。

ストロングブラッドに対して良い感情を抱いていないと言うのは、誰が見てもまず明らかだろう。しかし、ストロングブラッドは何も言わない。

何も言わず、素通りするだけで。

視界に彼女が居なくなり、初めて他のウマ娘達は一息つける。そして、また談笑を始め出す。先程通った少女など、最初からいなかった風に振舞って。

机に置かれている通学カバンを乱暴に取って、ストロングブラッドはまるで逃げる様にその場を去る。

冷静になれという事は分かっているのに、今も尚苛立ちを抑える事は出来ない。気に食わない事があれば、当たり前散らしてしまっただ。

「……どうして」

髪を乱暴に掴み、強く握り締める。

若干の痛みを感じるが気に留めない。寧ろ痛みが今は心地いい、と言う感想まで思い浮かんでくる位だ。

どうして自分はあるなに取り乱してしまったのか。分からない。分かる訳が無い。分かってたまるものか。

どうしてあの時、あんな言葉を掛けられた位で悲しいと思ってしまったのか。あれほどまでに、苛立ってしまったのか。

分からない。

ストロングブラッドは自身の気持ちと何一つ向き合えていない。向き合えていない癖に、知りたいと思っっている。

矛盾だ。

どうしようもない矛盾。

どうにもならない矛盾。

どうにかしようとしても、そもその原因が自分自身に有るのだ。そして、既に答えは分かっている。

分かっている癖に、分からないとのたまうのだ。

矛盾だ。

本当に、どうしようもない。

あんなの只の八つ当たりと変わらない。

「……ああ、もう。本当に、こんな自分が嫌になりますよ」

沖野は悪くないのは、他でもないストロングブラッドがよく分かっていた。あの時の後悔を、沖野にぶつけているだけだ。

しかし、頭に血が上り過ぎた。拳を引っ込めるタイミングが無くなった。他者を拒絶している癖に、壊れる事を恐れている。

これも矛盾だ。

通学カバンを漁り、リンゴを取り出す。

乱暴に齧ると、甘い果汁が口いっぱい広がる。しかし、ストロングブラッドが苦虫を噛み潰したような顔で齧る。

不味そうに齧っているのに、何度も齧る。これも、どうしようもない程の矛盾なのだ。矛盾でしかない。

矛盾だ。

ストロングブラッドと言うウマ娘は——少女は矛盾によって成り立っている。余りにも不可解で、余りにも歪な本質によって構成されている。

心は荒み、淀み、汚れ切っている。

「あ、ゴールドシップさん！ 見つけました！」

「よしっ、よく見つけたな、スぺー！」

声が聞こえた、と同時にストロングブラッドの周囲は囲まれた。全員覆面で顔を隠しているが、声と体格で大体想像が付く。

スピカだろう。

「何の用ですか？　今は忙しいのですが」

不機嫌さを隠そうともせず、さっさと何処かへ行って欲しいと言う雰囲気垂れ流す。無論、スピカの面々もソレには気が付いているだろう。

だが引かない。

引く気は無いのだろうし、これから一体何をするのかは大体予想が付いている。鬱陶しい、面倒くさい、腹立たしい。

先程の事もあつてか、ストロングブラッドの状態は滅茶苦茶。その上、スピカと言うチームは全員が全員性格が濃い。

自分が何を言った所で、途轍もない労力を使う事は明白だ。

「なあ、ストロングブラッド。一度、アタシ達の部室に来てくれないか？」

「お断りします」

要求に、バツサリと断りを入れる。

これで諦めてくれるのならストロングブラッドとしては嬉しいのだが、当然上手く事なんて行かない。

「そんな事言わずにさあ、一緒に行こうよ！」

「テイオーの言う通りですわ。一応、貴方はスピカの加入者としてはゴールドシップに次いでのお古参。積もる話の一つや二つ、あつてもおかしくないと思いますわ」

愛想なんて欠片も無い発言。

なのに、トウカイテイオーやメジロマックイーンを始めとする面々は嫌な顔一つしない。必死に堪えている——訳では無いのだろう。

声から、身体から、全体を通して仲良くしたい、と言うオーラが。優しさが、これでもかと言う程に滲み出ている。

拒絶したいと思つて居る自分。

仲良くなりたいたいと思つて居るスピカ達。

比べればどちらが醜いのかは明白だ。残酷なまでの事実が、ストロングブラッドをさらに苛立たせてしまう。

嫉妬してしまう。どうしてそんな風になれるのかと。抑えようと

してもどうにもならない。

ああ、今日は嫌な事ばかりだ。

全くもって自分自身が嫌になってしまふ。悪いのはどう考えても自分なのに、どうしても彼女達に苛立つてしまふ。

溢れ出しそうになる思いを、何とか歯を食いしばって抑える。周りに気取られない様に。

微かでも気付かれない様に。

「さっきから言っているように、此方から言うことは何もあります。お引取りを」

極力顔を見ないで、眼を伏せながら。

何とも冷たい言葉だ。自分自身で言っている癖に他人事みたいに思った。これじゃあ嫌われるだろう。

いいや、寧ろ嫌って欲しい。

この言葉を受け取って、何て失礼な奴なんだと嫌悪して欲しい。

酷い事を言う奴だと怒りを覚えて欲しい。そして無理なんだと、諦めて欲しい。

返答を待つ。返答の代わりに与えられたのは、柔らかい感触。これは、一体何なのだろう、と考えて思い出す。

ああ、そうだった。これは手の感触だ。であるなら、自分は誰かに手を握られていると言う事になる訳だ。

でも一体誰に？

正面を向く。ストロングブラッドの目の前には、優しい微笑みを浮かべたスペシャルウィークが。

何時か光景と被る。

頭が酷く痛む。

「そんな事を言わないで下さい。私達は、スピカは、貴方と仲良くなりたいんです。だから、一緒にお話しませんか」

ああ、どうしてこうなるんだろう。嫌悪して欲しかった。憤怒して欲しかった。諦観して欲しかった。そして、関わらないで欲しかった。

希望だ。

これはどうしようもない程の希望。

手を伸ばせば、届くんじゃ無いかと思ってしまう希望。もしも一歩踏み出す事が出来れば、きっとこれからの人生はよりよいモノになるのかも知れない。

否、絶対にそうなるのだろうか。

彼女達と関り、共に学び、共に競い、共に笑い合えば、自ずと結果は明白になって来る。ああ、そうかそうなのか。

貴方達はそう言う人達なのか。

沖野と言うトレーナー然り。スピカと言うチームに所属するウマ娘達然り。全員が全員良い人達なのだ。

善人なのだ。

友情、努力、勝利、だなんて何処かの少年漫画の掲げる理想を体現している。ソレこそがスピカの強みであり惹かれてしまう理由。

避ける様に、スペシャルウィークから目を逸らす。眩しい。本当に眩しい。ストロングブラッドの瞳に映る彼女は、どうしようもない程に眩しくて、直視し続けていれば目が潰れそうになってしまう程だ。

太陽が嫌いだ。

何時だって輝いていて、周囲を照らしてくる。

どうして今なんだろう。どうして今になって、今更のこのこと顔を出して来たのだろうか。分からない。意味が分からない。

訳が分からない。

——どうして、あの時にこうならなかったんだろう。

「お断りします」

「え？」

握られていたスペシャルウィークの手を無理矢理解く。勢いが余ってしまったのか、スペシャルウィークはそのまま倒れてしまう。

手は差し出さない。

見向きもしない。

「先程も言った様に、僕は貴方方と馴れ合うつもりはありません。それに、もう辞めた身ですし。コレで失礼します」

出会った時と同じ態度を崩さない。

スペシャルウィークの言葉には揺れ動かなかった。スピカ、と言うチームに興味なんてモノは一切抱かなかった。

そんな風に振舞う。

本音を隠して呑み込んで、虚勢と言う名の仮面を付ける。

啞然としている中、そのまま帰ろうとするが不意に両肩に手を掛けられる。怒りを抑えているのか、結構な力が入り動く事が出来ない。

「おい、スペ先輩を転ばせた癖に、謝罪も無しかよ」

「ちよつとそういう所はどう言う訳？ 幾ら何でも、物事には限度つてモノがある訳なんだけど」

声だけで大体は把握出来る。ストロングブラッドの肩に手を置いているのは、ウオツカとダイワスカーレットの2人。

怒りを抑えているが、滲み出て隠しきれしていない。当然謝罪なんてモノはせずに、ハエでも払う様に肩に置かれた手を払う。

力を込めていようと余り関係は無い。身体能力においても、ストロングブラッドは他のウマ娘とは一線を画すのだ。

「邪魔ですよ。退いてください」

余りにも平然とした態度に、2人は呆気に取られてしまう。態度と言うよりは、ストロングブラッドが纏っている雰囲気気圧されたと言うべきか。

溜息を吐く。

心底面倒くさそうに。

「謝りませんよ。僕は、悪くありませんから」

「……………」

当然納得いくわけが無い。

ストロングブラッドの述べた事柄は、全て此方を非難しているのだから。此方に関わろうとした、アイツが悪いのだと言っている様なモノだ。

一体お前は何様なのだ、鋭い視線を向けられる。

仮に視線で人が殺せるのであれば、殺せるのでは無いか、と思えてしまう程に。

「構いませんよ。罵倒するなり、暴力を振っても」
動かず、目を瞑る。

何もしない、と言う意思表示。

2人は怒りで顔を歪ませているが、何もしなかった。拳を強く握りしめて、立ち尽くす。

ストロングブラッドは特に何も感じない。

只、淡々とこんな感じか、と見慣れた反応を眺めるだけ。

「これ以上用が無いのであれば、僕は失礼します」

軽く会釈をして、ストロングブラッドはその場を後にする。スピカの面々は、彼女の背中を眺めていたが、彼女が後ろを振り向く事は無かった。

誰も知らない。何も知らない

「うーん、一体どうすれば良いのかな？」

机で項垂れながら、スペシャルウィークは考えていた。が、良い考えは思いつかないらしく、頭を抱えてしまっている。

時々良い考えが思いつきそうになるが、大抵今日のお昼ご飯は何なのだろう、と言う考えに集約してしまう。

こんな時大食いである事が恨めしく、尚且つ若干恥ずかしく思ってしまう。羞恥心に身もだえてしまいそうだが、今は考えを纏める事が先決。

「でも……思い浮かばない」

自室で夜遅くまで考えても、トレーニングをしながら考えても、人参を齧りながら考えても、残念な事に納得の行く案は思いつかない。

「本当、一体どうすれば良いのかな？ ストロングブラッドさんと仲直りするには」

スペシャルウィークの最近の悩みはソレだ。数日前、散々な結果に終わってしまった、ストロングブラッド確保作戦。

スピカの面々から結構なヘイトが集まったのは言わずもがな、若干空気がギスギスしていると云えない訳でも無い。

錯覚なのかもしれないが、少なくともスペシャルウィークはそう感じてしまう。だからこそその仲直りな訳だが、余りにも前途多難すぎた。

そもそもストロングブラッドは他者と関わる、と言う事を非常に嫌う。極力避けてしまう程に。

実際誰かと一緒に会話している所なんて見た事は無いし、親しい友人が居ると言う噂も聞いた事が無い。彼女を取り巻く、数少ない噂のほとんどは良くないモノだし、余りにもガードが固すぎて隙らしい隙が無い。

「ああ、もう！ 一体どうしよう！ なしてえ。なして私達の事を避けるの？ うーん、分からない！ 全く分からない！」

机で唸っても仕方が無いのだが、分からないのだから仕方がない。

周りにも声は聞こえてしまっているらしく、周囲は若干ビクツと驚いてしまう。

「どうかしたのかしら？ スペさん！ 悩みなら、このキングが聞いてあげるわよ！ 寛大なるキングの慈悲に感謝なさい！」

スペシャルウィークの悩みを聞きつけてやって来たのは、何とも高笑いが似合いそうな、お嬢様然としたウマ娘。

ブラウン色の髪は肩辺りで切り揃えられ、若干ウェーブがかっている。若干高圧的な態度ではあるモノの、所々に優しさが散りばめられている。

顔立ちは整っており、美人と言つて差しつかえない。仮に右手の甲を頬につけて、高らかに笑つてしまえば大層絵になる事だろう。

名前をキングヘイローと言ひ、良くキングと主張する、スペシャルウィークのクラスメイトの1人だ。

「あ、キングちゃん……って、髪結構ボロボロになつてるけど、大丈夫？」

「大丈夫よ！ 今日、少しウララさんが寝坊してしまつたから、仕方なく髪の手入れとかしてたらこんな風になつただけだから。全然、気にしないで！」

文句を言いながらも、相部屋であるハルウララの髪を整えているキングヘイローを想像する。余りにも微笑ましい光景なので、若干苦笑してしまう。

「それで、一体何を……って、本当に何を悩んでいるの!?!」

キングヘイローは机に置かれたノートを見て、思わず素つ頓狂な声を上げる。それもその筈、ノートには奇妙な文字羅列の他に、夥しい数描かれた人参や、一体何を召喚するのか、余りにも不気味な魔法陣が記載されているのだ。

日夜、学生寮の相部屋であるハルウララと、普通では無い毎日を繰り広げているキングヘイローも驚きを隠せない。

「え？ スペさん。貴方もしかして、マンハッタンカフェさん辺りに、変な影響でも受けた訳!?! まさか、オカルト方面に興味があるのかしら!?!」

能天気で、大食い、天然。

そんな三要素が揃っているスペシャルウィークに、オカルト好きだなんて属性が付与されれば、いよいよ残念美人の仲間入りを果たしてしまう。

第一怖すぎる。

時々「あ——、キングちゃんの近くに居ますね」なんて、見えない誰かの話をされたら、流石のキングヒーローでも精神がもたない。

「一度落ち着くのよ！ 幽霊なんて物はこの世にはいないし、オカルトは大抵造り物やフィクション！ 目を覚まして、スペさん！」

「いや、流石にその考え方は曲解しすぎじゃ無いか？ もう、キングちゃんも一度落ち着こうよ。はい、ひっひっふー」

「その呼吸法は色々と間違ってるでしょうが!!」

スペシャルウィークの肩を、前へ後ろへと、小刻みに揺らすキングヒーロー。揺らし過ぎたのか、スペシャルウィークの眼はぐるぐると回っており、若干意識が飛んでしまっというような状態だ。

そこで助けに来たのは、釣りの雑誌を読んでいた1人のウマ娘。全身から気だるげな雰囲気を出しており、マイペースそう。若干制服は着崩されており、所々がシワだらけになってしまっている。蒼空を連想させる、水色の髪は肩辺りで切り揃えられている。瞳は

酷く眠そうで、目の前にベッドが在れば眠ってしまいそう。容姿は可愛らしく、美形だらけのウマ娘達の中でも、一際存在感を放っている。少女の名前はセイウンスカイ。

スペシャルウィークとキングヒーローのクラスメイトだ。

「まあまあ、一度落ち着けたから良いじゃん。それで、スペちゃんは一体何を悩んでいたのかな？ スカイちゃんに教えてくださいよ」

「え？ あ、えつと……実は……」

セイウンスカイに促されるがままに、スペシャルウィークは事の経緯を話し始める。数日前に起こった、ストロングブラッドとの出来事を。

そして、一体どうすれば仲直りをする事が出来るのか。

「見た所、先程ノートに書かれていた事とは全く関係が無い様に思え

ただけど」

「ふむふむ。成程。キングちゃん。何かいい方法って無いかな？」

「って、私!? 貴方、さつき如何にも私が解決しますよ、みたいな事を言ってたのに……」

非難気な眼差しを向けられるも、セイウンスカイは口笛を吹いて明後日の方向を向く。余りの白々しさに呆れたのか、はたまた慣れてしまったのか、小さく溜息を吐いた後にキングヘイローは自身の意見を述べる。

「結論から言ってしまうと、難しいと思うわね。そのストロングブラッドさんと、スペさんの目的はある種の平行線。交わり合う可能性は極僅か、と言った感じかしら。話し合いの場を設けるのなら、多少はマシになるけど、本人は捕まらないのでしょうか?」

質問対して、スペシャルウィークは頷く。

これは事実だ。

あの日以降、何度もストロングブラッドと話し合いを設けようとしたモノの、見つけ出す事すら叶わなかった。

トレセン学園に来ていない、と言う訳でも無いのだが何故か見つからない。誠に不思議でしょうが無い程だ。

「第一怪我を負わせたのに謝らない、って所が非常に気に食わないわね。どう? 今度会ったら、このキングが一度モノ申してあげるわよ!」

「ソレは大丈夫だよ。ありがとう、キングちゃん。そもそも、私達も少し強引すぎたかなと思うし」

「ある意味スピカの弊害よね」

チームスピカに於いて、誘拐や罠に嵌めると言った力技はほぼ日常茶飯事だ。良くも悪くもスペシャルウィークもスピカに染まっている証拠。

いや、全く喜ばないか。

「しかし喧嘩ねえ。そう言えば、私達って喧嘩した事とか無いんじゃない? ましてやあのスペちゃんが誰かと喧嘩するとは、結構珍しいかも。因みに、参考までに聞くけど、そのストロングブラッドってい

う人はどんな人なの？」

「え？　どんな人、どう言えばどんな人だったけ……」

口にしようとして気が付く。

自分はまだ、ストロングブラッドと呼ばれるウマ娘を、スピカの一員を何も知らないでいるという事に。

元々、ストロングブラッドの事を知る為にあんな事をしたのだから、知らないと言うのも仕方がない。が、それでも圧倒的に情報が少なすぎる。

レースが途轍もない程に強い事。他者と関わるという事を、極度に嫌っている事。何故か食堂に行かない事。前髪が覆われている事。他者に興味を持っていない事。

頭に思い浮かぶのは精々指で数えられる程度。仮に、これが自身の尊敬しているサイレンスズカであれば、数えきれない程思い浮かぶだろう。

だからこそ、若干の寂しさを覚えてしまう。仲良くしたい、なんて思っている癖に、まだ自分はそこまで知っていないという事に。

何か無いのか。

他に何か無いのか。

考えて、考えて、考えて思い出す。あの日のレースで抱いた彼女の印象を。しかし、ソレはさらなる思考の渦へと陥る羽目になる。

「確か、走るのが辛そうだった……かな」

自分で言っておいて、何を言っているのか分からなかった。思わず、スペシャルウィークは首を捻ってしまっ

話を聞いた2人も同様に、意味が分からなかったのか、首を捻ってしまう。そして、気まずい空気になる。

悩みは解決しなかった。

考えに考えた結果、余計に分からなくなってしまうたスペシャルウィーク。頭を抱えても、頭を捻ったとしても、事態は一向に良くなるわけが無い。

それでも捻り、唸ってしまうのはある種の逃避なのかもしれない。『走るのが辛い』文字にしてみれば簡単ではあるが、心底理解に苦しむ言葉だ。ウマ娘と言うのは走る為に生まれて来たようなモノ。

時に数奇で、時に輝かしい歴史を持つ別世界の名前と共に生まれ、その魂を受け継いで走る。それこそが運命、と言っても良い程に。

にも関わらず件のストロングブラッドは『走るのが辛い』と言う感情を抱いてしまっていたのだ。例えるのなら、呼吸の仕方を周りはちゃんと出来ているのに、1人だけ全く出来ていない様な感じだ。

全くもって理解する事が出来ない。

仮に「ねえ、呼吸の仕方ってどうするんだっけ？」なんて聞かれても「え？　呼吸って普通に出来るでしょ？」としか言えない。

つまりはそういう事だ。

「でもなあー、これが分かれば少しは仲良くなれると思うんだけどなあー」

走るのが辛いのでは無く、走りたいと思ってるのに、走る事が出来ない。と言うのであれば分からなくも無いのだが。

人參を齧りながら、スペシャルウィークはテーブルにて項垂れている。場所は生徒達がこぞって利用する食堂。

人の波は途切れる事は無く、厨房ではおばちゃん達がせわしなく働いている。スペシャルウィークの昼食はハンバーグ。

沢山食べる、と言うウマ娘の性質を理解しているのか、ハンバーグの大きさは本来の数倍に、中心には生の人參が突き刺さっており、濃厚なソースが掛けられている。

ご飯は山盛り——所謂昔話盛りになっており、凡そ食いしん坊であるスペシャルウィークだからこそ、食べられる量だ。

普段ならモノの数分で平らげてしまう察なのに、今日は余りに進みが遅い。数分が経過しているにも関わらず、まだ半分ほどしか食べられていない。

理由は至極単純で、今も尚、ストロングブラッドの事に関して悩んでいるからだ。悩んで、悩んで、悩んではいるモノの、依然として答えは出ない。

八方塞がりという奴だ。

「なしてえ……なしてえ良い考えが思いつかないの？」

いい方法が思いつかない悲しみから。ご飯を食べているのに、ちゃんと食べられていない悲しみから、若干涙を流しながらも食事をとる。

周囲から見ればさぞかし奇怪な光景として映るかもしれないが、その背後に居るのはオグリキャップ。

スペシャルウィークと同等、もしくはそれ以上の量を誇る昼食を食べている最中の為、注意は分散される。

「うう、一体どうすれば……」

「どうかしたんですか？ スペちゃん。悩みがあるなら、相談した方が良いと思いますよ」

「そうですよ。スペちゃん。私達の仲じゃ無いデスカ！ 水臭いデー
ス！」

首だけを動かし——口に人参を啜えたまま——見ると、そこには2人のウマ娘がそれぞれ、スペシャルウィークと同席していた。

1人は顔がプロレスラーのマスクで覆われている。快活とした雰囲気身を纏っており、髪はポニーテールに結ばれている。

名前をエルコンドルパサー。

スペシャルウィークの友達でライバルだ。

そして、もう1人が嫺やかな雰囲気醸し出す少女。クリーム色の髪は、腰辺りに届く程長いにも関わらず、絹の様に滑らか。

和やかな微笑みを浮かべているのは、グラスワンダー。此方も、スペシャルウィークの友達でライバルだ。

友人の申し出はありがたいが、この悩みは余りにも難解で複雑だ。果たして、相談しても良いモノなのか——と考えてしまう。

腕を組んで考えてしまう。

思わず唸ってしまう程に、考えてしまう。

「グラスちゃん。エルちゃん。本当に、聞いてもらっても良いの？
多分、結構難しい悩みだと思うけど」

流星に黙っているのも申し訳ないので、一応断りを入れておく。何

故なら、これから口にする悩みは「呼吸ってどうやるんだっけ？」と同等の破壊力を持つ、余りにも素っ頓狂な質問なのだから。

取りあえず、事の顛末を話す。

結果は、当然と言うか、予想通りと言うべきなのか、2人も難色を示す。明らかに困惑した顔で、言葉に詰まっている。

「これは、確かに難しい悩みデスね」

「走るのが辛い、と言う感覚は感じた事が無いのでしてー」

予想していた通りの解答だ。ウマ娘は基本的に走る事を楽しい、と思つて居る。だからこそ、レースに出て戦つたり、高順位を勝ち取つて喜んだり、ウイニングライブで命一杯踊る事が出来たりしている。

つまり、ストロングブラッドと他のウマ娘とは明確なズレが存在している。と言う決定的な事実が明らかになった訳だ。

が、明らかになったからと言って、どうにかなる訳が無い。寧ろより複雑になっているし、いい方法は思いつく事が無い。

「何か良い方法は無いのかな？」

何度言つたか分からない悩みを、幾度となく繰り返す。口にした所で、言葉にした所で、どうにかなる訳でもない。

けれど、口にしないとやつてられないと言うのも、また事実であった。全く人生とはままならないモノだ、と溜息を吐いてしまう。

一度体重制限が理由で、一食ご飯を三杯までに減らされてしまった様な憂鬱さだ。あの時は本当に辛かった。

「その本人に相談出来れば、少しはマシになるとは思いますが……」

「見つからないとなると、結構難しいデスね」

グラスワンダーは焼き魚を丁寧にはぐしながら。エルコンドルパサーは、食べ物にデスソースをぶちまけながら提案する。

状況は一向に良くならない。

そして、今の食事の状況も。

デスソースの勢いはすさまじく、少なからず周囲に飛び跳ねる。エルコンドルパサーの持っているデスソースは、少し舐めただけでも舌が焼けてしまう特別製。そんなモノを舐めてお前の味覚は大丈夫なのか？ と質問したくなるが、エルコンドルパサーは毎日よく掛けて

食べているので大丈夫だろう。

が、周りは当然大丈夫とは言えない。飛び散ったソースの行く先は、近くに置かれたグラスワンダーとスペシャルウィークの食事へと入り込んでしまう。スペシャルウィークとしては、少々掛かったくらいは大丈夫だが、グラスワンダーはそうは行かない。

「エル、少しソースの勢いを弱めた方が良いんじゃないんですか？」

「大丈夫デース。これ位掛けた方が美味しいんデスよ!!」

今は穏やかな笑みを浮かべながら、エルコンドルパサーを諫めるが効果は無い。心なしか、圧を感じてしまうのは、錯覚なのだろうか。

しかし、デスソースをかけまくってテンションが上がりにながって
いるエルコンドルパサーの耳には届かない。

「エル、良いですか？ 食事と言うのは、皆が楽しく食べる事が出来てこそその食事なのです。ですがそこで誰かが自己中心的な行動を取れば、皆が不愉快な思いになってしまいます。貴方は、分かっていますよね」

「あ、ソースが……」

グラスワンダーの警告も虚しく、デスソースによる猛攻は続いて行く。そしてとうとう、噴出されたデスソースが、グラスワンダーの頬に付着した。擬音を付けるのであれば、ベチャ、と言った所だろうか。

付着した瞬間、グラスワンダーの微笑みはどんどん険しくなってきた。怒っているのは誰の目からも明らかだった。

気が付いた瞬間、エルコンドルパサーの身体は地面に叩きつけられていた。周りに配慮してなのか、エルコンドルパサー自身に配慮してなのか、少し開けた場所で。威力はほんの少し控えめで。

「あ、あれ？ グラ……ス？」

「うふふ。エル、寝技の練習でもしましょうか。ついでに、身体も柔らかくなるから一石二鳥ですよー」

これはマズい。状況から、本能的に察するが、時すでに遅し。

既にグラスワンダーの怒り最頂点に達しており、浮かべる笑みの背後には般若の姿が現れてしまっている始末。

幻覚なのか?! と一瞬思ってしまうが、案外そうでも無いらしい。

「あ、あの、グラス、本当にごめんな……」

「問答無用ですー」

謝罪も虚しく、グラスワンダーの仕置きは無慈悲に始まる。メリメリ、パキパキと、明らかになってはいけない音が響く。

「ノオオオオオオ!! グラス、そこは、そこは、曲がりません!!」

「大丈夫ですよ。もっともっと、行けましてー」

エルコンドルパサーは身体中に駆け巡る激痛に絶叫して、グラスワンダーは只々楽し気に笑うだけ。

ある種の狂氣的な光景だ。

スペシャルウィークも自身の抱えている悩みが無ければ、戸惑いある種の恐怖を抱いていたかもしれない。

しかし、悩みを抱いていたスペシャルウィークは、ぼんやりとその光景を眺めていた。傍から見れば、精神を病んでいるのでは？ とも取れる光景だ。

だが、スペシャルウィークはじーつと見続けて、何かを閃いた。事実、頭から電球の様な何かが見れて来た程だ。

「そう、だよな。やっぱり、そうだよな!! やっぱりこれしか無いよ!

よしっ、そうと決めれば早くしなくちゃ!」

はやる気持ちを抑えながら、スペシャルウィークはテーブルに置かれた食事を掻き込む。普段なら味わう所だが、今はその時間すら惜しい。

昼食を抜く、と言う選択を取らない辺り、流石は食いしん坊と言わべきだろう。ものの数分で食事を終え、急いで後片付けをする。

グラスワンダーによる、エルコンドルパサーのストレッチ(自称)はまだ終わっておらず、未だに絶叫が響き渡っている。

「グラスちゃん。エルちゃん。ありがとう! 私、ちよつと行ってくるね!」

2人の返答を聞く間もなく、スペシャルウィークは——スピカの元へと足早に駆け抜けていく。

「……どういう、事デスか?」

「うーん、恐らくは解決したんじゃないかと」

2人は顔を見合わせて、困惑気な表情。先程のスペシャルウィークからの質問と同じ位、困惑していた表情だった。

「それはともかく、ストレッチを再開しましょうか」

「え？ グラス、もう許して下さい……アアアアアア!!」

食堂にて、また絶叫が木霊するのであった。

「へー、そんなに人參を賭けても良いの？」

「あらそちらこそ、そんなに人參を賭けて、良い度胸じゃありませんの？」

「ハッ、今のアタシはツキが回っている。フフ、見てろよ！ ここで奪われた人參を全て奪い取って見せる！」

「……お前ら、そんな風に賭け事なんかしやがって……まあ、俺も同類だから、偉そうな事は言えないんだがな……」

上から順に、トウカイテイオーとメジロマックイーン。ゴールドシップと、無理矢理巻き込まれた沖野が机に座っている。

右手は額に置かれており、手には一枚のトランプが。机の上に置かれているのは、数本の人參たち。

それぞれの4本、3本、5本、2本と言った具合に、まるで掛け金の様に置かれている。否、様では無く、掛け金として置かれているのだ。

理由は至極単純で、四人は賭け事——数多の種類の一つでもある、インディアンポーカーに興じているからである。

簡単にルールを述べるのであれば、自身は額に置かれたカードが見えず、相手のカードだけが見える状況下。

相手のカードより、自身の額に置かれているカードが大きければ勝ちのゲームだ。因みに、それぞれの数の大きさは、上から順に1、1、1、2だ。

勝てるど踏んだ三人は、見事に負けてしまい、沖野に全て人參が譲渡された。沖野はウマ娘では無いので、大量の人參を貰っても嬉しく無い。だが、勝ちには勝ちなので、取り敢えず全部貰っておくことに。

これから人參尽くしの料理が、数日は続く事だろう。「そう言えばトレーナー。ストロングブラッドとはどうやって出会っ

たっけか？」

「はあ？　なんだ、藪から棒に？」

「あ、それボクも気になる！」

「私も一応聞いておきたいですわね」

数日前、散々な振る舞いをしたストロングブラッドではあったが、ソレでも気になる者は気になるらしい。

相手を蹴落とそうなどと言った害意や敵意などでは無く、只々純粋な好奇心。仮にここで断れば、面倒な事になるのは嫌でも予想できる。

「と言うか、ゴールドシップ。お前も、一応その時の事は知ってるだろう？」

「いんや、正直覚えてない」

「お前なあ……」

普段から奇行が目立つゴールドシップ。記憶力は良い方だったし、覚えていた筈だったと思つて居たのだが……。

と考えて頭を振る。

まあ、本人が覚えていないと言っているのだから、別に追及する事も無いだろう。時間に余裕がある訳だし、聞かせても問題は無い。

思えばストロングブラッドとの出会いから、それ程時間が経っていないと言うのに、やけに懐かしく思えてしまう。

生きているのではなく、只死んでいないだけの少女。

あの時のストロングブラッドは、そう表現するのが適切な有様だった。

全てを失った末に

「もう限界です！」

1人のウマ娘が声を上げる。

「私達、こんなチームは——スピカは辞めさせていただきます」

それを皮切りに、もう1人も声を上げた。

続くのは3人目のウマ娘。

「貴方がこんなトレーナーだったという事に失望しました。今までありがとうございました。それでは、さようなら」

怒声とも取れる叫び声。これで終わりと言わんばかりに、それ以上何かを言う様子も無く、扉を開けて外へと出る。

「えっ?! いや、ちよつと待つ……」

沖野は何とか引き留めようとする。が、説得も虚しく、3人が足を止める事は無い。扉がガシャリと閉まる前に、3人はたった一言だけ。

「今までお世話になりました」

感謝の言葉にも関わらず、感謝の念は全く感じられない。一応お世話になったから、嫌々ながら言った。そんな感じだ。

とても冷たい言葉は、容赦なく沖野の心を抉る。

これで終わりだ。そう言わんばかりに、かつてスピカだったウマ娘達は背を向けて、沖野に振り返る事は無かった。

勢いよく扉は閉められ、まるで此方を拒む様に。先程まで奇麗だった部室は荒れ果て、本来であればいる筈のウマ娘の代わりに居るのは、叩きつけられた退部届だけ。何かが良い事がない事が起こった、と言うのは誰の眼から見ても明らかだった。

最後に残っていたメンバーが出ていき、スピカに所属していたウマ娘はいなくなつた。つまり、チームスピカの崩壊を意味している。

決定的で、覆し様の無い事実。

ほぼ全てを失った沖野に残されたのは、余りにも残酷すぎる事実と、机に残された数枚の退部届。只、ソレだけになってしまった。

始まりはたった一人のウマ娘の脱退。

沖野の放任主義に疑問を持ち、最終的には辞めた。

ソレを皮切りに他のウマ娘達も沖野の放任主義に疑問を持ち始めていき、全員も最終的には辞めてしまった。

そして、一応残っていた三人もスピカを辞めてしまい、気が付けば最後は沖野只一人になっていた。

所属していたウマ娘が全て脱退し、スピカの栄光は地に落ちた。こんなにも呆気なく、今まで積み上げて来たモノが無くなるのだから、全く笑えない話だ。

信頼も、栄光も、友情も、全ては水泡に帰す。

余りにも呆気なさ過ぎて、思わず笑ってしまう位だ。心の何処かで、これはもしかすると夢じゃないのか？ と信じられない自分がいる。

「ああ、そうか。俺は、結構悲しいのか」

チームを辞めてしまった事に。チームスピカを他とは比べ物にならない居場所にする事が出来なくて。

とても、悲しいのだ。

ポケットから棒付きのキャンディーを取り出し、口に啜える。

キャンディー特有の人工甘味料が口の中に広がり、美味しい筈だ。

が、何故か美味しいとは感じられない。

寧ろ、やけに苦いと感じてしまう。

まるでブラックコーヒーを飲んでいる様に。

原因は既に分かっている。放任主義であり続けたのが原因だ。だが、別に沖野はウマ娘達を憎んでも、嫌っても居ない。

寧ろ愛している、とまで言えるだろう。

これこそが正しいと思い、これこそがウマ娘の為になる。本気でそう思って、本気で彼女達を日本一にしようとして、死に物狂いで頑張っていたのに、理解されなかった。挙句、浴びせられる罵倒。

その事実がどうしようもない程に悲しいと思ってしまっていた。全く、良い大人が情けない。自分自身を叱咤する風に、啜えた飴を噛み砕く。

「さて……これから一体どうしようかな」

能天気さが売りで、日中問わず気に入ったウマ娘の脚を触る変態。そして、誰よりもウマ娘の為になりたい、と思つて居たトレーナー。それこそが沖野だ。

それこそが沖野だった筈だ。

だが、普段であれば明るい調子も今は陰が見える。隠しきれていない悲哀の感情は、ソレだけで先程の出来事がショックだった、と嫌でも分かつてしまう。

自身が作り上げた、チームスピカの崩壊。

幾度となく繰り返して来た挫折の中でも、心が折れそうになつてしまふ程に、辛く苦しい今回の挫折。

それを経て、今まさに、沖野は自身の全てを諦めそうになっていた。溢れ出ていた情熱も、叶えたいと思つて居た夢も。

大好きだと思つて居た感情も、全ては無くなつた様に感じてしまふ。今は只々何も感じない。所謂『無』だ。

「本当に……どうしようかな」

問いかけに答えてくれるモノはいない。沖野は、これから自分がどうすれば良いのか、全く分からないでいた。

そんな時、

「オーズ！ 只今アタシが来た……ん？ アレ？ なあトレーナー。他の奴らは一体どうした？ まさか、トレーナーの突如として脚を触ってしまうと言う、変態な性に耐え兼ねて、ストライキでも起こしたのか!？」

ノックもせず、何の躊躇も無く、扉がぶち開けられた。ウマ娘の身体能力は、こぞつて常人の倍はある。

仮に力一杯扉を開ければ、ソレだけで壊れてしまふだろう。

しかも、開けたのは手では無く足。

勢いよく開かれた扉は、ビキツと嫌な音が鳴る。勢いが良すぎたのだ。恐らく、金具の何処かが壊れてしまった。

数秒後に音を立てながら、扉がぶち壊され床に転がる。本来なら、どうして扉を壊しているんだ！ と怒つたり、驚く所だ。

しかし、沖野にとってはソレよりも衝撃的だった。沖野の目の前に

現れたウマ娘は。きめ細やで眩い銀髪。

街に繰り出せば間違はなく目を引く美貌。

頭には帽子が載せられ、耳にはヘッドギアが。極めつけは、腕に抱えられている今も尚勢いの良すぎるマグロ。

その容姿に対して、余りにも不釣り合いなアイテム。そのウマ娘が一体誰なのか？ と問いかければ、示し合わせた様にその名を呼ぶ事だろう。

何故なら彼女は特殊なのだから。

「……お前、居たのか？ ゴールドシップ」

黙れば美人、喋れば奇人、走る姿は浮沈艦と呼ばれる、トレセン学園屈指のクレイジーガールが、満を持しての登場。

ここ数日間姿を見せなかったので、てつきり彼女も沖野に愛想をつかして出て行ったのでは無いか、と思って居た。

が、どうやら違ったらしい。

「は？ 何言ってるんだ？ トレーナー。アタシは数日前にマグロ一本釣りしてえなあ、と思つて漁師のおっちゃん達の所に殴り込みに行つて、昨日マグロを一本釣りして、今帰つて来たところだろうが。見てわかんねえのか？」

「逆にソレを見て、俺が分かると思ってるのか？」

仮に分かるとするなら、限り無くゴールドシップと波長の合う者位だろう。

もつとも、そんな人物が存在するのなら、ゴールドシップが2人になる様なモノなので、面倒くささも喧しさも二倍になる筈だ

居ない事を切に願うしか無い。

部室内の惨状は目も当てられない程だ。整えられていた椅子やテーブルは倒され、ロッカーの一部は凹んでしまっている。

おまけに、先程壊された扉。

何も事情を知らない者から見れば、強盗でもやって来たのか?! と戦々恐々するだろう。

しかし、原因はそうでは無い。

強いて言うのであれば、他でも無い沖野自身が原因だ。

「……何か、あったのか？」

何かが起こったのは、目に見えて明らかだ。それでもゴールドシツプが律義に質問したのは、彼女なりの優しさなのだろう。

「……………」

沖野は何も言わない。

何も答えたりはしない。

事情を説明する事も無く、弁明をするわけでも無い。

「……悪いな」

たった一言、謝罪を述べただけ。

それ以上は何も言わない。ゴールドシツプを素通りして、部室が出る。普段行っているトレーニングをする気にはなれなかった。

「全く、本当に……情けない」

髪を強く握り締め、自分自身に憤りを覚える。覚えているのに、一歩も前に進めない自分自身に、また怒りを覚えてしまう。

情けない。情けない。情けない。

何時かの今日抱いた夢。『スピカのメンバー、全員が走るレースを見たい』と言う幻想は、燃え上がっていた情熱は、既に消え失せていた。

何もかもが、心底どうでも良くなってしまっていた。

沖野は既に終わっていた。

全てを諦めていた。

「マスターもう一杯」

飲み干したグラスを持ち上げて、カウンターに居る壮年の男性に言う。沖野が居る場所は、行きつけのバー。

既に沖野の顔はゆでだこと見紛う程に、真っ赤に染め上がっており、完全に出来上がってしまった。

飲み干した酒の数は、途中から数えるのを止めている。

沖野は酒に強い方だが、既に意識は混濁しており、眼の焦点も定まっていない。結構な量を飲んだのだろう。

「沖野さん、呑み過ぎですよ」

「うるさい！ 良いから酒を持って来い！」

馴染みのあるマスターの忠告も無視して、幾度となく酒を要求してくる。傍から見れば、厄介な酔っ払いの絡みだ。

人間、堕ちる所まで堕ちれば、縋るモノは酒や薬、女と相場は決まっている。沖野もその例に漏れず、酒に溺れている訳だ。

素面だと嫌でも思い出してしまう今日の出来事。思い出す度にどうしようもない怒りややるせなさを覚え、消え去りたくなる自己嫌悪に陥る。

拭い去りたくて、拭いきれなかった。

結果、酒に手を出してしまい深酒。泥酔してしまっているせい、思考はおぼつかず、態度も大きくなってしまう。

完全に悪循環だった。

「もうそれ位にした方が良いんじゃないのか？ マスター。コイツには酒の代わりに、キンキンに冷えた水を一杯」

聞き覚えのある声に振り向き、思わずウゲツと嫌そうな声を漏らしそうになる。そこに居たのは、自身が良く知る人だからだ。

トレセン学園に於いて、最強と呼ばれているチームが居る。その名こそが、チームリギル。七冠を達成した『皇帝』シンボリドルフも所属しているチームだ。

しかし、最初からリギルは最強と呼ばれていた訳では無い。

他でも無い担当トレーナーの手腕こそが、リギルをトレセン学園最強へと導いたのだ。そして、そのトレーナーこそが、沖野の目の前に居る女性。

「全く、飲み過ぎだ。少し、頭を冷やせ」

厳しい言葉だが、厳しさと同時に優しさも同居している。無駄の無い、洗練された身体は、自身の在り方に反映されている。

如何にも仕事ができます、と言わんばかりのグレーのパンツスーツを身に纏い、知的さを湛えた眼鏡が微かに光る。

彼女の名前は東条 ハナ。

今、沖野が一番会いたくない、同僚だ。

「どうした？ 嫌そうな顔をして、そんなに私に会うのが嫌だったの

か？」

「別にハナさんに会うのが嫌だった訳じゃ無い。只、今は余り顔を合わせたくないだけだ。余り、気にしないでくれ」

マスターに目配せするが、首を横に振るだけ。どうやらお酒を出してくれる事は、もう無いらしい。

仕方なく、沖野は渡された水を飲む。

「それはスピカのメンバーの大半が脱退した事が理由か？」

「……耳が早いな」

痛い所を突かれた、と言う表情を浮かべながらも、否定する事は無い。事実は事実だし、遅かれ早かれハナの耳にも届く事だからだ。

最初は同じく、一からスタートしたにも関わらず、一方は落ちぶれ、一方は最強と呼ばれるチームを率いている。

圧倒的な差に軽く絶望してしまいそうになる。

「別にお前が悪い訳じゃ無いさ。強いて言うのなら、運が悪かった、と言うべきか？ まあ、お前の放任主義にも原因があった事は確かだ。もう少し、自分がどう言う意図でこういう事をしているのか、となく？」

「いいや、全部俺が悪い。俺はイツらを信用しすぎて、その結果がアレだ。もう少し、ちゃんと見ていれば……なんてな」

微かにグラスを動かすと、中に入った氷同士が打ち付け合い、カラッと乾いた音が響く。後悔した所で、もう遅い。

まさにその通りだ。

既に分かり切った事だが、割り切れるか割り切れないかは別モノ。もしかすると、こんな状況は回避出来たのかもしれない。

もしかすると、今もまだスピカとして成り立っていたのかもしれない。そんなもしまを考えれば、悔しさや憤りを感じずにはいられない。

しかし、結局は全て過程だ。

目の前にあるのはスピカ崩壊、と言う事実であり、ソレこそが現実。目を逸らした所で、背けた所で、所詮は現実へと逃避でしかない。

おもむろに溜息を吐く。

溜息を吐けば幸せが逃げる、と言われているが、既に沖野の中に幸

せなんて物はない。あるのは只々絶望だけ。

これからどうすれば良いのかも分からない、暗闇だけだ。

「それでも、残っている娘は居るのだろうか？」

「まあ一応は……な」

「誰なんだ？」

「ゴールドシップ」

どこか聞いた事があるな、と言った具合にその言葉を幾度となく反芻させる。そうして、一体どんなウマ娘なのか、思い出す。

「確か、数日前にマグロの一本釣りしてくる、と訳の分からない事を言ったきり、無断欠席を繰り返していた彼女か」

「ああ、アイツだ」

「だが良かったんじゃないのか？」

注文したカクテルを飲みながら、ハナは言う。

「お前の事を信頼して、お前の事が正しいと信じて、お前を自身のトレーナーだと認めて、ゴールドシップは残ってくれたんだろう？
だとするなら、ソレはトレーナー冥利に尽きる事だと私は思うぞ」
「……………」

確かに、ハナの言っている事は正しい。ゴールドシップには、他のウマ娘達にならって、スピカを出ていくと言う選択肢もあった。

だが、彼女はソレを取らなかった。ソレは他でも無い沖野と言うトレーナーを信じ、認めてくれている証拠だ。

現にあの時「私も辞める」などと言わなかったのが確かな証拠だ。嬉しいと思うし、トレーナー冥利に尽きる、とも思っている。

が、それでもゴールドシップも一緒に辞めてほしかった、と沖野は心の何処かで思ってしまった。

だって、全員辞めてしまえば、全て諦めれるのに。ゴールドシップと言う存在が、今も尚、沖野を引き留めてしまっている。

もしかすると、ここからやり直せるのでは無いか？ だなんて、根拠も理由も無い希望を夢見てしまう。

沖野は諦めたかった。

何もかも諦めて、楽になってしまいたかった。

もしも数年前の自分が聞けば、思い切り殴り飛ばされてしまいそうだ。水を飲みながら、思わず苦笑してしまう。

意外にも話は弾み、絶え間も無い談笑で盛り上がってしまう。悩みを聞いてもらったのが功を奏したのだろう。

そんな中、ふとハナが思い出した様に1つの話題を挙げた。

「そう言えば最近、リギルの入団テストを受けさせてくれ、だなんて生意気な事を言う奴がウチにやって来たんだ」

「とすると、もしかして転校生？ 地方からの移籍か、田舎からの上京つて所か。しかし、リギルの入団テストを受けさせてくれ……とは。中々、大した奴じゃ無いか」

時期としては、ほとんどのチームはウマ娘達のスカウトを終わっている。だからこそ、件のウマ娘が地方からの移籍か、田舎からの上京だと簡単に分かってしまう。

地方からの移籍であれば、中央から目に留まる時期もまばらな為、此方にやって来る時期は基本的にランダムになってしまう。

田舎からの上京であれば、書類に幾つかの不備があれば、やって来る時期は大幅に遅れてしまう。よくある事だ。

「しかし、入団テストを受けさせてくれ……とは、結構根性があるな。出来る事なら……」

無意識に零れそうになった「スピカに来てほしい」と言う言葉。しかし、既にスピカは終わってしまったているチームだ。

だから、頭を振って考えるのを止める。

「リギルの入団テストつて言うと、確か……加入希望者同士で走らせて、その中で一番良い走りの奴を選ぶ、だったっけ？」

「ああ、そうだ」

「でも时期的にもう無理だし……結局、どうしたの？ やっぱり、ふざけた事を言うんじゃないって、追いついたとか？」

「まさか。そんな訳無いだろ」

沖野の冗談に対して、ハナは笑って否定する。本音を言えば、ハナの性格上あり得ない訳でも無いのだが、ここは黙っておく。

しかし、だとしたら疑問だ。テストを受ける事は出来ないだろう

し、自身の走りを見てもらう位ではリギルに加入する事は出来ない。だが、ハナの話聞く限りそのウマ娘はリギルに加入する事が出来たのだろう。であるならば、一体どうやって自身の实力を見せつけたのか。

考えてみるが、酒を飲み過ぎてしまったせいか上手く考えが纏まらない。酔いがまだ、覚めてはいないのだ。

こんな事なら酒を控えておけば良かった、と考えてしまいが全ては後の祭り。結局沖野はハナに答えを聞く事に。

「二体、ソイツは何をしたんだ？ おハナさん？」

答えを聞いて、沖野は自分の耳を疑った。

「まあ色々あつてな、ウチのメンバーと模擬レースをする事になったんだ」

「……は？」

聞き間違いでは無かろうか、と思ってもう一度聞く。

が、答えは依然として変わらない。話に出て来たウマ娘は、あろう事か中央のウマ娘達と模擬レースを行った。

にわかには信じがたい話だ。

中央と地方では明確な差と言うモノが存在している。

実力差、と言うモノが。

仮に地方のレースでは右に出るモノが居なかったウマ娘でも、中央に赴けば自身の遙か上を行く同期は数えきれない程いる。

事実、地方で結構な力を持ち、天狗になっていたウマ娘が、中央の实力に絶望してしまい、渋々地方に戻った、と言うケースもある。

つまりはそのウマ娘も、そう言ったケースなのだろう。自身の實力を過信してしまい、生意気な事を言ってしまった。

そうして行われた模擬レース。結果は分かり切っている。

恐らくは、中央に揉まれてしまった。

つまりは洗礼だ。

「結果は圧勝だった」

「まあ、中央の方が実力差は圧倒的だから、妥当だとは思うが。因みに、その地方の娘は一体どれ位の順位だったの？」

「違う。そのウマ娘が、だ」

「……え？ 本当？」

一体この一日で、自分はどれ程衝撃的な目を受けてしまうのだろうか。またもや沖野は我が耳を疑ってしまおう。

と言うよりは疑わない方が可笑しいだろう。確かに、地方から中央に移籍しても尚、頭角を現していたウマ娘は存在している。

例を挙げるなら、オグリキャップ。

しかし、一度は中央と言う圧倒的な壁に阻まれ、現実を知る。そこそが通例となつているのだ。にも関わらず、結果は勝利。

圧倒と言うおまけ付きで、だ。

まさにあり得ない結果、と言えるだろう。

「ま、別に内緒にしておく話でも無いし、お前には話しておこう。生憎、お前は見る事の出来なかつたレースだしな」

言い方に若干引つ掛かりを覚えるが、取り敢えず話を聞く事に。

始まりは、ほんの些細な事だ。

「すいません。僕を、貴方のチームに入れてもらう事って出来ますか？」

昼食を取ろうと食堂へ向かっていた所、ハナは突然声を掛けられた。振り向くと、そこには1人のウマ娘がいた。

身体つきは華奢で、さながら人形の様。

黒紫色の髪はツーサイドアップに結ばれ、目元が伸びた前髪で覆われている。顔は分からない。身に纏う雰囲気は何とも不可思議で、存在感は希薄。

まるで幽霊と話している気分だ。

「……悪いが、リギルに入る事は出来ない」

リギルは最強と言われるチーム。本来であれば、加入者を集めて模擬レースを行い、その中で優秀だった者。もしくは、ハナの眼鏡に適った者がリギルに加入できる。

が、既にその時期は過ぎている為、入部試験である模擬レースを行う事は出来ない。ハナの解答を聞き、そうですかと言う少女。

表情は分からないが、少し寂しそうにしている。

大方地方からの移籍なのだろう。この時期にチームに加入するウマ娘は2つにわけられる。1つは田舎から上京して来たウマ娘。

書類などの不備があると、こうやって中途半端な時期に入学する羽目になってしまい、チーム加入も苦勞する。

もう1つは地方からの移籍。

中央トレセン学園と地方のトレセン学園では、実力も質もレースの難度も大きく異なっている。その為、地方で燻っているウマ娘を見つけては、さらなる躍進を見込んで、こうやって中央にスカウトしているのだ。

そして、恐らくは目の前のウマ娘は地方からの移籍。だからこそ、こうやってリギルに加入できないか聞いて来たのだ。

リギルは最強のチームと言う事もあってか、各メディアで取り上げられる。実際、リギルの選手に憧れて、トレセン学園の門を叩く者も少なくはない。

きつと目の前の少女もリギルに憧れて、中央にやって来た筈だ。であるならば、流石にこのまま帰すのも少し可哀そうか。

ハナは微かに微笑んで提案する。

「……どうだ？ 君さえ良ければ、リギルのトレーニングを見学して
いかないか？」

予想外は、想定内

本来であれば、チームのトレーニングを見せる事は無い。理由は、チームで行っているトレーニングは、そのトレーナーが独自に考えた可能性があるからだ。

全てはレースで優勝する為。仮に、他のトレーナーに見られれば真似をされてしまい、レースで優勝されてしまうかもしれない。

だからこそ、他のチームにトレーニング風景を見せる事は無い。が、目の前の少女は何処のチームにも所属していない。

が、ゆくゆくは何処かのチームに加入するだろ。その点を鑑みれば、彼女にリギルのトレーニング風景を見学させるのは得策では無い。

ハナの冷静な部分は告げる。

しかし、今更になつて見学を止めるのは聊か非情過ぎるだろう。ハナは厳しい人物ではあるモノの、ちゃんと良心も持ち合わせている。懂れていたリギルに加入する為に、こうやって地方から移籍して来たのだ。多少鼻負した所で罰は当たらない。

一応、今日見た事は誰にも言わない様にと釘は刺しておく。恐らくは大丈夫だろうが、万が一の事も考えて。

「ここで自由に見ていてくれ。私はこれから行うトレーニングや、模擬レースの準備などをしないといけないから。何か用があれば声を掛けてくれ」

流星に付きつきりで見える事は出来ない。ハナにも、こなさなければいけない業務は存在している。リギルのトレーナーなのだから。

「分かりました」

ハナはいなくなるが、少女はピクリとも身体を動かさず、ジーツとリギルのトレーニング風景を眺めていた。

流星は最強のチームと言うべきなのか、練習用のレーストラックを丸々1つ使い、トレーニングが行われていた。

理想の身体を作る為の筋トレを行うウマ娘。瞬発力を鍛える為なのか、短距離走を行っているウマ娘も居る。

視点を変えればランニングをしているウマ娘の集団も居るし、レーストラックを一周してタイムを計っているウマ娘も。

はたまた見慣れないトレーニングを行っているウマ娘も居る。恐らくはアレこそが独自のトレーニングなのだろう。

地方とは全く異なる練習風景は、やや新鮮に映る。誰も彼もが真剣にトレーニングに取り組んでおり、その気迫は遠くで見ている少女にも伝わる。

「……何故？」

不意に疑問が漏れる。

どうして、そこまで必死になれるのか。必死になって、そんなにもトレーニングに打ち込む事が出来てしまうのか。

決まっている、レースに勝ちたいからだ。

レースに勝って、勝って、栄光を手に入れる。はたまた、日本一。否、世界一のウマ娘となって、自身の名を世界に轟かせる為に。

「帰りますか」

チームに入れないと言われた時から、既に用は無くなっている。こうして見学に来たのは、言ってしまうえば只の興味本位。

得る物はあったが、目の前に広がる光景は少女にとっては眩し過ぎて、やや不愉快だ。ずっと見ていたら、嫌いになってしまいそうな程に。

だからこそ、ここから離れないといけないと思った。少なくとも、こんな自分がここに居てはいけないと思った。しまった。

が、離れる事は出来ない。

「ねえ、ちよつとアンタ。さつきから眺めているけど、一体誰から許可を貰った訳？　ここは、リギルの練習場なんだけど」

明らかに好意的では無い。敵意が言葉の節々にふんだんに盛り込まれており、此方を見つめる相貌も鋭くなっている。

目の前に居るのは3人のウマ娘。

口ぶりから察するに、全員がリギルに所属しているのだろう。しかし、余り態度が良くない。このまま進めば面倒な事になるだろう。

頭を下げてそのまま帰ろうとするが、肩を掴まれてしまう。

「いや、何で逃げようとする訳?」

「私達質問してるじゃん?」

「無視? シカト? 腹立つんですけど」

「どうやら向こうは逃がしてくれる気は一切無いらしい。はてさて、一体これからどうすれば良いのか少女には分からない。」

「普通に事情を説明すれば簡単なのかもしれないが、流れる的に信じてはくれ無いだろう。無視して逃げてても良いが、後々面倒な事になるのは明白。」

頭を捻って妙案を考えるが、生憎いい考えは思いつかない。

「さっさと見えよ! 私達は、最強のチームに所属してるんだぞ!

どうせお前なんてそこら辺のカスみたいなチームに所属しているんだろ!」

握られていた肩を突き飛ばされ、少し後ろに下がってしまう。力が強すぎたせいなのか、若干痛みを感じてしまう。

しかし、痛みは気にならない。

何故ならそれよりも遥かに気になる事があったから。

「……え? 最強のチーム?」

「一体全体、どこのチームの話をしているのだろうか。少なくとも、このチームで無い事だけは確かな筈だ。」

「だとすれば、目の前の3人はリギルには所属していない。つまり、別のチームになるという事。これだと話が合わない。」

「実に不可思議だ。」

「そうだよ! 最強のチームだよ、リギルは中央においては最強と言われている! アンタ、そんな事も知らない訳!」

「田舎者とかそんなレベルじゃ無いでしょ!!」

「本当に言ってるの? だったらもう、馬鹿すぎない?」

「笑ったり、怒ったり、呆れたり、と反応は人それぞれ。しかし、どうやら聞き間違いでは無かったらしい。」

「リギルこそが最強のチーム、との事。」

「にわかには信じがたい話だ。」

「本当に、このリギルが最強のチーム何ですか?」

「さつきからしつこい！」

「常識でしょうが！」

「私達の事舐めている訳!?!」

もう一度、自身の聞き間違いに懸けるが、どうやら聞き間違いでは無いらしい。リギルこそが最強のチーム。

その事実は覆らない。

「そんな大した事無かったのに、ですか？」

思った事がついつい口に出てしまうのは、少女の悪い癖だ。小さくボソリと呟いたが、3人の耳には届いていたらしく、射殺す様に睨みつける。

逆鱗に触れてしまった。

今の状況こそが、まさしくそれだ。

「おい、お前、今なんて言った？」

「リギルが大したこと無い？ 取り消せよ！」

「舐めてるのか?! おい、舐めてるのか?!」

女の子らしさが欠片も無い、ドスの利いた声。ウマ娘として、いち女性としてその声は良くないが指摘は出来ない。

少女は胸倉を掴まれ、3人は憤怒の形相で睨みつける。仮に視線で人が殺せるのだとしたら、少女は今殺されてしまっていただろう。

しかし、睨みつけられているだけで、少女は何の反応も示さない。恐れや恐怖と言った感情は無い。只々面倒くさいな、とでも言いたげな気だるげな雰囲気。

きつと3人の顔すら見ていない。が、前髪で目元が覆われている為分からない。幾度となく怒鳴り、怒り散らす少女に反応は無い。

とうとう我慢できなくなり、拳を振り下ろしてしまいそうになる。暴力は振らない。あくまで脅し。トレセン学園において、暴力沙汰は大問題に発展する。よくて停学。最悪、レース出場停止処分が科せられる事もある。

3人としては、少女が怯えればよかった。怯えて、怖がって、先程

の発言を撤回すれば全ては丸く収まる。

が、少女はこれと言った反応を示さない。寧ろ、
「構いませんよ。どうぞ、好きに殴って下さい」
と言う始末。

売り言葉に買い言葉、とうとうヒートアップしていく。握られた拳
が下ろされる事は無く、そのまま振り下ろされようとした。
「止めろー！」

周囲が震える程の叫び声と共に、拳は止められる。

見ると、数名のウマ娘が来ていた。1人の手には振り下ろされそう
になっていた拳が握られている。トレーニングの途中だったのか、額
には珠粒の汗が。

「お前達、コレは一体何の騒ぎだ？ まだトレーニングは終わって
ないだろう。さっさと元の場所に戻れ」

「ですが、コイツがリギルを侮辱したんです」

余計に話がこじれてしまいそうだな、と少女は思う。どんどん逃げ
るに逃げられ無くなっていくし、他者と関わらなければいけない。

心底面倒くさくて、溜息が出てしまいそうだ。こんな事になるので
あれば、わざわざ見学などに来なければ良かった。

「その君。本当なのか？」

「さあ？ どうなのでしょう？ 受け取り方は人それぞれだと言
いますし。只単に、僕はリギルは余り大した事が無いと言っただけ
です」

嘘を吐いたり、隠せば良かった筈だ。

けれど、ソレをするのは何故か心底嫌だった。きつと面倒な事にな
る。さらに面倒な事になってしまう。予感しながら、最後まで言い切
る。

当然と言えば当然だが、此方を見る眼の色は変わる。哀れな被害者
から、滅ぼすべき外敵へと、いとも容易く。

重苦しい雰囲気を取り巻き、空気も重くなる。

「私達の後輩が、君に対して粗相をした事は謝る。が、先程の発言であ
る、リギルは大した事が無いと言うのは看過できない」

「どうか、その発言を撤回してくれませんか？」

「お断りします。発言と言うのは、それぞれの自由です。たかだか一人のウマ娘の発言に対して、そこまで目くじらを立てる事も無いと思いますよ」

上手くまとめる事が出来るのに。上手くとりなす事だつて出来た筈なのに、どんどんどんどん泥沼にはまっていくな。

どんどんどんどん、深い深い溝が出来上がる。どうしてこんな事をしているのか？ どうして自分はこんな事をしてしまっているのか。分かつている。

只の負け惜しみだ。只の八つ当たりだ。余りにどうしようもない行動理由に、軽く自己嫌悪に陥りそうになる。

けれど、他にも利用できる事はある。

私情以外にも、自身の目標を果たす為に。

「つまり、発言を撤回する気は無いと？」

「どのようにとつても構いません」

「貴方は……多分、地方からの移籍よね？ 良いのかしら？ そんな風に波風を立てちゃって？ これから苦労すると思うけど……」

「苦労なら今までも何度もしてきましたし、特に問題は無いかと。

……ああ、そうそう。たかが発言一つにここまで怒るって、何と言うか——」

——本当に、大人げないですよ。

声は至って平坦。

感情らしい感情は乗せられておらず、只々事務的な口調そのものだ。それでも、此方を馬鹿にして来た、と言う意図は伝わる。

空気はどんどん重くなっていき、まさに一触即発な状況だ。事の発端である3人のウマ娘は、どうすれば良いのか分からずにてんやわんやしている。

これから一体どうなるのかは、少女にも予想が付かない。何事も無かった様に振舞うのか、数にモノを言わせてソレなりの措置を取るの

か。

顔を向かい合わせる。

時間に見れば、ほんの数秒にも関わらずやけに長く感じられる。何となくレーストラックを見ると、今も尚大半のウマ娘達はトレーニングに勤しんでいる。もつとも、此方に意識が取られてない訳では無いが。

そこでふと思いつく。と言うよりは、どうして最初からこの提案をしなかったのか。我ながら自分自身に疑問を覚えてしまう。

「レースをしましょう」

「……レース？」

突然コイツは何を言っているのか？ 表情は、雄弁に語っているが、少女は途中で話を止める事も無く、最初から説明する。

至極、簡単に。

「だから、レースをやるんですよ。そうすれば、おのずと何方が正しいかは分かるでしょう？ 最強のチームである、リギルさん達」

意図的な挑発。

おまけにリギルを舐め腐っている。

あからさま過ぎる態度だが、それでも苛立ちを覚えてしまう。気を抜けば思わず手が出てしまいそうになる。歯を食いしばって、何とか堪えた。

「人数は、まあ出たい人は出ても良いんじゃないですか？ 僕は一人でも構いませんし。後、レーストラックの種類もそちらに任せます」条件としては、圧倒的にリギルが有利だ。

少女はたった一人に対して、リギル側から何名でも出しても良い。しかも、レーストラックの種類——長距離や中距離と言った所まで、此方の自由で良いと言って来たのだ。完全に舐められてしまっている。

いや、侮られているのだ。リギルは、目の前の少女に。怒りを込めて睨む。が、少女は特に動じた様子も無い。

淡々と了承するのかしないのかを待つ。

「最後に聞くが、本当にお前はこれで良いんだな？」

「はい、全然構いません」

「本当の、本当に良いんだな？」

「くだいですよ。此方はそれで構わないと言っているでしょう」
「負けたらお前は どうする？」

提案して来たのは、所謂罰ゲーム。

確かにこれだけ侮辱してきたのだから、負けたらはいサヨウナラで終わる筈が無いだろう。全員の要求は、リギルに対しての侮辱の撤回と、謝罪。これからは、2度とそんな事を言わないと誓わせる。

「謝罪でも撤回でも、土下座でもなんでも。最悪、負けたらトレセン学園を退学する、なんて事でも此方は全く構いませんよ」

つまり勝つ自信があるという事。

それも、リギルのウマ娘達に対して。この場に居るウマ娘はシンボリルドルフやヒシアマゾン、ナリタブライアンと言ったりリギルの看板では無い。

だが、実力はハナ手ずから鍛えてもらった為、折り紙付き。たった1人。ましてや、地方からの移籍に負ける事などあり得ない。

「……分かった。後悔はするなよ」

「精々、首を洗って待っておく事ね」

「私達は容赦しませんから、負けても文句を言わないで下さいよ」

それぞれが少女に向けて、個性豊かな捨て台詞を残して、そのままトレーニングに戻ろうとするが、

「お前ら、一体何をしているんだ？」

急速空気が冷凍されていき、サーツと背筋が寒くなっていく。心なしか、リギルの面々の顔は青ざめていき、視線は一点に集中される。その先に居たのは、如何にも仕事が出来ます、と言わんばかりのパンツスーツを身に纏い、黒髪のポニーテールをたなびかせる東条ハナが。

不敵に眼鏡は鈍く光り、自然体にも関わらず心なしか怒っている風に見える。見えると言うか、普通に怒っていた。

「取り敢えず、全員そこを動くな」

咄嗟に逃げようとするが、鋭い眼光と、冷淡過ぎる声。まるで時間

が止まった様に歩みを止めて、その場に静止した。

「そして、全員正座だ」

反抗する事は無い。

抗う事も無い。

全員が全員、無言で正座させられた。これから一体何が始まるのかは大体の予想がついてしまい、悲しい事に予想は的中した。

その後、その場に居た全員が、ハナからお説教をされるのであった。付け加えておくと、とても恐ろしかった。

「因みにだが、どうだった？ ウチのリギルは？」

「可もなく不可もなく、と言った所でしようか」

トレーニングの見学が終わった少女は、ハナと一緒に歩いていた。ハナは自身のトレーナー室へ戻る為に。

少女は教室へと向かい、通学用の鞆を取る為に。

素っ気ない回答に、ハナは苦笑してしまう。自身の予想が大いに外れてしまっていたのだから、若干の羞恥心もあるのだろう。

「それで、全部お前の計算通りだったのか？」

ふいに、空気が変わった。

先程の説教時よりも随分と鋭く、心底冷たい。成程、リギルを最強に導いた手腕、と言うのも間違いでは無い事が頷ける。

「計算通り、と言うのは？ 一体、何の事なんでしょうか？」

身に覚えが無い、とでも言いたげに首を傾げる少女。何とも可愛らしい仕草だが、ハナの目には白々しく映る。

「リギルの事を知らない筈が無い。その上で、喧嘩を売って来た。お前はリギルを使って、自身の腕試しにでも使おうとしたんじゃないのか？」

「まさか、買い被り過ぎだと思えますよ。僕は別に、その様な意図で言ったわけではありません。ただの本音です」

絶え間なく続く会話。

一見すると楽しそうに見えるが、何方も全く楽しんでいない。ハナの目は笑っていないし、少女は気だるげな雰囲気垂れ流す。

仮にこの中に第三者が入っていれば、さぞかし息苦しい思いをした
だろう。不吉な会話は弾み、気が付けば各々が目的の場所へと辿り着
く。

「まあ、トレセン学園に逸材がやって来たのであれば、私としては特に
いう事も無い」

「そうですか。それでは、失礼します」

お互いが背を向けて、それぞれの目的地へと向かう。

「言っておくが、私のリギルは大した事なんて無い、訳なんて無いから
な。精々、揉まれると良い。ストロングブラッド」

名前を呼ばれた少女は——ストロングブラッドは反射的に振り向
いてしまう。しかし、先程名前を呼んだハナの姿は何処にも無い。

残されたのは彼女一人だけ。

「ええ、期待せずに待っておきます」

平坦な声で、ストロングブラッドは小さく呟いた。

それから三日後。

リギルとストロングブラッドによる模擬レースは行われた。備え
付けられた観客席には、所狭しにウマ娘が並んでいる。

中には団扇やハチマキ。はっぴなどを身につけた、遠目から見ても
目立ってしまう、異色の格好をした者まで居る。

ピンク色の髪をしたウマ娘が、特に目立っている。

本来であれば只の模擬レース。ましてや、行われる理由が下らない
し、リギルのみで行われる為、この様な祭りごとにするつもりは無
かった。

しかし、噂に背びれ尾ひれがついてしまったのか、リギルの中で最
強を決めるレースだと吹聴されてしまう、こんな事態に。

はたまた、地方から移籍して来たウマ娘が、最強のチームに喧嘩を
売ったという事も知っていたのかもしれない。

兎にも角にも、幾人ものウマ娘が見学を希望して来た。最初はハナ
が断っていたが、理事長の了承を得た為承認。

こうして、沢山のギャラリーに囲まれて、リギルとたった1人の少
女との喧嘩はこれから幕を開けようとしているのだ。

「どうだ？ 緊張しているのか？」

ふと見かけた1人のウマ娘。ある意味では、このレースの主役とも言えるであろう、ストロングブラッドに声を掛ける。

今回のレースは正式なモノではない為、体操服を着用して行われる。ストロングブラッドも例に漏れず、体操服を身に着けている。

「別に緊張はしていませんよ。ですが、どうしてこんなに沢山の人だかりが出来ているんですか？ 雑音は無いに越した事は無いのですが」

「仕方無いだろう。理事長が『了承！ こういう祭りごとは率先して行った方が良い！』と許可したのだから、私も無下には出来ない。」

「成程、秋川さんの意向でしたか。であれば、問題はありません」

軽く礼をした後、ストロングブラッドはレースへと赴く。レースに何度行く事があっても、慣れないウマ娘は一生慣れない。

しかし、ストロングブラッドの足取りは至って普通。緊張している、と言う様子は全くもって見られない。

「……流石と言うべきか……いや、だが先程の発言は」

リギルに真正面から喧嘩を吹っかけて来たのだから、緊張していは話にならない。それよりも気になったのは、先程の発言。

観客を『雑音』と称した事と、理事長を『秋川さん』と呼んでいた事。その二つが、どうにもハナの中では引つかかった。

しかし、そろそろレースは始まる。今はそんな事を考えている暇も無い。既に、リギルの面々には声を掛けている。

出場するのはシンボリドルフなどリギルの顔では無いが、実力は他と比べれば一味も二味も違う。

舐め腐った態度を取って居たら、痛い目を見るのはまず間違い無い。そもそも、ストロングブラッドが勝つ事すらも難しいだろう。

リギルからの出場数は15名。走るレーストラックは中距離の芝。どれもこれもがリギルの勝利に有利に働く。

卑怯と言えはその通りだが、生憎そんな条件を提示して来たのは、他でも無いストロングブラッド本人だ。

本当に大きなハンデを負っても勝てる自身があるのか。はたまた、

大口を叩くだけの愚か者なのか。

真相はレースによって知る事が出来るだろう。

もう少しでレースが始まる。

「さて、それでは私も行くとするか」

各々の勇姿を見届ける為に、ハナも観客席へと向かう。

『さあ、始まりました！ リギル主催による模擬レース！ 実況は私、サクラバクシンオーでお送り致します！』

観客が盛り上がっている様に、実況も大いに盛り上がっているらしい。実況席に着いているのは快活な雰囲気をつつきたウマ娘。

髪はポニーテールに結ばれており、サイドはすつきりとしている髪型だ。瞳は梅の形になっており、テンションはとても高い。

トレセン学園では、委員長の他にも、様々な委員会に入っている為、周りからの信頼も厚い。ややバクシン！ と言って暴走気味になるのが玉に瑕なのだが。

選手の紹介も一通り終わり、レースは始まる。

『さあ、それでは各選手がゲートに入りました!! そして、今、まさに、ゲートが開いて、レースが始まりました!!』

ゲートが開いた。

先頭に踊り出たのは、ストロングブラッドだった。

馴れ初めと言う名の始まり方

「東条トレーナー。貴方も見に来ていましたか」

声を掛けられて振り向くと、そこには何とも凛々しいウマ娘が。ブラウン色の長髪の中には、白いメツシユ——三日月の様な形が施されておおり、その立ち振る舞いは威風堂々としており、全てのウマ娘の模範とも言えるだろう。

そして、リギルのトップとも言えるウマ娘——シンボリドルフ。

「見に来ない訳が無いだろう？ 私はリギルのトレーナーなのだから。それに、どんな結果になるのか、気にならない訳でも無い」

「確かにそうですね」

ふとウマ娘好きの同僚が頭に浮かび、周囲を見渡す。

「いや、アイツは用事があつてここには居なかつたか」

きつとこの話を聞けば、さぞかし悔しがるのだろう。そんな想像が簡単に出来てしまう自分に、苦笑してしまう。

そろそろレースが始まると言う事もあつてか、観客席も段々とボルテージが上がって来る。リギルの走りが間近で見れるのだから、楽しみなのだ。そう、あくまでリギルが主役で、そうなった背景には誰も興味が無い。

「そう言えば、何故レースに出場しなかつたんだ？ リギルを侮辱された事には、腹を立てていると思つたのだが」

「何もかも私だけで解決するのは、余り良く無いですよ。それに、後輩達に花を持たせてあげるのも、先輩の務めですから」

流星は生徒会長と言うべきなのだろうか。侮辱された事にも大して怒りを露わにしていないうし、対応も年相応。

眼中には無いという事か。それとも、リギルを信用しているのか。その後、エアグルーヴやヒシアマゾン。

フジキセキなどと言葉を交わしながら、時間を潰していく。そうして、遂に始まったレース。実況の声と共にレースは始まり、そうそうに番狂わせが起こった。驚愕による声が横行する中、ハナだけは冷静に分析する。

「……成程、どうやら口だけでは無いらしい」

無自覚に口角は微かに上がった。

深呼吸をする。

深く吸って、吐く。

そうすれば煩わしい何もかもが全て消え失せて、自分が取り組むべきただ一つに絞られる。『超集中』によって作り出される世界は、ストロングブラッドにとっては酷く都合の良い世界と言えた。

誰も居ない、自分だけの世界。酷く静かで、誰かの声がストロングブラッドの耳に届く事は無い。絶対的な静寂。

レースが始まる。実況は耳に届いていないが、ゲートが開いたという事はレースが始まった事を意味している。

タイミングを合わせるのは酷く簡単で、開ききつたと同時に、力一杯地面を蹴り上げる。爆発的な推進力を叩きだしたせいか、地面が抉れてしまったのを何となく感じるが、別に問題などは無い。

ゲートが開いたと同時に、走り出す。タイミングを合わせて、十分に力を溜めて。そうすれば、簡単に他と引き離せる。

数秒のラグがあつて、ストロングブラッドが先頭に踊り出た事実をようやく認識して、他のウマ娘達も走り始める。

最初は誰だって同じ。その筈なのに、ストロングブラッドだけが数センチ。数メートルも他とはリードしている。

ストロングブラッドの走り方は『逃げ』。それは誰の目に見ても明らかと言える。だからこそ、焦るべきでも、意固地になるべきでも無い。

だが、タイミングが完璧すぎたと言えるだろう。

まさかの展開に、周囲は少なからず焦ってしまふ。自身を嘲笑した人物が先頭にいるのだから、落ち着いてなど居られない。何とか追い抜かねばと思ってしまう。結果として、掛かり気味になる。

体力配分も、自身のペースも忘れて、只々目の前の宿敵を追い越す為だけに、全てを費やしてしまう。

にも関わらず、ストロングブラッドに追いつくとは出来ない。必死に走って、走って、走って。それでも追いつかない。

追いつけない。

やっている事は同じだ。走っている。二本の足を使って、芝の道を。その筈なのに、何故か目の前の背中はどうも遠く離れていく。距離は中距離。

仕掛ける所は少なくは無い。焦るべきじゃない。まだ、焦る所では無い。何故なら、レースは始まったばかりなのだから。

必死に自身の心を落ち着かせようとする。

(だけど、あんなにも背中が遠すぎる!!)

落ち着けば油断する。油断すれば、ペースは遅くなるし、体力を温存しようとして日寄ってしまう。だから、より一層距離が離されてしまう。

きっと最初から最後まで、ストロングブラッドは全速力なのだ。だからこそ、あんなスピードが出るし、こんなにも距離が引き剥がされる。

だったら、一度は待つべきだ。隙を伺うべきなのだ。分かっている筈なのに、簡単な事で、基本中の基本なのに、掛かり気味になってしまう。

これではある種の呪いと変わらないだろう。

走る、走る。

思い切り駆け抜けて、青い芝生をまき散らして、何とか先頭に追いつくだろうと走っているのに追いつかない。

追いつきもしない。

手を伸ばしたって、手を限界まで伸ばした所で、その背中に触れる事すら出来はしない。それすらも出来ないのだ。

最強のチームリギル。

その名前は、彼女達の中ではある種の誇りだ。リギルに所属するウマ娘達は、揃いも揃って精鋭ばかり。

ましてやシンボリドルフやナリタブライアン、エアグルーヴなどと言った、トレセン学園内でも憧れの存在が数多く在籍している。

メデア内でも多く取り上げられ、世界中にウマ娘の素晴らしさを布教している、立役者とも言えるだろう。

最強のチームと言われるのも頷ける。そして、他でも無い最強のチームへと導いた東条　ハナに教わる事も出来る。

今まで知らない事が、出来なかった事が出来る様に。無理だと思つた事も、可能になってしまう。

リギルのお陰で彼女達は変わった。競争率が多い中で、運よく入れたのも嬉しかった。憧れの存在と共に練習出来たのも嬉しかった。

出来なかった事が出来る様になった事も、自身の可能性が広がっていった事も、途轍もない程に嬉しかった。

だから、だからこそ、リギルは彼女達にとって誇りだ。最強の肩書も、彼女達にとっては途轍もなく重いモノとして扱われる。

負けたくない。

思う。

負けたくない。

思う。

こんな奴に負けたくない。

そう思ってしまう。

『さあ、レースも終盤へと差し掛かって来ました！　先頭は依然としてストロングブラッドさんが独走状態です！　さて、これから一体どうなってしまうのでしょうか！』

状況は放送でも聞いた通り、あの生意気なウマ娘が一位を取っている。あんなに思い切り走っているというのに、未だに体力が衰える様子はない。

一体どんな鍛え方をすれば、その様な走りが出来るのか。心底不思議で不思議でしょうがない。対する此方は、序盤で掛かり過ぎてしまった。

アレに当てられたからだとか、焦ってしまったから、などとそれっぽい理由を並べた所で結果は結果。

今まさにストロングブラッドは勝利を手にしようとしていて、リギルの誰も彼もが彼女に唾すら付けられない、まさに危機的状況。

だからこそ、だからこそ、勝ちたいという思いはますます強くなる。体力は既に底を尽きそうになる。

足は段々痛みを帯びているし、視界もチカチカとしてちやんと定まらない。辛い、苦しい。苦悶の表情を思わず浮かべてしまいそうになる。

けれど、まだ駄目だ。

まだ音を上げちゃいけない。

まだ、諦めてはいけない。

せめて追いつく事さえ出来れば。追い抜く事は出来なくても、それ位は出来る筈だろうが。動かなくなりそうな身体を叱咤する。

無理でも出来ないでも、それでも何とか身体を動かせる。前にはまだ届かない。まだ、無理だ。けれど、今は無理でももう少しで行けるかもしれない。

足掻く。

必死になつて足掻く。

無理だと言われても、無駄だと言われても。そんな事は分かっているし、理解くらいは当然している筈だ。

けれど、それでもだ。

それでも走らなきゃいけないのだ。これはある種の意地。負けたくないのだ。リギルに唾を吐いた奴を、嘲笑った奴を、何もせずには終われない。

「やられっぱなしは、性に合わないのよ!!」

叫ぶ。

体力を無駄に浪費させる為の無駄な行動なのかもしれないが、意味はある。自身を鼓舞する為に。自身を奮い立たせる為に。

疲れた筈の体力が辛うじて戻った様に錯覚する。けれど、所詮は錯覚しただけだ。実際には体力は回復出来ていないだろうし、所詮は思い込み。

でも、ほんの少しだけ頑張れるキツカケくらいにはなれる。地面を踏みしめて、離す。走る時には意識していなかった、単純作業。

意識的に行う。

手ごたえがある。

地面がズブズブと沈んでいく感覚。力が足に溜まっているだろう、

と言う感覚。味わった事の無い感覚だ。

けれど、力は沸き上がる。

気が付けば周囲の光景は随分と様変わりしている。ラストスパート。観客席からは幾人ものウマ娘が応援してくれている。

空は青空。

まだイケる。まだ諦めちゃいけない。ラストスパート。これで最後だ。最後なんだから、精一杯頑張ってくれよ。

語り掛ける様に。

激励する様に。

それが奇跡だったのか、はたまた只の幻覚だったのかは分からない。仮に後で考えても分かる訳が無い。

精々上手く使う事だ。

身体がやけに軽く感じた。重く感じている筈なのに、何故か余りピンと来ていない。どうやって走れば良いのかが手に取る様に分かる。

(これなら、イケる!!)

いける。

まだイケる。

後もう少しで、勝利に手が届くまでの距離に居るのだ。

『さあ、今先頭にいるのはストロングブラッドさん！ レースはラストスパートに差し掛かり、各々が背負うモノの為に頑張っています』
いける。

これならもう一度だけ、チャンスがある。

残された体力すらも搾りかすにして、死にモノ狂いで走る。走って、走って、走って、肩を並ぶ事が出来た。

なのに、口から発せられた言葉によって、また地獄へと突き落とされる。さながら、頑張っている人達を操る様にして。

「……もう少し、行けそうですね」

「えっ？」

言葉を聞いた時には既に遅かった。さらに力を伸ばし、地面を蹴る。たったそれだけ。何とも単純な作業工程だ。

その筈なのに、

『優勝はストロングブラッドさんになりました！ 終盤でのあの走りは、委員長としては見習いたいほどの強さを持っていますね』

呆気なくレースは終わった。

結局の勝者はストロングブラッド。

くしくも、本人が言っていた通りになってしまっていた。全力を尽くしたのに。何とかして足掻こうと頑張ったのに。

追いつく事すら出来なかった。

「……クソツッ!!」

1人が悔しさの余り、芝生に腕を叩きつける。全員同じだ。はらわたが煮えくり返る思いをしている。けれど、ぶつける相手はストロングブラッドでは無い。それでは只の八つ当たりと何ら変わり無いだろう。

負けた理由は単純に、ストロングブラッドが強かったから。歯牙にもかけない程に、触れる事すら出来ない程に、強かったから。

ストロングブラッドは此方に視線を向ける事も無く、その場を去ろうとする。もう、ここには興味も関心も無い。

遠回しに、そう言っている様な気がした。

「……待て、おい、待て!!」

声を出し、叫び、何とか制止させようとする。けれど、本人が足を止める事は無い。聞こえていないのか。

否、聞こえていない振りをしているだけだろう。

リギルを下した、期待のダークホース。誰も彼もが彼女を褒めたたえ、割れんばかりの歓声を上げている。

けれど、彼女自身はその歓声に応じる事も、誇る事も、喜ぶ事すらしない。当然だ、最初から口にしていただけのだから。

——全員、大した事が無い、と。

勝利するのは寧ろ、当然の結果だったのだろう。

「クソツ、クソツ、クソツ!!」

悔しんでもどうにもならない。

芝生は抉れ、地面が露出する。痛くて、悲しくて、辛くて。しかし、振り下ろす腕が止まる事は無かった。

悔しかった。

とても、悔しかった。

「そして、まさかの圧勝、ね。何というか、にわかには信じがたい話だな。って言うか、まさか俺が用事で居ない時に限って、そんな事が起きるなんて」

一通り話を聞き終わると、沖野は机へと突っ伏して悔しそうに叩く。確かにウマ娘をこよなく愛し、レースなども頻繁にチェックしている程なのだから、件のレースが見れなかった悔しさや悲しさは図りしれないだろう。

若干、酔いが回っているせいでもあるのだが。勧められるがままに水を飲んで、一度クールダウンをする。

話を変える。

「っていう事は、その娘はリギルに加入したって訳か。最強のチームがますます最強になっていくんじゃないの?」

勝ったのだから当然、リギルに加入した筈だ。元々、リギルに加入したくてこんな事をやらかしてしまった位だ。

しかし、沖野の軽口にハナは首を振る。

「いいや、結局アイツはリギルに加入はしなかった」

「は? え? いやいや、何の冗談なんだ? だって、ソイツはリギルに加入したいが為に、リギルを侮辱して、レースを行ったんだろう?」
「違うな。そもそも前提条件が違う」

前提条件? とでも言いたげに、沖野は首を傾げる。

反応は至極全うだ。

ましてや、沖野は現場に居合わせていない。

「簡単な話さ。アイツはリギルを腕試しに使った」

「リギルを腕試しに使うって……地方移籍が?! しかし、だとしたら大した胆力だなあ。しかも、それで圧勝してしまうんだから、かなりの逸材か」

最強と名高いチームを腕試しに使うのは、そうそう出来る事でも無い。ましてや勝利を収める。しかも、自身の退学を対価に。

いかれている。
狂っている。

そう思う事しか出来ない行動だ。ハナは酒を注文して、一気に飲み干す。そこには微かな悔しさが垣間見えている。

「負けた。リギルは負けたんだ。沖野。私にはそれがどうにもならない」

——どうにもならない程、悔しいのだ。

レースが終わってから、既に数日が経過している。

それでも尚、薄れる事の無い悔しき。他でも無い、リギルの勝利を信じているからこそ、鍛え上げて来たからこそ、なのだろう。

「……おハナさん」

沖野は何も言えない。

慰めの言葉など掛けられないし、励ましの言葉も掛ける事は出来ない。沖野に出来る事はただ名前を呼ぶ事だけだった。

そして、場はお開きとなる。

「さて、それじゃあ私はそろそろ行くぞ」

少し飲み過ぎてしまったせいなのか、若干身体がふらついてしまう。らしくない、とは思うがああの時の悔しさが再発してしまっただらしい。

まあこんな時があっても別に大丈夫か。本来なら律する所なのかもしれないが、仕様がなくて済ませて帰ろうとする。

「あ、おハナさんー」

扉に手を掛けた時、沖野に名前を呼ばれる。

他に何か言いたい事でもあったのだろうか？ と考えて気が付く。

「そう言えば、言い忘れていたな。リギルを倒したウマ娘の名前はストロングブラッド。もしも運が良ければ、案外スピカに入るかもな」

「いや、それもそうなんだけど、財布を忘れたからお金を貸して下さい
!!」

流れる様に土下座をして、金を要求する沖野。予想が外れていた事、余りにも情けない同僚の姿を見た事。

色々な感情がごちゃ混ぜになって、ハナは呆れた風に溜息を吐いた

のだった。

次の日、沖野は激痛と共に目が覚めた。

頭が割れる様に痛く、気持ちの悪い酩酊感。気を抜けば吐しゃ物を吐き出してしまいそうになる、何とも言えない状況。

「ああ、これが二日酔いかあ」

二日酔いはこの世の地獄と言われているが、成程。確かにこの苦痛は地獄に匹敵する程と言えるだろう。

昨日、調子にのって飲み過ぎなければ良かったな、と後悔してしまいが、今更過去をやり直す事は出来ない。

トレーナーなのだから休みは無い。今日もトレセン学園へ行かないと行けず、時間は刻一刻と沖野に迫りくる。けれど、

「……ああ、行きたくないな」

不意に口から零れ出る本音。

それは冗談や出まかせでも無く、沖野の本心だ。二日酔いが苦しい、と言うのも理由に挙げられるが、大部分の原因はスピカの崩壊。

そして、唯一残ってくれたゴールドシップとの向き合い方が相も変わらずに分からないでいる。普段からおかしな言動をしているが、今回に関しては別におかしい行動も、ふざけた事も全くしていない。

だからこそ、向き合う事がどうしようもない程に、怖くて怖くて仕方が無い。いつそのこと、トレーナーをサボってしまおうか。

なんて、トレーナーにあるまじき事を考えてしまう。即座に頭を振って、一体自分は何を言っているのだと叱咤する。

取りあえずトレセン学園に向かおう。

このままでは色々と考えたくない事を考えてしまいそうになる。

しかし、その直後、胃から何かがせり上がって来る感覚。必死に押しとどめようとするが、止まる事は無い。

「ツツ……これはマズい!!」

時間は刻一刻を争う。

急いで沖野はトイレへと駆け込む。

まさに、最悪の朝に相応しい一日だった。

「ああ、どうする？ 俺は一体どうすれば良い？ 行くか？ 行くべきなのか？ だけど、それでも、ああ、どうする!？」

スピカの部屋。

そこより少し離れた道で、沖野は行ったり来たりを繰り返している。向かう先は当然スピカの部屋。

なのだが、沖野は未だに向かう事が出来ずに居た。正確には、向かうとすれば向かう事は出来る。が、扉に手を掛けようとすると、震えが止まらなくなってしまふのだ。

あの時向けられた、冷たい視線。

もしもゴールドシップに向けられたら、と考えると怖くて怖くて仕方が無いのだ。結果、トレセン学園に居るというのに、未だに決心がつかずにいた。

全くもって情けない話だ。

頭の中では行く？ 行かない？ の二文字が浮かんでは消え、浮かんでは消え、を繰り返している。まだどちらも選んでいない。

「ここは当然……行く。けれど、やっぱり。ああ、本当にどうすれば良い」

口に啞えている棒付きキャンディーも上下に揺れており、全くもって落ち着かない。傍から見れば何とも見苦しい光景。

おまけに沖野は周囲を気にしてなどいない。

だからこそ、向けられる奇異の視線には動じたりしない。が、やってくる1人のウマ娘の気配にも気が付かないでいる。

「……あの」

「行くか？ 行くべきか？」

「あの、すみません」

「でもなあ、怖いんだよなあ。全然怖いんだよなあ」

「もしもし？ あの、すみません。もしもし？」

「行くしか無いよな。と言うか、それしか選択肢も無いし、そろそろ腹を括るしか……」

「あの！　すみませんが！　退いてもらえないでしょうか！」

叫び声で、ようやく沖野は後ろに誰かが居る事に気が付く。一瞬驚いてしまうが、反射的に振り返るとそこには1人のウマ娘が。

髪はツーサイドアップに結ばれており、色は黒紫。目元は前髪で覆われており、どんな表情を浮かべているのか分からない。

身体つきは華奢で、お人形の様と言う表現がもつとも適切だろう。だが、ウマ娘だからなのか、鍛えられている部分はちゃんと鍛えられている。

「あ、ああ。すまない」

そこでようやく、自分が通行の妨げになっている事に気が付く。避けて道を空けるのだが、その時不意に目に留まってしまう。

細くしなやかな、色白い脚が。

「ツツ……ヒヤツ!!」

「ほうほう。これは成程。ちゃんと鍛えられている、とても良い脚だ。恐らくレースでも高順位を獲得する事が出来る。素晴らし……ブゲラツ!!」

何の躊躇も無くウマ娘の脚を触るのは、沖野のどうしようもない悪い癖だ。今までと同じように、今回のウマ娘も例に漏れず、沖野の顔面に蹴りを入れる。

シューズが沖野の顔にめり込み、そのまま飛ばされる。さながら、ボールを蹴った様な感じだろうか。

盛大に吹っ飛ばされるが、それでも沖野は死なない。怪我は精々鼻血位のもので、全くもって問題が無い。

勿論、突然少女の脚を触るのは問題ない訳では無いのだが、沖野は幾度となくウマ娘達の脚を触り続けている為どうにもならない。

「痛たたた……」

「何やってるんですか、貴方は」

向けられる視線は、目元が隠れているにも関わらずよく分かる。さながら、汚物を見つめる様な目だ。

とある特定の男性達であれば、ご褒美です！　などと狂喜乱舞しながら喜ぶかもしれないが、生憎沖野にその手の趣味は無い。

声は怒気がふんだんに盛り込まれており、蹴っただけでは済まされないと言回しに語っている気がしてならない。

「いやあ。悪い。本当に悪い。昔からの悪い癖なんだが、君本当に良い脚をしているな？　しかし、こんな場所へ一体何をしに？」

「謝って済まされるモノでは無いですが。大体、道端で挙動不審な行動をしている貴方こそ一体何をしているんですか？」

聞かれた瞬間、言葉に詰まる。

確かに何かをブツブツと呟きながら、道を行ったり来たりしているのは、不審者と見間違われても仕方が無い。

実際、そう言う風に疑われている。

「違う違う！　別にやましい気持ちがあったとか、そう言う訳じゃない！　俺は沖野って言って、トレーナーをしているんだ！」

「トレーナー、ですか？　他人の脚を勝手に触る変態の癖に？」

「いや、それは……本当にごめん」

まさしく正論。

何も言い返す事が出来ず、沖野は項垂れる。沖野のこう言った奇行は度々注意されているのだが、一向に治る気配が無い。

始末書や減給などは慣れているが、流石にそろそろマズイだろう。トレーナー資格をなく奪されたとしてもおかしくはない。

「まあ、良いです。それで、貴方は一体何処のトレーナーをしているんですか？」

何処と言うのは当然、チームを指している。

一瞬見栄を張ろうか？　と考える。スピカは現在、所属人数が1人しかない。弱小とも呼べないチーム。

けれど、そんな考えは直ぐに捨てた。

仮にそんな事を言ったとすれば、ゴールドシップに申し訳が立たないだろう。信じてくれた彼女の為にも、正直に言うべきだ。

「俺はチームスピカのトレーナーをしている」

「チームスピカ、ですか。お聞きしたいのですが、所属者数は一体どれ位ですか？　僕は地方からの移籍で、まだチームに所属していませんよ」

そこでふと思いだす。

昨日のハナとの会話を。

酔っ払っていたせいなのか、話の内容の大半を忘れてしまっていたが、確かにギルを下した凄いうま娘がいたと聞いた。

目元は隠れて、身体つきは華奢。不思議な雰囲気纏っており、地方からの移籍。そのどれもこれもが、目の前のうま娘と特徴が合致する。

名前を確か、何と言っただろうか。

確か……………。

「ああ、そうだ。確か、ストロングブラッド」

「はい。そうですねけど……………どうして僕の名前を知っているんですか？」

「いや。別に何でもない？　もしかして、ウチに入りたいのか？」

「数が少ないのであれば。ですけど」

「なら安心しろ。今はたった一人しか所属していない」

光明が見えた。

絶望の淵に立っていた筈だが、希望の光が差し込まれた。だとするなら、まだやり直せるのかもしれない。

チームスピカは蘇る事が出来るかもしれない。

「ようこそ。ストロングブラッド。歓迎しよう」

「……………因みにですが、僕は先程の一部始終を写真に収めています」「え？」

ストロングブラッドが唐突に口にした事実は、沖野を呆気に取らせるのに十分だった。ストロングブラッドの手に持っているのは、現代社会でよく使われているであろう電子機器の端末型携帯。

液晶画面に映っているのは、脚を触っている沖野の姿だ。目に入った、ほんの数秒で沖野は写真の危険性を理解する。

もしもインターネット上にアップでもされようものなら、恐らくは悪い意味で話題になるだろう。

最悪、トレセン学園の責任問題に発展してしまう可能性すらある。つまりストロングブラッドが撮影した写真には、それ程の破壊力を

秘めている、という事に他ならない。

外側は平静を保っているが、沖野の内心は余り穏やかでは無い。何故なら、目の前の少女がどうやって写真を使うかによって、自身のこれからが決まるのだから。

待つ。

待つ。

待つ。

しかし、とうとう口に出してしまう。

「……その写真を、どうするつもりなんだ？」

待っていました。そう言いたげに、ストロングブラッドの口元は微かに歪む。それもほんの一瞬。すぐに平面に戻った彼女は、抑揚の無い声で告げる。

「僕はスピカに加入するつもりですが、貴方の意見に従うつもりはありません。なので、どうか僕の要求を呑んで下さい」
脅しなのだろう。

写真を見せながら、ストロングブラッドはそんな事を要求する。一難さってまた一難とは、まさにこの事を指しているのだろう。

「なんだ!?!」 なんか、外から変な声が聞こえて……ってトレーナーか。うん? そこに居るのは一体誰なんだよ」

前途多難が予測されるこれからは、沖野は長く深い溜息を吐いた。

「……と言う訳で、これが俺とアイツの最初の出会いだ」

「ゴリゴリに脅迫されてるじゃない!」

「寧ろ、あの奇行をどうして脅しに使わなかったのか、と言う所にワタクシ達が疑問を持つところですよ!」

「成程。確かにトレーナーを脅迫するって方法が……畜生、それさえ分かっていたら、アタシの計画はより完璧なモノに」

反応は様々。

しかし、何故か怒りを覚えていない。その事に疑問を覚えぬ訳では無いが、沖野は余り考えないようにする。

あれから時は過ぎた。

何も無かったスピカから、掛け替えのないスピカへと。

だからこそ、今なら言える。あの頃の日々は、悪いモノでは無かつたのだ、と。

死んで死にたい死なない死ねない

「分かりました！ 皆さん！ 私達スピカは、ストロングブラッドさんとレースをしてみれば良いと思います！」

扉をあけ放ち、やって来たスペシャルウィークは一番に言う。突然やって来た事に一同は驚くが、スペシャルウィークの意見を聞いて少し考える。

レースをする。

ウマ娘にとっては確かに、もっともらしい方法かもしれない。が、1つ問題点を挙げるとするのであれば、ストロングブラッドが途轍もなく強いと言う事だ。

見たレースは一試合だけなのだが、あの速度も、走りも、レースに掛ける執念すらも、聊か化け物じみている。

レースを挑む前から負ける事を考えてはいけない。それは当然の事だが、それでもあれら全てはスピカにとって脅威になり得る。

そして、他にも問題が。

「……確かに、ソレは妙案ですけど、どうやって本人に了承を取りますの？」

「あの人、絶対に嫌がりますよね。最悪、前みたいに素っ気なくあしらわれると思いますよ。止めときましようよ、スペ先輩」

一番の問題点は、ストロングブラッドが了承するか否か。

そこに起因するのが大きい。

そして、今までのストロングブラッドを振り返ってみると、仮にレースを申し出たとしても、難色を示すのは簡単に予想が付く。

心底嫌そうな表情で、此方を見下す筈だ。

「確かに……それは、そうですね。ですけど、このままじゃ駄目だと私、思うんです！」

駄目だと思う。

それは、スピカ全員が思ってる事だろう。

あれから数日が経過するが、未だに関係が修復する目途はたたな

い。このまま放置してれば、スピカとストロングブラッドの間に来た溝はどんどん深まる。

果ては、塞ぐ事が出来ない程の深さにまで到達する筈だ。

だからこそ、スペシャルウィークが言っている事は間違っていない。そして、仲間であるメジロマックイーン、ゴールドシップ、トウカイトイオー、ダイワスカーレット、ウオツカ——スピカも分かっている。

「スペ。お前は、それで良いのか？ 多分、アイツは心の底から嫌がると思うし、拒むと思う。嫌な思いをするかもしれない」

「はい！ それでも、それでもストロングブラッドさんは、スピカの一員ですから！」

スペシャルウィークの言葉に、満足そうに頷く沖野。如何やら、これから一体何をするのかの方針は決まった様だ。

「よしっ、それじゃあまあ、ブラッドの奴とレースする云々は置いといて、さっさとトレーニングを始めるぞ！ ここでサボってたなら、アイツに勝つなんて夢のまた夢なんだからな！」

各々が、了承の意を込めた返事を返す。

そしてトレーニングを始めようとした時、

「……そう言えば、明日はアイツのレースか」

渦中の人であるストロングブラッドのレースが近い事を思い出し、沖野は少なからず心配をするのだった。

大丈夫なのだろうか、と。

意識が覚醒する

目が覚める。

「おはよう、うごきます」

誰に言う訳でも無く、強いて言うなら自分自身に言う様にして、ストロングブラッドは身体を起こして小さく呟く。

カーテンの隙間から差し込む光、ガラス越しに聞こえてくる小鳥達のさえずり。何もかもがいつも通りなのに、何かが違うと直感的に気

が付く。

けれど、一体何が異なるのか分からない。

そう言えば、いつもは聞こえる筈の目覚ましの音が聞えなかった。ふと机に置かれた目覚ましを取り、目を見開いた。

「つ……8時50分」

普段であれば6時。

遅くても7時以内には起きる筈なのに、今現在の時間。つまりは寝坊だ。しかも、最悪な事に今日はレースの日。

集合時間は10時。

今から急いで行かなければ、間に合わない。

「急いで、支度をしないと……」

ベッドから立ち上がり、洋服を着替えようとして、立ち眩みを覚えた。まともに立っていられる、思わず床に膝を突いてしまう。

「あれ？ 何、ですか……これ、は？」

今まで感じ事の無い感覚。

——違う。

一回だけ。たったの一回だけだったが、この感覚を味わった事がある。考えようとすると、酷く頭が痛む。

身体が不調を感じた瞬間、堰を切った様にどんどん身体が不調に侵されていく。気持ち悪くて、苦しくて、立っている事すら辛い。

それでも必死になって思い出そうとする。

思い出そうとして。

思い出そうとして。

思い出そうとして、ようやく思い出す。

「……これは、風邪、ですか」

もしかすると、インフルエンザの可能性も有り得るかもしれない。まさかの結果に、ストロングブラッドの頭の中はパニックに陥る。

戸惑い、困惑、焦り。

しかし余り悠長な事も言ってもらえない。

インフルエンザだったら他者に移る可能性もある。家で安静にするべきだ。当たり前前で、一般常識な事すらも、今のストロングブラッ

ドの頭には無い。

只々レースに行かなければいけない。

レースに向かわなければいけない。

それ一色に染まっている。身体はまるで重りでも持ったみたいに重いし、意識は二日酔い見たいな酩酊感に侵され混濁。

立っているのもやつとだし、出来る事ならベッドで横になりたい。

微かに零れ落ちる、自身の弱音すらもストロングブラッドは噛み砕き、見なかつた振りをする。

支度をする。

部屋を出る。

階段を降りる。

外に出る。

普段から行っている、簡単な工程ですら時間を掛けてしまう。端末型携帯電話を取り出し、時間を確認。

急いで走れば、まだ間に合う筈だ。日課としてランニングを行っているストロングブラッドにとってはレース会場まで走っていくのはさして苦では無い。

そう、風邪を引いてさえいなければ。

走ろうとして、足が一瞬止まってしまふ。まるで全身を鎖で縛られているかのような不調に加えて、頭を駆け抜ける鋭い痛み。

立っている事すらままならず、反射的にしやがみ込んでしまふ。痛みと同時に気持ちの悪い感覚に全身を浸され、嘔吐してしまふようになる。

周りにはちらほらと人も居る。

全員が全員、ストロングブラッドを見て心配そうにしている。そんな視線すらも、今のストロングブラッドにとっては不快な要素の一つだ。

止める。そんな目で僕を見るな、と今すぐ立ち上がって、叫びたい衝動に駆られる。しかし、身体は依然として不調。

叫ぶ気力や元気すら欠片も無い。

それでもストロングブラッドは無理やり自分自身を立ち上がらせ

て、何とかレースに向かおうとする。

こんな痛みがどうしたんだと。あの頃に比べれば、何とも生ぬるいじゃ無いか。だから、走れ。だから、動け。だから、急げ。

自分自身を執拗に叱咤して、何とかままならない身体を動かす。息を吐く暇も無く、そのまま走り始める。

時間は既に危険な状況だ。

もしもこのままここに居れば、レースに出られない可能生すら浮上してしまふ事だろう。それだけは、何としても避けなければいけない。

——レースに出られない。

レースに出られないという事は、ストロングブラッドは走る事が出来ないという訳だし、走る事が出来ないという事は、一着を取る事も出来ない。

不戦敗。

つまりは負けだ。

負け。負け。勝負に挑む事すら出来ずに負ける。負けてしまふ。負けるのだけは嫌だ。負けるのだけは、どんな手段を用いたとしてもストロングブラッドの中では許されざる結果だと言えるだろう。

だからこそ、死に物狂いで身体を動かす。疲れ、疲弊した身体に鞭を打ち、なんとか走らせる。多少速度は落ちるが、それでもレースには間に合う筈だ。

「行ける。これなら、大丈夫です。レースに、間に合……う？」

間に合う筈なのに。

このまま行けば間に合う筈だったのに、何の前触れも無く身体は動かなくなる。否、ストロングブラッド自身は気が付かないだけで、前触れは存在していた。そもそも、風邪で全身が不調に苛まれている。

ストロングブラッドが迎えた結末は寧ろ、当然と言えたのかもしれない。脇道を走っていた筈なのに、両膝が地面に突く。

まるで糸が切れた操り人形のように、自分の意思では一步も動く事が出来ない。立っている事すらやつとで、横にならないと辛い。

——気持ち悪い。

「なんで、どうして……どうして！」

——気持ち悪い、気持ち悪い。

「動いて、下さいよ！ 僕の身体！ だって、僕の身体なのに、どうして！」

——気持ち悪い、気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い。

動こうとすればする程、足搔こうとすればする程に、身体は全くいう事を聞いてくれない。なんだ、この感覚は。

頭の中は『気持ち悪い』の文字で埋め尽くされ、考える事すらまともにも出来ない。それでも尚、足搔こうとするのは、ある種の狂気だ。

「だから、ソレが……どうしたん、ですか」

狂っている。狂ってしまっている。既にストロングブラッドと言う少女は狂ってしまったているのだ。あの日から。

だからこんな所で立ち止まってなど居られない。力なんてまともに出やしない。けれど、僅かに残った力を振り絞って、立ち上がるうとして。

冷たい地面の感触を味わった。

「……あ、れ？」

訳が分からない。

とても言いたそうに、声を漏らす。何か言葉を紡ごうとするが、呂律が回らないのか、赤ん坊みたいに泣き声しか出てこない。

世界が回っているかの様な、ある種の酩酊感を味わう。

まるで、途轍もない力で全身を抱きしめる様な、そんな息苦しさを味わう。

全身を駆け巡る、必然に尽くしがたい『苦しき』を味わう。

そして、全身が段々と熱を失っていく、冷たさを味わう。

じわじわと、じわじわと、熱を帯びていた筈の身体は段々と温かさを失っていく。死体の様な冷たさに、変わっていく。

——あ、もう直ぐ死ぬんだ。

何時か味わった死。何時か、味わいそびれた死。死、死、死、死。一

体、どうして今になってこんなモノを味わうのだろうか。

混濁する意識の刹那、そんな事を考える。

死、死、死。

常人にとつては何よりも抗いたい現実であり、幾人者人たちが逃げて来た、絶対的な終わり。けれど、ストロングブラッドにとつては違う。

既に一度死んでいる。

そして、既に一度死に損ねた。

だからこそ、怖くない。だからこそ、辛くなんて全く無い。それなのに、その筈なのに、そうなる筈だったのに、

——どうして、僕は涙が止まらないのだろうか。

泣いていた。

目から涙を流して泣いていた。

死にたくないのだろうか。今更になって、今になって、死にたくないと思つて泣いている。全く馬鹿げた話で、笑い話にしかならない。

もう直ぐ死ぬ癖に。

もう助からない癖に。

一体何をのたまうのか。一瞬思つてしまったあり得ないを否定する為に、何度も何度も何度も自分自身を責め立てる。

それでも涙は止まらないのだから、どうにもなりはしない。

ああ、死にたくない。そうだ。今まさに、自分は死にたくないと思つて居る。一度死んだくせに、一度死に損ねた癖に、死にたくないと思つて居る。

ごめんなさい。

本当にごめんなさい。

潔く死ねなくてごめんなさい。死にたくないなんて思つてしまつて、本当にごめんなさい。涙を流して謝罪する。

謝罪したのに、それでも死にたくないと思つているのだから、目も当てられない。段々と意識も薄れていく。

もう直ぐで死んでしまう、と言うのが何となく分かった。もう少しで、今まさに違っているであろう最後に、ふと疑問に思った。

どうして死にたくないと思ったのだろうか。

——分からない。

——分かる訳が無い。

——そして、分かりたくも無い。

「!!」

一瞬自身の目に映った黒いグチャグチャ。何とも吐き気を催してしまいそうな、気持ちの悪い何かだ。

それが視界一杯に映って、ストロングブラッドの意識は消えた。

——ああ、死にたくない理由って、これだったのかな？

「……遅いな」

立て掛けられた時計を見て、沖野はふと呟く。

レースが始まるのは10時。普段のストロングブラッドであれば、一時間も前からレース会場へと赴き、コンディションを整える。

少なくとも前まではそうだった。沖野が控室に入れば、リングを齧ったストロングブラッドが椅子に座っている。

レースの前は決まってそんな風だった。にも関わらず、控室にストロングブラッドの姿は何処にもない。

一瞬トイレ休憩や、何かしらの用事でもあったのか？ とも考えたが、鞆が置かれていないのだからそもそもやって来ていない。

一体どうしたのだろうか？

本来であれば、レース直前になって来るウマ娘なんて珍しくも無い。むしろ、一時間前に来るストロングブラッドの方が珍しい位だ。

しかし、ストロングブラッドはスピカに加入して、中央のレースに出た時から、依然として一時間前にはレース会場に着く事を心掛けている。

だからこそ、沖野は心配してしまう。

大事が無ければ良いのだが。只の寝坊であれば、特にいう事は無

い。けれど、もしも何か事故に巻き込まれていたら、何か遭ったのだとしたら……。嫌な考えは、消しても消しても消える事は無い。

そうこうしている間にも、時間は刻一刻と刻まれていく。後もう少しでレースが始まってしまいそうだ。

「一体どうしたんだ？ ストロングブラッド」

全くらしくない。

落ち着く事なんて出来ずに、室内を行ったり来たりとそわそわしっぱなしだ。不意に扉がコンコンとノックされて、驚いてしまう。

「トレーナーさん!! これを、これを見て下さい!」

どうぞと促す暇も無く、開かれた扉。やって来たのはスペシャルウィークやトウカイテイオー、メジロマックイーンと言ったスピカの面々。

仮にやって来たらストロングブラッドは心底嫌がるだろうから、と観客席にて待たせていたメンバーだ。

「おいお前ら、控室には来るな……って、何だ……これ」

諫めようとするが、直ぐに意識は別に向けられた。スペシャルウィークが手に持っている、端末型携帯に。

一見すると何の変哲も無い、電子機器だ。事実、この端末型携帯は市販のもので、特別な性能などは全く無い。

沖野が目にしたのは、液晶画面に映っている記事。

——さつき、とあるウマ娘見つけたんだけど、この状態ヤバくねwww
www

ウマッターなるSNSに掲載されていたのは、ストロングブラッドの画像と、何ともふざけた文章。

肖像権やら、著作権やら何やらが絡んでくる、何とも悪質な文章ではあるが、そこに意識を割いている時間は無い。

画像に移っているストロングブラッドの容態は、一言で言えば最悪に近い。色白い肌は真っ青に染まり、全身からはとめどない汗が流れている。

本人は必死になって走っているのかもしれないが、傍から見ればとても痛々しく、見てて気持ちの良いモノでは無い。

文字通りの、死に物狂いと言う奴だ。

不味い。画像を見た瞬間、沖野はそう察した。否、察してしまった。一体どうしてこんな状況に陥っているのかは予想もつかない。

が、命の危険がある事に変わりは無いだろう。

急いでストロングブラッドの元へと向かわなければ、最悪死んでしまいかもしれない。はやる気持ちを抑えきれず、そのまま探しに行こうとするが、不意に沖野の手を誰かが掴む。一体誰なんだ、俺はこれからしなくちやいけない事があるのに。

そう言いたげな形相で振り向くと、スペシャルウィークを始めとするスピカのメンバー達が沖野の手を握っている。

「トレーナーさん。私達にも、手伝わせて下さい」

「お前ら……大丈夫、なのか？」

「それは失礼な事は言われたけど、流石に見捨てる程非情じゃ無いわよ」

「まだブラッドちゃんとは一緒に走っていないし、あの姿は心配だからね」

「困った時はお互い様、ってな！」

「取り敢えず、爺やに連絡して捜索隊を派遣しておきますわ。ですけど、見つかるという保証はありません」

「っていう事は、アタシ達も探すって事だな！ よっしやあ、うんじやまあ皆でストロングブラッドの野郎を探すとするか！」

互いに頷き合い、探し始める。

もう一人の仲間を助ける為に。

スペシャルウィーク達はウマ娘の為、車やバスを使うよりも走った方が速い。しかし、沖野はウマ娘では無く、只の人だ。

状況は極めて不味い。

軽トラへと乗り込み、送られてきたリンクから先程の画像へと飛ぶ。やみくもに探した所で、ストロングブラッドの見つかる確率は限りなくゼロに近い。

ウマッターに載っていたあの画像。

その場所には確か見覚えがあった。

「……待つてろよ、ストロングブラッド」

アクセルを踏み、法定速度ギリギリまでスピードを出す。そのまま目的の場所まで一直線で向かおうとするが、上手くは行かない。

「クソッ、こんな時に……」

出だしこそ順調だったモノの、今現在沖野は渋滞に巻き込まれている。一体何が起こったのか？

遠目で確認すると、幾つものパトカーが並んでおり、それと同数の救急車がやって来ては去り、やって来ては去りを繰り返している。

こんな時に限って交通事故。

しかも、規模は結構な大きさだ。このままではストロングブラッドを見つげ出す事は疎か、目的の場所へ行く事すら不可能だ。

少し考えて決断。

「ッ……畜生！」

車を脇道へと止めて、沖野は走ってストロングブラッドを探す事を選ぶ。何とも無謀な事だという事は、他でも無い沖野自身が分かっている。

それでも、自分だけ何もしないのは嫌だった。自分だけ何もせず、誰かの結果を待つだけなのは嫌だった。

幸いにも職業はウマ娘のトレーナー。

体力だけは人一倍自信はある。後先すらも考えず、沖野は全力で走り出す。

ここには居ない。ここには居ない。ここには居ない。ここには居ない。ここにも居ない。ここにも居ない。ここにも居ない。

目的地へと向かう途中でも、目を通せる場所には通した。それでも、ストロングブラッドの姿は見当たらないし、手掛かりすら掴めない。

「やっぱりここは通って無いって事か」

それとも、通っていないのか。

不意に脳裏によぎる思考も、頭を振って取り払う。今は考えている時間の一分一秒すらも惜しい。急いで見つかなければ、本気でマズイ。

なりふりも構っていられなくなり、大声で名前を呼ぶ。周囲からの反応が、向けられる視線が羞恥心を刺激するが、これでストロングブラッドが見つかるのなら安いモノだ。恥も外聞も捨て去って、沖野は名前を呼びながら叫ぶ。

叫びながら走る。

叫びながら走る。

叫びながら走る。

一体どれ程の時間、そうしていたのだろうか。見つけたいと思って居るのに、見つかつて欲しいと願っているのに、ストロングブラッドが見つかる事は無い。

既に足は痛みを発しており、喉はガラガラに枯れてしまっている。ソレでも尚、声を張り上げて、走っているのは只の意地なのか。

それとも、ストロングブラッドと言うウマ娘を心から心配している証拠なのか。沖野の携帯電話が鳴る。

電話の主は、メジロマックイーンの使用人である爺や。電話の内容は、ストロングブラッドを見つける事が出来なかった事と、申し訳ないという謝罪。

ソレを皮切りに、次々と電話が鳴り、ストロングブラッドが見つからなかったと言う報告が届く。

最悪の状況をどうにかする為に足掻いたというのに、状況は依然として最悪以上の変化が加わる事は無い。

時間も相当過ぎている。

ストロングブラッドの容態はどんどん悪化しているのは、言われなくても分かる、冷たく残酷な現実だ。

——どうすれば良い。

——どうすれば良い。

頭を捻って、獣の様に唸つても良い考えは思いつかない。切迫した状況に、焦りを覚えずにはいられない。

余計に何も考え付かず、焦りは増加する。

完全な悪循環だ。一体、どうすれば良い。一体、どうすれば良い。と悩んでいると、自身の手にかけていた携帯電話が目に入る。

そう言えば、迷子になった時はよく相手の携帯電話に電話でもしたっけ、と過去の記憶を思い出し、電話をした。

幸か不幸か、ストロングブラッドは携帯を持っている。まあ、どうせ無理なのだろう。失敗と言う分かり易い結果は、思わぬ形で裏切られた。

ピリリリと言う、甲高い音が響き渡る。沖野の持つ電話から発せられるモノでは無い。きつとストロングブラッドの携帯電話から発せられた音だ。

ようやく手に入れた手掛かり。

逃がしてなるものかと、沖野は必死になって探し、ようやく見つけた。

「……ストロングブラッド!! おい、ストロングブラッド!! しつかりしろ!!」

名前を呼ぶが反応は無い。

兎にも角にも救急車を呼ばなければマズイ。確か、こんな状況では身体を揺らすのは逆効果だった筈、なんて事を考えながらも119番を押す。

「あ、すみません。大至急、救急車を一台お願いします! 場所は、えーつと……」

腕を掴まれた。

振り向くと、息も絶え絶えな状態のストロングブラッドが、地面を這って沖野の足を掴んでいる。焦点は宙を彷徨い、死人なのではと錯覚してしまう。

「……あ、貴方は……一体、誰なん……ですか? 早く、レースに……いかな、いと」

蚊の鳴く様な声。

悲哀に満ち満ちており、覆われた目元からは幾粒もの涙が流れ出す。ポタポタと地面に染みを作る、大粒の水滴。

一瞬沖野は通話している事も忘れ、考えてしまう。死に物狂いでレースに出ようとして、こんな状態になってもまだ、自身の事を顧みずレースの心配をしてしまう。一体少女に——ストロングブラッド

に何があったのか。

歪み切った存在意義

目を開けると、知らない天井が見えた。

一面真っ白で継ぎ目や隙間は無い。何とも無骨で味気の無い天井だ。意識は取り戻したモノの先程までの記憶が無い。

思い出そうとしても霧を掴む様に、手掛かりを掴む事すらもままならない。不意にズキンと頭が痛んだので、一度考える事を止める。

「……………」

——ここは一体何処なのだろうか？

ふと思った疑問を解消する為に、首を動かして周囲を見る。天井と同じく、室内は白一色に染まっており、どうやら自分はベッドに寝ているらしい。

腕には管の様なモノが刺されており、行き着く先は吊るされた透明上のパック。中には、何かしらの液体が張っている。

何処か見覚えのある光景。

どうして見覚えがあるのか考えれば、直ぐに答えは見つかった。自身——ストロングブラッドが居る場所は病院なのだ。

——病院。

その二文字を思い出すだけでも、火傷跡に痛みを感じる。既に治っている筈なのに、焼き付ける痛みが傷跡を舐めまわす。

「…………ストロングブラッド、お前…………起きたのか？」

誰もいない筈の病室に、自分では無い誰かの声が聞こえて来た。扉を開けて、その人物はやって来るが覚えは無い。

覚えは無いというよりは、覚える事が出来ないと言うべきなのか。声や見た目には幾分の覚えがあるし、誰だったのだろうか。

「大丈夫か？ 意識はハッキリしているか？」

やけにぼんやりとした頭の中で、少しだけ考える。元々ストロングブラッドは記憶力は人よりも良い方だ。

だからこそ、少し考えて思い出す。

「その声…………貴方、ですか」

沖野。

自身も所属しているスピカのトレーナー。ウマ娘の脚を触る趣味があり、自身の要求を何とかして了承させようとする、新人の変態。どうして沖野がここにいるのか。どうして自分がこんな場所で眠っているのか。自分が眠っている前は、一体何が起こっていたのか。

聞きたい事は山の様にあるし、沖野としても質問したい事は沢山あるのだろう。しかし、最初に言っておかないといけない事がある。

別に沖野に信頼だのなんだのを抱いている訳では無い。強いて言うのであれば、これはある種の日課なのだ。

寝た後は、決まっています。もうこう言わなければならぬ。今の今まで、居眠りや昼寝などはしていない為、これはある種の醜態と変わらない。

それでも尚、ストロングブラッドは口にして、言葉にする。

「おはよう、ごいいます」

「? ……ああ、おはよう」

別に貴方に言ったわけでは無い。

喉まで出かかった侮蔑の言葉を、ストロングブラッドは直前で押しとどめた。何故か、悪い気がしなかったからだ。

ガシャーン!! と、何かが崩れる音がした。その次に聞こえて来たのは、誰かと誰かが言い合っている声。片方は怒鳴り散らしており、扉越しからでも怒りの剣幕は聞こえてしまう程だ。

「何、やってるんですか! どうしてレースを、何で……どうして!」
「明らかにお前の身体は走れるコンディションじゃない! それにもうレースに間に合うのは無理だ。第一、さっきまで、お前は路地裏で倒れてたんだぞ!」

「だとしても、レースには出ます! 出ないと、出ないといけないじゃ無いですか! だったら私はどうなるんですか!」

「別にレースに出なくなったら、次はある。確かに今回のレースでは、お前は出場できなくなった。だが、まだ負けた訳じゃない!」

ストロングブラッドは沖野の胸倉を掴み、怒りを込めて喚き散らす。対して沖野は大声で話しているモノの、幾分大人の余裕が見られる。

見えている光景としては、さながら駄々をこねている子供と、それを諷める大人の様な構図だ。沖野は落ち着いているのに対して、ストロングブラッドの怒りのボルテージは留まる事を知らない。どンドン上がっていく。

「負けじゃ無いんですよ！ そういう事を言っているんじゃないんですよ！ レースに出ななきゃ意味が無いんですよ！ 出なかったから負けじゃ無い？ なんなんですか、その気持ちの悪い理屈は！」

「おい、ストロングブラッド……」

落ち着かせようと肩に触れる。

少し肩に触れた瞬間、前髪の隙間から、鋭い眼光で沖野を睨みつけるストロングブラッド。と同時に、手の甲で沖野の手を払う。

「ッ……触らないで下さい！」

バチンツと大きな音が周囲に響き渡る。

そして、互いは見つめ合う。1人は睨みつける様に。殺せるのであれば、殺してやりたいと思う程に、憎々し気に。

もう一方は驚きや困惑。そして、微かな疑問。しかし、もう一方に対する怒りや憎しみと言った感情は無い。

「……どうして……なんですか」

泣きつく様に。

まるで縋る様に、言葉を口にする。

——どうして？ と。

その言葉が一体何を意味しているのか。レースに出られなかった事？ 自身が失格になってしまった事？ はたまた、レースに出る事を止められてしまったから？ 様々な考えが沖野の脳裏を掠めるが、ストロングブラッドの口から出た答えは、予想とは全く真逆。思わず凍り付いてしまいそうになる程、狂った答えだった。

「どうして、あの時……僕を見捨てなかったんですか？」

予想外過ぎる回答に、沖野の思考は一瞬止まってしまふ。誰が、誰を見捨てるのだろうか？ あの時、沖野がストロングブラッドを見捨ててしまえば良かった。あの時、見捨てて死なせてしまえば良かったのだと、コイツは本気そう思っていたのか？

ある種の自殺願望だ。

理解した、と同時に怒りが込み上げて来た。自分はこれからどうすれば良いのか？ を考える前に身体が動く。

——バチンツ!!

病室の中で、鈍い音が響いた。

沖野がストロングブラッドの頬にビンタをしたからだ。強くはやっていない筈だ。それも、ストロングブラッドの頬は若干赤くなっている。

まさか暴力を振られると思っていなかったのか、少し身体がよろけて、そのままベッドに倒れてしまう。

ポフンとベッドの空気が抜けると音が微かに聞こえ、沖野は言う。

「死んでしまえば良かったって、お前、本気でそう思ってるのか！

レースに出られないからって死ぬって、お前いい加減にしろよ！」

「……………」

「死んだら走る事も、もうレースに勝利する事だって出来ない、お前はソレを承知で言っているのか！ ストロングブラッド！」

「……………」

ストロングブラッドは返答しない。

耳を貸しているのかもしれないが、沖野の顔を見る事は無く、ずーっと天井を見つめている。まるで、生気を失った様に。

しかし、ふと呟く。

「……………だったら、どうすれば、良いんですか？」

呟く。

「一体、僕はどうすれば良いんですか？」

呟く、呟く。

「走る事しか出来ない僕が、走ることにすら出来なかったら、じゃあどう

今の今まで、見て見ぬふりをしていた。

本人の言う通りに、極力関わらない様にしていた。ソレが本人の為になると信じてしまったばかりに。

「畜生……俺は完全に間違えた」

啞えていた棒付きのキャンディーは、自身への不甲斐なさに当たるようにして、バギンと噛み砕かれる。

掛ける言葉が見当たらない。

沖野はそのまま病室を出て、近くの椅子に座る。そして、そのまま両手で頭を抱えて項垂れてしまう。

見通しが甘かったというよりは、予想が外れてしまっていた。ストロングブラッドと言う少女は勝利に固執している。

他者との関わりを極力避け、効率と言う文字を体現した風に、様々なトレーニングを行って来た。一度として、音も上げずに。

何かに憑りつかれたみたいに。

だからこそ勘違いしてしまった。そのストイックさが。その冷酷さが。そのサイボーグ染みた在り方のせいで、ミホノブルボンと同じなのだ。勝手に予測し、勝手に解決した気になってしまっていた。

違う。そう言うモノでは無い。

そんな言葉で完結する程に、ストロングブラッドと言う少女の全貌は見えない。依然として、彼女を理解するには程遠い。

唯一分かった事があるとするなら、どうしようもない程に歪んでしまった思想観や価値観を持ち合わせているという事だけ。

ぐにやぐにやに捻じ曲げられ、捻じ曲がり、捻じ折られた。たった、その程度しか分かっていないのだ。

覗き込んでも、未だに底を見る事は叶わない。

「沖野様。大丈夫でしょうか？」

たった一人のウマ娘すらも、どうにかしてやれない。ましてや、自身のせいで余計に苦しめてしまった、と言う愚行のせいで自己嫌悪に陥る。

そんな時、聞きなれない声が沖野を呼ぶ。

「あ、先生」

「申し訳ありません。突然声を掛けてしまつて。ですが、貴方には言つておかないと行けない事がありまして……」

やつて来たのはストロングブラッドの容態を見てくれた医者。てつきり騒いでいた事を叱られるのかと身構えていたが、どうやら違うらしい。

という事は、ストロングブラッドの容態に関してなのだろうか。ストロングブラッドが倒れてしまった原因は、大層な病氣では無く風邪。

しかし、本来の風邪とは何処か異常な点が幾つか見つかつており、只の風邪などでは無かつたらしい。発見した時には既に命の危険性が伴う状態まで到達しており、今こうやつて満足に会話をする事も、ある種の奇跡と言つても良いとの事。

一通り検査は行われており、異常は無いとの結論が出ていた筈だが、まさか不審な点でも見つかつてしまったのだろうか。

流星に走れなくなつてしまうのは困る、と内心焦つてしまう。

「それは一体どういう事なんですか？」

「実は、私が彼女——ストロングブラッドさんを見るのは、今回が初めてなどでは無いのですよ」

言葉通りに受け止めるのであれば、目の前の医者は少なからず、一度以上はストロングブラッドと出会つた事があると言う事。

しかし、ソレが一体なんの話に繋がるのか。

「プライバシーの関係上、余り詳しく話す事は出来ません。ですが、とある事件を境に、あの子は変わつてしまいました。いえ、正しく言うのであれば、壊れてしまつた」

「どうして、俺にそんな事を言うんですか？ もつと適任が……」

本来であれば、伝えるべき相手はストロングブラッドと両親や親戚。生憎今回は連絡が付かなかつたのだが。

医者はゆつくりと首を横に振る。

「いいえ。いません。少なくとも、あの子にはお見舞いに来てくれる家族も、親戚も、友達すらも、誰一人としていません。だからこそ、唯一お見舞いに来てくれた貴方にこうやつてお願いをしに来たのです」

「誰一人来ていないって……それは一体……」

理解が追いつかない。

整理が追いつかない。

事件と言うのは一体何なのか。家族や親戚や友達。たった一人すらも見舞いに来ず、ずっと一人だったのはどういう事なのか。

聞きたい事は沢山あった。貴方はストロングブラッドと言う少女が、歪んでしまった原因を知っているのか、どうしてこうなってしまったのか、と。

胸倉を掴み掛からん勢いで問いかける。
が、

「申し訳ありません。私も多くの事は知りません。患者の情報を調べ上げるのは、法律上問題がありますので。ですが、只1つ言える事があるとするなら、あの子は今まで途轍もない苦しみを味わってきた。だからこそ、どうかあの子の力になって下さい。私達ではどうする事すらも出来ませんでした」

医者は頭を下げて、沖野に頼む。本来であれば頭を下げる立場が異なってしまう、この現状。しかし、沖野はハッキリと断言した。

「分かりました。俺に、任せて下さい」

事態は何も好転などしていない。

ストロングブラッドの体調はマシになったものの、今度は精神状態に不調をきたしてしまった。彼女の身に何が起こったのか把握できていないし、寧ろ謎はさらに深まってしまったとも言えるだろう。

関係は良好にさせるどころか、寧ろ悪化させてしまったし、難易度の高いお願い事を無責任に聞いてしまった。

けれど、沖野は諦める事は無い。

へこたれる事が無ければ、挫ける事すら無いだろう。何故なら、あの時に比べれば、遥かにマシで遥かに簡単に思えるからだ。

「まあ、もう少し頑張ってみるか」

気持ちを入れ替える。

ポケットから出した新しい棒付きキャンディーを啜えて、少し弱めに噛みしめた。まあ、多分どうにかなるだろう。

「なんか、凄い話を聞いちゃったんだけど……」

「結構シリラスと言うか、何と言うか……アタシの専門外だな、こりゃあ」

廊下の角にて偶然話を耳にしまった、ダイワスカーレット、ゴールドシップ、メジロマックイーンの3人。

少し暗い雰囲気が漂う。

ここにやって来た理由としては至極単純で、ストロングブラッドの安否が気になったからだ。流石に大人数来る事は難しいので、選出方法はくじ引き。

結果この3人と言う、何とも微妙と言うべきなのか、異色と言うべきなのか、混ぜるな危険とでも言うべきパーティーに仕上がった。

話を一字一句、全てを聞き入れる事は難しかったが、耳に届いたキーワードである『あの事件』『壊れてしまった』『誰一人来ない』。

1つだけだと、ストロングブラッドの背景を予想するには難しいのだが、数が揃えば大体想像できてしまう。

そして、彼女はこれまで凄惨な人生を歩んできたのだと言う事も。

先程までは、どうして私があの人のお見舞いに行かなくちゃいけないんですか！ と文句を言っていたスカーレットも深刻な表情を浮かべている。

仮に本人の口から出れば、ゴルシと似た様に、ある種の作り話なのだ取る事も出来るのだが、話の出所はこの病院に勤務しているお医者様。

嘘を言う理由も、必要性も無い。

だからこそ作り話でもなければ、出まかせでも無い。ストロングブラッドの話は全て真実なのだと裏付けられる。

「まあ大丈夫でしょう。ほら、ゴールドシップさん。行ってきてくださいまし。1つ2つ変な事をすれば、きっと空気もマシになるでしょう?」

「おいおい、酷い言い草だな? マックイーン。大体、ああいう事をす

る時は、一応空気を読んで行っているんだ。アタシがまるで空気が読めていない、奇人とでも言う様な発言は控えてもらおうか！」

シンプルに毒を吐いたマックイーンに対して、反旗を翻すゴールドシップ。

「え？ 空気を読んでいる？ え？ 奇人とでも言う？」

対するダイワスカーレットは、先程のゴルシの発言に啞然としていた。向ける視線は、お前マジで言っているのかよ、とでも言いたげ。

両者の視線は交差し、ある種の三つ巴とも思えなくはない。が、暫しの間見つめ合って、やがて止める。

「ま、こんな所で喧嘩しても意味無いか」

「流石にワタクシも戯言が過ぎましたわね。申し訳ございません」

「それよりも、さっさと見舞いの品を渡して帰りましょうよ」

ダイワスカーレットの手に握られているのは、籠。中にはフルーツの盛り合わせ——などでは無く、橙色の人参が一杯積み上げられている。

全てスペシャルウィークの実家から送られてきた人参だ。本人は人参との別れを惜んでいたが、部屋にはまだ10箱程の備えはある。

「そう言えば見舞いの品は何だ……って、人参？」

「人参が何か問題ありました？ ウマ娘である誰もかれもが、人参は好きなモノでしょう？ 逆に嫌いな方がいました？」

「少なくとも、アイツ——ストロングブラッドは嫌い、って言っていたぞ」

「……え？」

ゴールドシップの口から飛び出た、衝撃の新事実。2人は一瞬固まってしまった。ストロングブラッドは人参が嫌い。

その一文が、幾度となく頭の中で繰り返される。しかし、到底信じられる事では無い。何故ならば、ウマ娘なのだから。

ウマ娘は人参が好きでなんぼなのだから。

「そ、そんな訳が無いでしょう!! 人参が嫌いな訳……只の食わず嫌いに違いがありません！ 恐らくは、きっとそうなのでしょう！」

「いや、食べたなら吐き出しちゃうらしいって、前に本人から聞いたんだけど」

「どうして今になってソレを言うんですか！　もう見舞いの品、スペ先輩から強奪……じゃ無かった、貰って来た人参なんですけどー！」

「んな事言われても、そもそも見舞いの品は何時の間にか決まっていたし、と言うか人参の詰め合わせってなんか地味じゃねえのか？」

「五月蠅いですよ、ゴールドシップ。とはいえ、流石に嫌いな物を渡すのは得策では無いでしょうし、何か代えはありまして？」

「そもそも、別に見舞いの品なんて渡さなくても良いんじゃないのか？　アイツは多分そんな事は気にしないだろうし、考えても居ないと思うぜ」

確かにゴルシの言い分はもつともだろう。

ストロングブラッドと言うウマ娘の性格上、見舞いの品は疎か、見舞いと言う言葉すら知らない可能性もゼロでは無い。

だからこそ、出さなかったとしても本人は気にしないと思うし、どうでも良いと言つて興味を向ける事さえ無いだろう。

それでもだ。

たとえば、そうだったとしても、だ。

「ま、アイツも一応はスピカの一員だ。差別するのは、流石にアタシ達にして良い事なんかじゃ無いし、一応送っておくか」

「……そうですね」

ゴールドシップの言葉に、一応ダイワスカーレットは了承しているモノの、やはり納得が出来ていない。

ストロングブラッドで思い出すのは、あの日の事。スペシャルウィークが手を差し伸べたにも関わらず振り払い、あまつさえ転ばせた。

それ以上に、他者からの好意を踏みにじり、あまつさえ此方を愚弄する様な発言すらも口にしていた。

その事が、どうしてもダイワスカーレットには許せないでいた。忘れる事は出来ない。けれど、余り思い出す事もしたくない。

仮に今病室に入り、見舞いの品を渡した所で、ストロングブラッド

はいりませんなどと言って突き返すだろう。

もしくは、此方を見向きもせず、腹立たしい言葉を口にするかもしれない。もしもそうなれば、今度は怒るだけでは済まされない……
筈だ。

けれど、見舞いの品を渡すのだけは必ず行う。本当は嫌だし、やりたくなんて無い。けれど、私はお前とは違うと魅せ付けたかった。

礼儀を知らないお前に対して、私は礼儀をちゃんと知っているんだぞと、見舞いの品を渡す事によって言っただけでやりたい。

だからこそ、こうやって病院までやって来た。けれど、偶然盗み聞きした話の内容は、ダイワスカーレットに衝撃を与えるには十分と言えただろう。聞いただけでも凄惨な過去を連想させてしまう、不穏な単語の数々。

おおよそ良い想像など出来る筈も無い。しかし、たえそうだったとしても、未だに許すことな出来ないのが本音だ。

仮にそうだったとして、仮にそうであったとしても、過去に行われた行為は到底ゆるされるモノでは無いのだから。

納得は出来ていない。

迷いもある。

どうすれば良いのか、依然として道は不明。

けれど、大きく息をすって、吐くを繰り返して深呼吸。一息つく。

そのまま、メジロマツクイーン、ゴールドシップと共に扉をノックした。

返って来ない。

もう一度ノックした。

返って来ない。

もう一度ノックした。

返って来ない。

いる筈なのに、少なくとも先程何処かに行った、だなんて見かけていないにも関わらず、居留守を使われた。

どうするべきなのか、と考えている2人よりも先に、スカーレットは怒り交じりに思い切り扉を開く。

「失礼します！ 先程から在室しているにも関わらず、居留守を使うのは如何な……つて、一体何なんですか！ これは！」

スカーレットの視界を埋め尽くす病室は、予想外過ぎる光景と言えただろう。本来であれば清潔感のある病室は、今はあられもない惨状と化している。

ベッドに敷き詰められたシーツはよれよれとなっており、点滴を入れる為のスタンドは倒れてしまっている。

椅子も倒されているし、棚に置かれたプラスチック製の置物なども床に散らばり、その他にも様々なゴミが散りばめられている。

まるで泥棒に荒らされてしまったかのようだ。

正直病室を間違えてしまったのか、はたまた幻覚でも見ているのでは無いのだろうか、と一瞬考えてしまった。

「え!! いや、これは一体どう言う状況なんですか!!」

「おいおい、確かにこれはひどいな。なんだなんだ？ さっきまで怪獣大対戦でもやっていたって言うのか？ アタシも交ぜろ！」

「これは何と言うか……何と言いますか……何と言うべきと言いますか！」

各々個性的な反応ではあったものの、全員が全員部屋の惨状に驚愕していた。が、ここで一番大切な事に気が付く。

最初に気が付いたのはスカーレット。

「あれ？ と言うか、あの人は一体何処に？」

「もしかして居留守じゃ無くて、本当に何処かに出かけてたのか？」

「だとしたら、少し悪い気がしなくも無いな」

椅子の代わりにベッドに腰掛けるのは、流石ゴールドシップと言わべきだろう。見慣れない部屋でも、ものの数秒で自室と相違ない程のくつろぎ具合を見せつける。少しは遠慮をしろ、だなんて突っ込まれる事は間違いない。

「まあ、別に大丈夫じゃ無いのです？ ゆっくり、ストロングブラッドさんが帰って来るのを待ちましょう」

「まあそうするか」

そのままベッドに寝転ぼうとするが、グニヤツという感触を感じ

た。本来であれば、ベッドで味わう事など出来はしない。

まさかの展開に、流石のゴールドシップも思わず驚き、身体を仰け反らせてしまう。

「うわっ?! えっ? 今の一体……」

「ゴールドシップさん。貴方のすぐ傍に……」

驚いているゴールドシップと同じく、若干戦慄しているメジロマックイーン。微かに震えている指が指し示すのは、棒状の白い何か。

てつきりストロングブラッドが持ってきた、私物の抱き枕だと思っていたが、その予想は全くもって異なっていた。

微々たるモノなのだが、微かに動いているのだ。

恐る恐る正体を確かめると、中からストロングブラッドが現れる。

「……………!!」

誰も居ないと思っていた病室に、とうの本人は白いシーツに包まれて、ジーツと身を潜めていた。新手的ホラーだ。

事実三人は若干距離を置きそうになる。

それ程までに怖かったのだ。

「一体、何なんですか? 今、此方は忙しいんです。後にして下さい」

三人の反応などには興味も無く、鬱陶しそうにそう言う。その後、すぐさまシーツに包まり、抱き枕の様な形状に戻ろうとする。

「いやいや、ちよつと待って下さい! どうしてそんな風になってるんですか!」

荒れるに荒れた病室。

この部屋の主はシーツに包まっており、ベッドの中から一步も動かないとしている。意味不明過ぎる光景だ。

「別にどうだって良いでしょう? 貴方方には関係ありません」

若干衰弱し、弱っている印象にも関わらず、態度は相も変わらず傲岸不遜。此方の気遣いを邪険にする。

ある種の才能と言っても良いだろう。

「ですけど、流石にこの状況を放置しておくのは難しいですわよ」

「大体、お前はチームスピカの一員だ。関係ならある」

「……………退部届、出した筈なんですけど」

ストロングブラッドの発言の通り、数日前にストロングブラッドは沖野に退部届を渡した。規定通りに行けば、ストロングブラッドはチームスピカを抜ける事になるのだが、まだ沖野は退部届を了承していない。

勿論、自身の意思によって退部届を受け取らなかったり、認めなかったりする、と言うのは職権乱用に繋がる。

最悪、処罰の対象にもなってしまうだろう。

しかし、沖野はそんな事は百も承知で、未だにストロングブラッドの退部届を受け取ったまま、了承していない。

つまりまだストロングブラッドはチームスピカの一員なのだ。

当然目の前の少女は何も知りはない。既に退部届を出し終わった時点で、自身とスピカとの関係は絶たれたと思っている。

だが残念な事に、スピカとの縁は未だに切れる事は無い。

「まあまあ。そう言うなって、一応お見舞いの品も持ってきたんだから」

見舞いの品でもある、人参が詰め込まれた籠を見せながら、ゴールドシップは快活とした笑みをストロングブラッドに向けた。

もう、楽になりたくて

「おいおい、トレーナー。いい加減、しっかりしろよ」

ゴールドシップの視線の先には、沖野が机に突っ伏して項垂れていた。只事では無い、と言うのは一目見て分かるが、何が起こったのかまでは察しが見つからない。

「しっかりできる訳が無いだろ？ 第一、初めてだぞ。トレーナーに向けて脅迫なんてしてくるウマ娘」

最近、1人しかメンバーがいないスピカに、新しく加入者が現れた。とても喜ばしい事ではあるだが、1つや2つ程問題点が。

そして、それこそが沖野を今現在苦しめる要因となっていた。1つ目は、とある写真を使って沖野を脅している事。

撮影された写真は、沖野が件のウマ娘の脚を触っている所だ。そう、幼気な少女の脚を、成人した男性が触っているのだ。

仮にこれをインターネット上にアップすれば、ネット界隈は大いに盛り上がるだろうし、トレセン学園のトレーナーとしての不祥事が公になる。小さな火種は、やがて炎上へと繋がり、沖野の吊し上げが始まる。

抗議の電話が殺到するだろうし、最悪住所を特定される可能性すら存在している。言ってしまうえば、沖野のトレーナー資格を剥奪される危険性だつて秘めているのだ。

だからこそ、この脅迫と言うのは沖野には良く作用する。実際、ウマ娘の脚を触り過ぎていてのせいで、減給や始末書と言ったペナルティは下されている。それでも尚、謹慎などを言い渡されていないのは、沖野が優秀な証拠。

けれど、ネットが相手ともなれば、庇い切れる保証は無い。

2つ目の問題点が、チームに加入してきたにも関わらず、トレーナーのいう事を聞かない、などと宣言して来たのだ。

ウマ娘にとつては、トレーナーとの関係性は重要となる。ウマ娘を自転車とするなら、トレーナーは整備士。

整備士が整備する事が出来なければ、自転車は直ぐに錆びてしまう

だろうし、不調だらけになってしまう。

つまり、トレーナーと言う存在は、無くてはならない存在にも関わらず、件のウマ娘はその様に要求して来たのだ。

当然、最初は抗議した。

そんな事が出来る訳が無いと。実際、沖野は大半のウマ娘に逃げられてしまったモノの、ベテラントレーナー。

ウマ娘の為ならどんな事でもする情熱を持ち——ついつい脚を触ってしまうと言う悪癖にさえ目を瞑れば——腕も良い。

トレーナーを、沖野を必要としてくれないと宣言したのは、何気に沖野のメンタルにクリティカルヒットしていた。

「ああ、クソッ。折角良い逸材に出会えたのに！」

加入して来たウマ娘の名前は、ストロングブラッド。彼女はたった一人で、最強のチームと名高いリギルを下した。

最強のチーム。ソレは誇張でも何でも無く、事実。このトレセン学園に於いて、チームリギルは最強なのだ。

勿論、リギルの看板であるシンボルドルフやエアグルーヴ、ナリタブライアンと勝負をした訳では無い。

それでも相手は精鋭中の精鋭。リギルを最強まで導いた、あの東条ハナが手ずから鍛え上げたウマ娘達だ。

にも関わらず、勝利した。圧勝してしまった。

地方移籍にも関わらず、いとも容易く。

だからこそその逸材でもあり、沖野としては興味を持っていたウマ娘だった。のだが、こんなにも濃い性格なのは予想しきれていなかった。

ゴールドシップ以上に癖のある奴は居ないと思っていたが、割かし結構癖が強すぎて仕方が無い。

「おーい、トレーナー？ 生きてるか？ 死んでるか？」

ゴールドシップによって、沖野の頭にだるま落としが積み上げられていくが、本人は気にした様子はない。

と言うよりも、気が付いていないのだろう。

目の前に立ちはだかる問題が多すぎて。メンバーが少なすぎる然

り、新入部員の灰汁が強すぎる然り、スピカはこれからどうすれば良いのか然り。

問題は山積みとなっている。

山積みになり過ぎているのだ。

「ああ、本当に、一体どうすれば良いんだ！」

積み上げられた問題、全てを一気に片付ける事が出来る、素晴らしい解決方法は浮かばない。持てる全てを総動員させるが、浮かばない。

取りあえずトレーニングを始めた方が良いでしょう。

一度は諦めようとした夢。理由はどうあれ、もう一度やり直そうと思っただのだ。だったら、全力で頑張るしかない。

勢いよく立ち上がると、頭から何かが一斉に落ちる。何なのだろう、と床に落ちた一部を拾うと、厳つい顔をしたダルマ。

その他にもパーツの一部が散らばっている。

「……ダルマ……落とす？」

どうして自身の頭にダルマが乗っていたのか？ こんな事をした元凶は、1人しかないだろう。ゴールドシップに視線を向けた。

「ああ、おいトレーナー！ 今アタシがだるま落とししてるんだから、動くときはちゃんとやってくれよ！」

「え？ これ、俺が悪いのか？」

責める様な口調に対して、嘆息しつつも沖野とゴールドシップはトレーニングを始める。夢を叶える為にも。

トレーニングはつつがなく終わり、ゴールドシップはスピカの部室へと戻る。ゴールドシップは帰るだけなのに対して、沖野はこの後も済ませなければいけない仕事は残っている。だからこそ、扉を開けるのはゴールドシップただ1人のみ。

スピカの部室は、メンバーが1人だけと言う事もあってなのか、やけに広く感じてしまう事この上ない。

少々寂しいと思うってしまう位だ。

積み上げられた装飾品や、大人数で行う為のボードゲーム。スピカ

を彩る為に持ってきたモノの、如何せん異物と化している。

正直持つて来なかった方が良いだろう。

「全く、これからスピカはどうなっちまうんだ？」

マグロの一本釣りを行っている間に、何時の間にかほぼ全てのメンバーが辞めてしまっていた。気分はさながら御伽噺に出てくる浦島太郎の気分だ。

もつとも、玉手箱など開けてはいないのだが。

「こりゃあ、アタシが何とかしねえといけないよな！」

最近新しく新入部員が入って来たモノの、何故か部室に顔を出す事はないし、沖野も気まずそうにするのみで、紹介する事はない。

ある種の沖野が吐いた嘘なのでは、とゴールドシップは睨んでいる。当然、真偽の方は定かではないし、判別する方法もないのだが。「まあ、その時はその時で、トレーナーにチョークスリーパーでも決めてやるか！」

その考えに納得がいったのか、満足気に頷きながら着替えを始めようとするとゴールドシップ。普段と何ら変わらない毎日。

唯一違う点を挙げるとすれば、練習相手が誰一人としていない、位だろう。しかし、今日は何故か、異様に部室が綺麗だと、ふと——何となく感じてしまった。

「……うん？」

置かれていた物にこれと言った変化は無い。変化は無いのだが、積もっていた埃が払われていたり、ゴミが無くなったりしている。

つまり綺麗になっていたのだ。

しかも、綺麗になっているのは置かれたモノだけでは無い。廊下やロッカー、机に椅子と普段から使っているモノでさえ綺麗になっている。

1人になったせいなのか、どんよりとした雰囲気に含まれていた部屋がやけに輝いて見えてしまう。

これはある種の目の錯覚なのだろうか。

「……ヤベエ、こりゃあヤベエ、これは………座敷童の仕業だ!!」

座敷童。

つまりは妖怪の仕業。

予想の斜め上に行くゴールドシップに対して、流石はゴルシだと拍手を送らない訳にはいかないだろう。

それから部屋中を隈なく探し、座敷童を見つけようと躍起になるが、見つからない。ならば、音で探し当てようと耳を澄ます。

微かに聞こえてくる、異物。

常人では捉える事は困難でも、ゴールドシップはウマ娘。捉える事など容易く、音の場所すらも探し当てる。

「座敷童の居場所は……ここだ!!」

人目につかない、目立つ事の無いロッカー。

成程、確かにここにロッカーがある事など気が付かなかったし、身を隠すのであれば打ってつけだろう。

扉を開くと、そこに居たのは件の座敷童——などでは無く、1人のウマ娘であった。存在感はとても希薄で、何とも不思議な感じだ。

黒紫色の髪はハーフアップに結ばれており、前髪はまるで他者を隔てる様にして、覆い隠されている。

容姿を見る事は叶わない。

身体つきは酷く華奢で、健康的な食生活を送っているのか？ だなんて言ってしまうようになる程に、細い。

そして、暗闇の中であるにも関わらず、そのウマ娘は本を読んでいた。ロッカーが開いた、にも関わらず、視線を向ける事は無い。

只々指を動かし、ページをめくる。

微かに聞こえてくる紙と紙が擦れあう音。

「……………」

「……………」

ゴールドシップがずっと少女を見つめるのに対して、少女は自身の手を持つ本を見つめているばかり。

本を取って気をそらそうか？ とも考えたが、そんな事をすれば相手は確実に、間違いなく怒りを露わにするだろう。

何となくそんな気がする。

仕方なく、ゴールドシップは正攻法で謎のウマ娘とコンタクトを取

る事に。もつとも、成功率は極めて低そうなのだが。

「ようつ、アタシの名前はゴールドシップ。お前の名前は一体何なんだ？」

「……………」

ページをめくる音だけが聞こえてくる。

反応は無い。

「その本を読んでいるが、面白いのか？　どんな題名なのか、アタシに聞かせてくれよ！」

「……………」

只々、ページをめくる音だけが聞こえる。

反応は依然として無い。

「何か好きな食べ物とかあるのか？　因みに、アタシは人参だぜ！
と言つても、ウマ娘は全員人参が好きだけどな！」

「……………」

ページをめくる音のみだけが聞こえるだけ。

反応は全く無い。

「……………」

流石のゴールドシップとしても、この対応は全くの予想外と言えるだろう。少々、何かしらぶつ飛んだことをやりたい気分だが、本能が告げている。

それは止めておけと。

やってしまえばきつと、取り返しのつかない事になると。

だからこそ、ゴールドシップは少々はつちやけ具合を抑えている。

別にゴールドシップは空気が読めない訳では無い。

あえて空気を読んでいないだけであって、読もうと思えば読む事は出来る。

どうやら振り向かせるのは無理そうだ。誰とでも仲良くなれるマスターを自称している身としては、全くもって不甲斐ない事この上ないが、撤退こそが得策。さっさと着替えて帰ろうとした時、不意に言葉が漏れる。

「でも、アタシ達の為に部室を掃除してくれてありがとうな」

この発言には、特に意味らしい意味は無い。強いて言うのであれば、目の前のウマ娘に対しての感謝の様なモノだ。

しかし、この言葉の一体何が自身の琴線に触れたのか、
「取り消して下さい」

口を開かなかった筈の少女が、ゴールドシップに対して口を利いた。透き通る声——まるで水晶の様で、一瞬目の前のウマ娘から発せられたのだという事に気が付かない。が、ハツとした様子で若干慌てる。

「何だよ、お前！　ちゃんと話出来るじゃねえか？　もしかして、もしかあしいてえ、さつきまで無口キャラを装ってたのか？　つか、どうしてロツカーの中に？」

「そんな事はどうでもいいですけど、まずは貴方方の為に僕が掃除した、と言う旨の発言を撤回してもらえますか」

相手を煽る様な口調で話しているモノの、余り効果が無い。しかし、先程の発言の撤回と言うのは、一体どういう事なのか。

「……なんだ、お前。もしかして、照れてるのか？」

「別に照れていません。そう言った、気持ちの悪い解釈をされると困るので、こうやって撤回して下さい、と言っているんです！」

先程までのやりとりは一体何だったのか？　と質問したくなる程、流暢に、滑らかにゴルシとの会話を成立させていく。

まさかまさかの結果に、ゴールドシップは喜ばずにはいられない。
「え——？　もう、別に照れなくても良いんだって、別にアタシは部屋

が綺麗になった事に感謝しているんだから、気にするなよ」

「だから、そういう事じゃ……ああ、もう!!」

性格が変わったのか?!　と驚いてしまう程に、簡単に押揃えてしまう。何なのだろうか、この少女は一体。

途轍もなく面白い。

新しい玩具を見つけた眼差しで、目の前の少女を見つめるゴールドシップ。微かに、薄ら寒い笑みを浮かべている事を、ウマ娘本人が気づく事は無い。

それから数十分に渡ってやり取りは続いた。

ウマ娘は大いに疲弊して、ゴールドシップは大いに楽しんだ。

「もう、僕は帰ります」

「え？ もう帰んのかよ。まあ良いか。そんなじゃあ、またなあ!!」

「僕は二度と貴方に会いたくありません」

言い残して、そのまま部室を後にしようとする。結局、最初の質問には答えてくれなかったし、名前も分からないままだな、と気が付く。けれど、別に機会は幾らでも巡って来るだろう。

そう自分自身を納得させる。

「言っておきますけど、僕の名前はお前では無く、ストロングブラッドです。嫌いなモノは人参。吐き気を催す程度には、大嫌いです。以上です」

勢いよく扉は閉められ、残ったのはゴールドシップただ一人。

件のウマ娘——ストロングブラッドが一体何を言ったのか理解するまで、数分程の時間が掛かってしまったのだった。

「別に良いって言ってるじゃ無いですか。第一、貴方方と僕の間には何の関係もありませんし、さっさと出て行ってくれませんか？」

室内の片づけをしながらも、ストロングブラッドは容赦なく毒を吐く。見た目は弱弱しいと言うのに、それでも毒を吐く姿勢は相変わらずと言うべきなのか。

「何ですか？ その言い草？ せっかく手伝ってあげてるんだから、もう少し感謝してみたらどうですか？」

噛みつくのはダイワスカーレット。きちんと敬語を使っているのだが、敵意は尚も健在。

場所が場所であれば、取っ組み合いになっていたかもしれない。対するストロングブラッドの反応は、全くの無反応。ダイワスカーレットなど、眼中にでも無い様に振舞っている。

カチン、と来てしまうが我慢。

「まあまあ、別に良いじゃねえか。袖振り合うも他生の縁、って奴だし。第一、お前は嫌がったとしてもアタシ達は無理矢理片づけを手伝

うぜ」

「とても迷惑です」

前髪で覆われている為、表情はどんな風なのか読み取る事は出来ない。しかし、心底嫌そうな顔をしている、と言うのだけは予想が付く。それでも尚、ゴールドシップ達は片づけをしているのだから律義と
言うべきなのか。頑固と言うべきなのか。言葉選びに困ってしまう。

「ま、何時かの借りもある訳だし」

「？ 何か言いましたか。……ああ、言っておきますけど、人参は要りませんよ。僕は人参は反吐が出る程度には嫌いなので」

人参が嫌い。

先程もゴールドシップが言っていたが、まさか本当だったとは、と2人は目を丸くする。見舞いの品を突き返されたのは、聊か不服ではあるモノの、別段人参が嫌いと言う訳では無いので、素直に怒る事も出来ない。

寧ろ、嬉しいと言う思いの方が強いだろう。

「次持ってくるのであれば、林檎を持ってきて下さい」

「いや、何様のつもりなんですか!!」

「と言うよりも、さっさと出て行ってくれませんか？ 部屋の掃除も終わりましたし、見舞いの品も渡した。これ以上、何かする事は無いでしょう？ 大体、僕はスピカを辞めた身です。貴方方とは赤の他人なのですが」

確かにストロングブラッドが言っている事はもつともだ。数日前にストロングブラッドは退部届を沖野に渡している。

渡しているのだが、只渡しただけだ。

沖野は依然としてストロングブラッドの退部届を受理していないし、只々受け取っただけ。だからこそ、未だストロングブラッドはスピカを辞めた事にはなっていない。

思い出すだけでも、思わず吹き出しそうになるのだが、仮に本人にその事を知られば何が起こるのか分からないので黙っておく。

兎にも角にも、ストロングブラッドはスピカを辞めていないので、未だにゴールドシップ達との関係は赤の他人では無い。

「なにをニヤニヤとしているんですか？ さつさと出て行ってくれませんか？」

相も変わらず平常運転なストロングブラッドに従う様にして、三人はそのまま部屋を出る。ダイワスカーレットだけは、不服そうにしていたが、相手は一応は病人。とても不服そうにしていたが、大人しく病室を出る。

最後に、

「因みにだけど、何かあったのか？」

ゴールドシップがストロングブラッドに聞く。

しかし、返答は相も変わらず素っ気ない。

「貴方には関係無いです」

取り付く島さえ無く、ゴールドシップは珍しく苦笑する。だが、ストロングブラッドに対して悪い感情は抱いていないようで。

「そうか。ま、お大事に。また来るわ」

「二度と来ないで下さい」

いつかの日と、似たようなやり取りをして、そのまま病室を後にした。そうして、先程まで騒がしかった病室は静まり返る。

ストロングブラッドは声を発する事も無く、そのままベッドへと戻り、ゴロリと寝転がる。唯一の音は、立て掛けられた時計の秒針のみ。カチコチ、カチコチ、と絶え間なく続く等間隔の音色。カチコチ、カチコチ、と秒針は刻まれていき、時間は無作為に消費され続ける。

——寂しい。

不意に思ってしまった感情に、ふと思ってしまった感情に、自分自身が驚いた。自分は一体何を言っているのだろうか、と自分で先程の自分を否定する。

寂しくなんか無い。

1人の方がよっぽど心地が良い。

まるで先程の思いを嘘にする様に、必死になって否定する。否定した所で、何がどうなるという訳でも無いのに。

ふと窓を見て、気が付く。

ストロングブラッドの病室は三階の為、窓からは周囲の景色を一望できる。窓から覗くのは、今まさに沈んでいく夕日。

そろそろ夜が近い、と言う事だ。

「……もう、夜になるんですか……」

呟いて、またどうしようもない寂しさに襲われる。冷房など効いていない筈なのに、やけに身体が寒い。

凍えてしまいそうだ。

急いでベッドへと飛び込み、顔すらも備え付けられた布団で覆う。

息苦しいが、それよりも温かいのに。さっきの寒さに比べれば、まだ息苦しい方が遥かにマシだった。

温かいのに。

温かいのに。

温かいのに、それでも身体から寒さが無くなる事は無い。まるで全身を蝕む様にして、身体は急速に熱を失っていく。

微かに身体は覚えているこの感覚。死の感覚だ。どうして今になって、そんなモノを感じてしまうのか。

どうしてこんなにも身体を温かくしているのに、身体は冷たくなっていくのか。分からない。分からない。分からない。

どうすれば良いのかも分からない。

助けを呼ぼうとするが、声が出ない。息を吸い込もうとするが、肺は上手く機能せずに、酸素を吸い込む事すらままならない。

「ああ、がつ……ぐつ……ひぐつ」

何があつた。

何があつた。

頭の中はパニックだ。考える事すらままならず、様々な記憶で溢れ返ってしまう。これが、走馬灯と言う奴なのだろう。

首を抑えるが、苦しみからは逃れられない。苦しみに吞まれ続けて、意識すらも段々と混濁し、薄れていく。

絞り出した最後の一言は、

「……あ……寂、しい」

不意に飛び出した言葉に、我が耳を疑ってしまふ。寂しいと言うのか？ この期に及んで、それでも寂しさを訴えるのか？ と。

情けなくて、不甲斐なくて、どうしようもなく、自分自身を殴りたかった。けれど、殴る事すらままならなくなつて、また視界は暗闇に染められる。

苦しくて、辛くて、痛くて、悲しい。けれど、眠つてしまえば忘れられる——筈だ。だって、眠りだけが唯一の逃げ道なのだから。

最後に誰かの声が聞こえてきた。

まあ、只の気のせいだろう。

目が覚めると、そこは見知らぬ電車の中だった。

見た事も無ければ、聞いた事も無い、何とも得体の知れない電車だ。椅子は両側に連なつており、長い年月使われているせいなのか、やけに古びてしまつている。

席は何処もかしこも埋まつていたが、たった一つだけ席が空いていた。座っている人は誰もかれもが顔を読み取る事は出来ない。

顔に黒い靄の様な、黒い糸くずの様なモノで覆われているからだ。気持ちが悪く、長い間見ていると吐き気を催してしまいそうになる。

ストロングブラッドはゆっくりと目を逸らしながら、そのまま席に座る。椅子にこれと言つた感触は無く、意外にも快適。

窓の縁に腕を置きながら、窓を眺める。

「……これは、一体何処に行くのでしょうか？」

その疑問が解消される事は無い。窓ガラスに映る風景は、ストロングブラッドが見慣れた景色などでは無い。

山々に囲まれた場所を通る事もあれば、海沿いの街を通る事もある。かと言つて、高層ビルが立ち並ぶ都会を通らない訳でも無く、なにと微妙な色合いの住宅街を通る事だつてあつた。

明らかにおかしい事は見て分かる。

山だつたのに海になつて、海になつたと思つたら都会になつて、都会になつたと思つたら住宅街に変わる。

法則性なんて全く存在していない。電車が停まる度に、乗つていた

幾人の人達が降りていき、新しく人が乗る。

けれど、確実に人は減っていく。

何度も何度も何度も電車は停まり、その度に人が出ては入ってを繰り返す。最初は多かつたのに、今では片手で数える程だ。

そして、また電車は停まる。窓から覗いてみるが、自分が何処にいるのかさえ、分かる事はない。一体自分は何処にいるのか。

とうとう全員が電車から降りた。

後ろ姿は虚空へと溶け込んでいき、残ってしまったのはストロングブラッド——ただ一人となってしまう。

それでも尚、電車は動く事を止めない。果たして終点があるのか、それともこのまま永遠に動き続けるのか。

だとすれば、一体自分は何処に停まれば良いのだろうか。目的地など何処にも無い。行きたい所が無ければ、やりたい事すらない。

停まる事なんて出来ない。

一生電車に乗ったままだ。

一生、永遠に。

ゾクリと、背筋に寒気を感じた。後ろを振り向く。誰も居ない。正面を向く。誰も居ない。もう、この電車の中には誰も乗っていない。

ストロングブラッドを除いて、只誰一人乗ってなど居ないのだ。何故か心が締め付けられていく気がした。

何故か胸がどうしようもなく痛くなっていった。気持ち悪さに体が浸されていき、不意に嘔吐する。

ここが夢なのか、はたまた現実なのか。何方の意識もぐちゃぐちゃに混ざり合ってしまったていき、判別すら付ける事が出来ない。

「だ、誰か？ 誰か……いませんか……」

口の中がやけに酸っぱい。何も食べていないせいなのか、黄色い液体——胃液しか吐き出す事が無い。

ふらふらと、ひたひたと、まるで年寄りみたいに力なく歩く。窓から見える景色は、もう何も映りはしない。

澄んだ青色だった海も、深々とした緑に覆われていた山も、高層ビルが立ち並び栄えていた都会も、人の営みに満ちていた住宅街も。

何もかもが、全て黒色の塗り潰された。

黒、黒、黒。

黒色が嫌いだった。黒色は何時だって何もかもを全て塗り潰して、台無しにしてしまう。晴れる事は無い。

たとえ他の色を混ぜた所で、色が薄れる事も無い。ただ、醜く淀んで、濁って、更に光を失っていくだけ。

「あ——、あああああ——、あ——」

声が出ない。

言葉を紡げない。

赤ん坊の様に呻き、只々鳴き声を上げる事でしか、自分自身を表現する事なんて出来やしない。誰にも届かない。

誰にも分からない。

電車は依然として動いたまま。立ち並ぶ席も、天井に設置されているつり革にも依然として変わり無く、揺れ動く。

暗闇の中を進む。

そうして、ようやく気が付いた。ここが終点なんだという事を。この暗闇こそが、他でも無いこの電車の行き着く先。

だったら救いなんて存在しない。

こんなのは只の苦痛でしかない。

死んだ方がまだマシだ。

「……誰か……誰か……誰か」

引きずりながら足を動かす。誰か居ないのだろうか？ 誰か、自分

と同じような状況を味わう、仲間居ないのか？

同族は居ないのか。

一両目、居ない。

二両目、居ない。

三両目、居ない。

四両目、居ない。

五両目、居ない。

誰も居る訳が無い。こんな地獄に、破滅しか待っていない場所に、わざわざ居座る訳が無い。そんな事になるなら、適当な所で切り上げ

た方がまだマシだろう。

膝を抱えて、床に蹲る。とても滑稽だ。

これから、ここで永遠にずーっと一人ぼっち。

助けなんて来る筈が無い。

「分かりましたよね？ もう、意味なんて無いんですよ。所詮只の自己満足。僕が何をした所で、どうにもなりませんよ？」

声が聞こえた。

聞きなれた声。

大嫌いな声。

それでも、一人ぼっちとなった今ではある種の救いだ。ゆっくりと顔を上げると、何度も見えた事がある顔の少女が。

——ストロングブラッドだ。

唯一違う点を挙げるとするならば、自身は前髪で目元覆われているのに対して、向こうは前髪が開いていると言う点。

1つは夜空を閉じ込めた様な紫紺の瞳。もう一方は、火傷跡が色濃く残っている、白濁した瞳。紛れも無い、自分自身だ。

「……………」

ストロングブラッドは反論しない。

何も言わず、蹲っているだけだ。

「本当は気が付いているんじゃないですか？ 夢なんて見た所で、どうせ叶える事なんて無い。大体、自分の意思じゃ無いじゃないですか」

正論だ。

他ならない、自分自身の意見。

口から出まかせの訳が無い。何もかもが、全て自身の本心であり、否定する事すら出来ない事実。

「諦めましょうよ。何もかも、全て。どうせ頑張った所で、僕なんですから全てが裏目にでますよ。だって、そうでしょう？ 今まで頑張つて一つでも良い事がありましたか？」

「……………」

答えない。

自分自身が何かを話す度に、容赦なく言葉の刃は心に突き刺さっていく。深々と、抜く事すら出来ない程に。

次々に、突き刺さる。

「無駄ですよ。無駄。全てを諦めましょう」

「どうせ、僕の事なんて誰も心配していませんよ。だから、もう諦めちゃいましょう。楽ですよ。目を瞑れば良いんですから」

「気持ち悪い、気持ち悪い。こんなにも足掻いて、本当に気持ち悪いと思いますよ。だってそうでしょう？ 多分、周りもそう思っていますよ」

「誰も彼も僕の事を嫌っています。仮に僕が死んだとしても、誰も悲しみませんよ。だから、」

——死にましよう。

手を差し伸べられた。

色白で、太陽に一度も当たって居ない様な、何とも不健康な肌。紛れも無い、自分自身の肌だ。目の前に自分が居る。

自分が無理だと言った。

だったら、もう無理なのかもしれない。気が遠くなる程の時間、ずっと1人で生きて来た気がする。

何度泣いたのかも、分からない。

辛い、辛い、辛い。楽しいの三文字なんて何処にも無くて、生きているって何なのだろう、と何度も考えた。

手を取れば、目を瞑れば。

きつと楽になる筈だ。嫌な事から目を逸らして、どうにも出来ない現実から逃げ出して、自分の殻に閉じこもる事が出来る。

楽になれる。

もう、世界一のウマ娘になる、だなんて夢を追いかける必要も無い。バ鹿にされる事が無ければ、嫌われる事も、誰かを傷つける事も無い。楽になれる。

もう楽になれるのだ。

差し伸べられた手に、触れようとした瞬間、不意に思い出した。ああ、そう言えば居たな、と。唯一自身の夢を語って、笑わなかった人

が。
バ鹿と言う文字を体現した人が。

第19話

「早く急いでー!」

心電図が止まった。

その事実が気が付くのに、余り時間が消費される事は無い。

急いで病院内の職員たちがやって来て、慣れた手つきでストロングブラッドを担架へと運ぶ。羽の様な軽さに、一瞬驚くモノの。

こういつた状況に関して、一番必要となつて来るのは出来るだけ落ち着く事と、冷静な判断能力。

そして、細心の注意を払う。

だからこそ、過度に慌てたりしない。如何にかして、目の前の患者を生かす事だけに尽力する。運ばれるストロングブラッド。

彼女の身体に接続されていた、心臓の鼓動を示す筈の心電図は、0と言う数字を示し、ダイアグラムが揺れ動かない。

スピカに入部したモノの、ストロングブラッドがトレーニングを行う事は依然としてなかった。精々、見学をする程度で、その他は全て1人で行っていた。たまに部室を訪れる事もあったが、只の好奇心。別段スピカの部員——ゴールドシップと関りを持ちたい、と言う訳では無い。第一、ストロングブラッドがスピカに入ったのは、これと言った特別な理由がある訳では無い。質や実績で見れば、リギルの方が上なのだから。

では、ストロングブラッドはどうしてスピカに入ったのか。答えは単純明快で、所属メンバーが圧倒的に少なかったからだ。

それ以上の理由は持ち合わせてなどいない。逆説的に考えれば、リギルの所属メンバーが多すぎた事になる。

言ってしまうえば、それだけの理由だ。

たった一名しか所属していないチーム。少し前までは幾人ものメンバーがいた、との話は聞いた事があるが、今が少ないのだから問題は無い。

余りにも適當すぎる——他のウマ娘が聞けば激怒する——理由なのだから、別にチームそのモノに思い入れは無い。

出来る事ならチームにも加入はしたくなかったのだが、チームに加入しなければ、レースに出ることもままならないのだから、入っただけの事。

だからこそ、チームのメンバーやトレーナーとの関わり合いは不要だったし、トレーニングなんて以ての外だった。

大体、自分で全て賄えた。

仮にトレーナー——沖野と名乗る人物に文句を言われた所で問題は無い。此方には脅迫用の写真が存在しているのだから。

「しかし、どうして脚を触るのでしょうか？ ……バ鹿なんですかね？」

思い出しているのは、件のスピカのトレーナー。側面にそり込みが入っており、癖毛が結ばれている、中々印象の強い見た目をしている男性だ。

今思いますが、鳥肌が立つて仕方が無い。反射的に足で蹴つてしまったのだが、どうして五体満足で生きているのか。

本当に不思議でしょうがない。

「まあ、さして気にする事も無いでしょう。僕の手にコレがある限りは、面倒事にも巻き込まれないでしょうから」

携帯電話に保存されているのは、証拠用の写真。とは言ったものの、ピントがぶれているし、上手く撮影出来ていないので、ハツタリとして効果が無い。

だが、余り相手は強気で発言も出来ない筈だ。ネットに晒されたら最後。様々な厄介事がトレーナーに襲い掛かり、最悪トレーナー資格剥奪——だなんて結末を迎える事だつてざらにある。

ましてや、ベテラントレーナー。

長い間付き合い続けて来た仕事を水泡に帰してしまう、だなんて結末は望んでなど居ない筈だ。だからこそ、此方に干渉されずに済む。

我ながら良い考えだと思ってしまうのは、少々自惚れが過ぎるかもしれない。が、これは初めの一步なのだ。

あそこでは失敗した。
失敗してしまった。

だから、今度は失敗しない。二の轍を踏む事は有り得ない。手に持ったリングを齧りながら、ストロングブラッドは決意した。

——決意した。

——決意した……筈だったのだが……。

「頼むストロングブラッド！ スピカの練習に出てくれ！」
時間はまだ朝。

授業が始まる前の時間帯、自身の教室の前で、土下座する1人の男が。一目見ただけでも、嫌でも分かってしまう。

スピカのトレーナー、沖野だ。

前々からトレーニングに出てくれだの、練習に出てくれだの、ストロングブラッドに頼んできた。当然、意に介さず、無視し続けたのだが。

……まさか教室の前で土下座をするとは思っておらず、一瞬頭はフリーズしてしまう。再起動に若干の時間が掛かったが、取り敢えずスルー。

普段と変わらない対応を心掛ける。

「いや、少し話を……」

止める為だったのかもしれないが、足に触れられた瞬間、ぞくぞくとした悪寒が全身になだれ込んでくる。

鳥肌が立ち、反射的に蹴り飛ばしてしまう。

幸いにも窓ガラスに当たって落下——と言った具合に、最悪な事態には陥らなかつたモノの、沖野は壁にめり込む。

結構な音が響くが、本人は無事。

精々顔に靴の跡が残る位だ。

「邪魔なので、さっさと消えて下さい」

余り会話もしたく無いので、発言は簡潔に。沖野も雰囲気から、出直した方が良いと悟ったのだろう。また来るからな、と言い残してその場を後にする。

残されたのはストロングブラッド。

向けられるクラスメイトからの視線は、恐れや恐怖。少し顔を向けただけでも怯えられて、距離を取られてしまう。

失敗してしまったか？　とも思うが、そもそも友達などさして必要でも無い。取り繕う訳でも、弁明するでも無く、ストロングブラッドは自身の席に着く。

クラスで孤立した。

けれど、さして気にする事でも無い。

その後も、幾度となく沖野は突撃して来た。

毎度、毎度、目の前で土下座をしてきて、手酷くあしらわれる。その繰り返しだ。最初は直ぐに諦めるだろうと思っていた。

途中で段々と鬱陶しくなっていた。

そして、今では土下座される度に、うんざりとしてしまう。

「だから、諦めて下さいって言っているでしょう！　今度やるのであれば、あの写真を然る所へと提出させてもらいますから！」

携帯電話をこれ見よがしに見せつけて、脅迫する。もしも写真——上手く撮れてはいないのだが——がネット上に流出されでもすれば、大問題だ。

おおよそ自身の仕事を犠牲にしてまで、1人のウマ娘に執着する訳が無い。そう思っていたのに、

「頼む、スピカのトレーニングに付き合ってくれ」

脅迫されているにも関わらず、また頼みに来た。また土下座。最初の人込みで土下座をしたのは不味いと思ったのか、ストロングブラッド以外が居ない時しか土下座をしないが、その行為すらも腹立たしい。

「お断りします、って言ってるでしょう？　どうして分からないんですか。第一、どうしてそこまで必死になるんですか！　たかが僕程度、居ても居なくても変わらないでしょう？　あの写真を流出するって、言っていましたよね！」

全くもって意味が分からない。

一度見た事があるが、沖野はトレーナーと言う職業に誇りを持っている。やりがいを感じていて、ある種の生き甲斐でもある。

だからこそ、脅迫は大きな武器だ。

トレーナー資格をばく奪されてしまえば、自身の半身を失ったも当然なのだから。なのに、今こうやって土下座をしている。

「良いんですか？ 出るところでますよ？ この写真悪用しますよ？」

「いや、頼む。それもしないでくれ！」

「……………は？」

てつきり『それすらも覚悟の上だ！ それでも、俺はお前が欲しい！』みたいな感じの、熱血教師っぽいセリフが来るのかと思いきや、何とも情けない返答。怒りを引つ込めて、啞然とした声が出てしまう。

「頼む！ 俺はトレーナーと言う職業に、ウマ娘の育成に命を懸けていると言っても良い！ だから、仮にそうなってしまえばクビになっ
てしまう！」

「いや……………だから……………僕の勧誘を止めれば良いって最初から言っているじゃ無いですか。えっと……………もしかして、バ鹿なんですか？」

例えるなら、既に答えの書かれているテストをやっている様なモノだ。どうすれば良いのか分かっている癖に、沖野は何ともあほらしい行動をとっているのだ。呆れた風に溜息を吐き、バ鹿を見る眼になる。

本当にバ鹿では無いのだろうか。トレーナーを辞めたくないと言っている癖に、此方の干渉を止める事はまずない。

道理にかなっていない。

「ああ、俺はソレでも良い！ だから頼む！ スピカのトレーニングに参加してくれ！」

「もう写真をウマッターやら何やらに投稿しますね」

——中央トレセン学園のトレーナー、セクハラし過ぎて草。職権乱用しまくりで、中央の闇が垣間見えるwww——。

などと言った旨の文を書き、そのまま投稿しようとする——振りをする。勿論、写真は使い物にならない為、脅迫する事は出来たととしても、実行に移す事は難しい。あの時ちゃんと写真に収めていれば良かった、と後悔するが後の祭り。

「ちよつ、ちよつと待て！ いや、待って下さい！ 本当に頼む！」

しかし、只の振りでも効果は絶大だったようで、目に見えて慌て始める。ほんの少しだが、スツキリとした。

「本当に俺はトレーナーを辞める訳にはいかない。けれど、スピカをもっと強くさせたい。だから、頼む！ ストロングブラッド！ 練習に出てくれ！」

なのに、それでもめげない。

諦めたりしない。

不愛想で、誰とも関わる事の無い、気持ちの悪いウマ娘。そんな存在に、こうやって声を掛けてくる。

どうしてなのか？

簡単だ。夢があるからだ。

夢があるからこそ、ここまで頑張れる。夢を叶えたいからこそ、こんな奴にも恥をしのんで声を掛けてくる。

土下座さえも許容する。

ああ、本当に嫌な奴だ。自分自身が嫌い、嫌いで、仕方が無い。口を閉じようとしても、勝手に酷い事を言ってしまう。

「大体、僕は貴方方と関わる気は無いんですよ！ 只、レースに出る為に入っただけです！ 只、人がいなくなっちゃったから入っただけです！ だから、練習とかするつもりはありませんし、放っておいて下さい！

僕は、貴方の期待には沿えません！」

洗いざらい全てをぶちまけた。

何故か、さっきまで見ていた顔が見れなくなってしまう。怖いと思っている証拠なのだろうか。今まで、酷い顔や怖い顔など、飽きる程見て来たと言うのに。

それでも、目を逸らすのが嫌だった。

現実から逃げると言う行為が、心底嫌だった。

ゆっくりと顔を上げて、沖野の顔を見る。一体どれ程酷い顔になっているのか、憎しみを込めて、此方を睨みつけているかもしれない。

でも、それなら幾分マシだ。ゆっくりと顔を上げるが——予想とは180。異なり、沖野はストロングブラッドの予想していた表情を浮かべてなどいなかった。

寧ろ何と言うべきなのか、本当に筆舌に尽くしがたい程に、途轍もなく微妙な表情を浮かべている。疑問や困惑、呆れや笑い。

様々な感情がごちゃ混ぜになっている、ある種の混沌。

「……あ、あの？」

「さつきお前は、俺の期待に沿えないって言ったよな？」

「言いましたけど……ソレが何か？」

雰囲気が変わった——気がした。

沖野は立ち上がり、ストロングブラッドの肩を掴む。

「俺はお前の走りが見たい！」

「……は、はあ？」

唐突に、目の前の変態は何を言い出すのか。明らかに、先程の会話と関係が無い。走りが見たい？ 何の意図があるのか？

もしかすると、新手のセクハラか？

「セクハラはもう止めた方が良いと思いますが……」

「違う、違う！ これは別にセクハラでも何でも無い！ 俺は、お前の走りが見たいんだよ！ 期待に沿えない？ とんでもない！ お前は、俺にあのリギルを下した走りを見せてくれるだけでも、期待に込めてくれるんだよ！」

さつきまでのシリアスな雰囲気は一体何処に行ったのか。まるで、欲しかった玩具を眺めている、子供の様にキラキラとした瞳。

そんな瞳で、ストロングブラッドを見つめながら、沖野は肩を揺らして心底楽しそうに語り掛けてくる。

理解不能。

理解不能。

揺らされる脳内では、簡素な四文字が浮かび上がっている。収集が付かないと言うべきなのか、失敗してしまったと言うべきなのか。

諦めてもらう為に話した本音が、相手に復活のチャンスを与えてしまった。普通なら、怒るべきなのに、何故か相手は喜んでいる。

訳が分からなさ過ぎて、心が折れそうだ。

「ですけど、先程から言っている様に僕は只レースに出る為に……メンバー数が少なかったから入っただけで……」

「大丈夫だ！　今、スピカは圧倒的にメンバーの数が足りていないから、入ってくれるだけでもとてもありがたい！　そして、数が少ないと言う理由でお前みたいな逸材が入ってくれたなら、地獄に仏とはまさにこの事だ！」

「どうしてそんな喜んでるんですか？」

正直に言えば、段々と目の前の沖野と言う人物が恐くなって来た。先程まで、自身が優位にいたと言うのに、今では立場が逆転。

只々困惑するしかない。

「だから、お前にはスピカのトレーニングに出て来て欲しい！　俺は、お前のあの走りを間近で見たいんだ！」

沖野は尚も詰め寄って来る。

傍から見れば幼気な少女に声を掛ける、ある種の不審者。しかし、ここに警察が通り掛かる事は無い。

どうしてこんなにも、物事が上手く行かないのか。

改めて運命やら神やらと言った、不確定な存在を呪う。

「わ、分かりました……」

最初は聞き取り辛い程の音量で。

「ん？　今、ストロングブラッド……なんて言った？」

「だから、分かりましたって言ったんですよ！　分かりました！　はい、もう、分かりました！　出ますよ、出れば良いんでしょう！」

絶対に言わないと誓った言葉を、ポロツと口にしてしまう。しまった、と後悔するが時すでに遅し。発言を撤回する事は出来ない。

沖野は余程嬉しかったのは、途轍もなくはしゃぐ。大の大人がはしゃいでる姿には、目も当てられていない。

自身の失敗を嘆くが、ハツと気が付く。

「但し、条件があります」

「……条件？」

既にトレーニングに付き合う、とは言ってしまった。所詮は只の口約束。口で言っても、行かなければ良い話だが、ストロングブラッドは自身のポリシーとして、約束した事は叶わず守ると決めている。

本当は嫌だけど。

本当は、とても凄く嫌だけど。

しかし仮にこのままズーっとスピカのトレーニングに付き合うのは御免だ。だからこそ、条件を付ける。

一つ目は、新しくスピカの加入者がやって来たら、その時点でストロングブラッドはトレーニングに参加しない事。

二つ目は、加入者には自身の事——ストロングブラッドの存在を秘匿する。これは単純に馴れ合うつもりが無いからだ。

沖野は少々不満げな様子だったが、渋々了承。こうして、ストロングブラッドは一時的ではあるものの、スピカのトレーニングに参加する事となった。

「そう言えばさ、ストロングブラッドは……夢とかあるのか？」

「何なんですか？ 唐突に。言いませんけど」

「俺の夢はな、何時かスピカのメンバー全員が出場するレースが見たいんだ。自分が育てたウマ娘達が出場するレース、考えただけでもワクワクするだろ？」

「別に、僕はその夢に対して思う事は何もありません。まあ、夢なら別に良いんじゃないですか？ 叶うか叶わないかは別にして……」

「さあ、それじゃあ次にお前の夢について教えてくれよ」

「お断りします。自分で勝手に話しただけなのに、どうして僕が言わないといけないんですか？ 理由も義理もありません」

「そんな事を言わずにさ、頼む！」

「嫌です」

「頼む！」

「嫌です」

「頼む！ 頼む！ 頼む！ 頼む！ 頼む！ 頼む！ 頼む！ 頼む！ 頼む！ 頼む！

！ 頼む！ 頼む！」

「はあ……分かりました。分かりました」

——夢。

なんて言う程のモノでも無いが、一応存在はしていた。口にすれば誰もかれもが嘲笑するであろう、バ鹿げた目標。

事実これを口にした時、周りは笑った。バ鹿にする様に笑う者が居

れば、面白い冗談として受け取る者。

はたまた、本気でそう思っているのか、と嘲笑う者に、まあ頑張つてねと思っても無い事を言われながら苦笑する者。

だからこそ、何となく分かってしまう。

どうせ目の前のこの人も笑うのだろう、と。それでも約束をしてしまったのだから、口にするしかない。

大きく息を吸って、伝える。

「僕の夢は——」

——世界一のウマ娘になる事です。

どうせまた、笑われてしまうのだろう。分かり切った結末は、しかしやけに見るのが怖いと感じてしまった。

まさかこの人は笑わない、などと信じていたとでもいのだろうか？

自分に問いかけて、内心鼻で笑う。

それは有り得ない話だ。

誰も信用していない。誰も、信じていない。信頼できるのは自分だけ。そう決めたのだから。そうやって、生きていくしかないと理解してしまっただけから。

だったら顔を見る事なんて簡単だ。

一体どんな風に笑っているのか。嘲笑か、苦笑か、爆笑か。何方にせよ気持ちの良いモノでも無いだろう。

「ああ、良い夢だな」

「……え？」

今の今まで、掛けられた事の無い言葉に、困惑してしまう。思わず沖野の顔を見るが、笑ってなどいない。

寧ろ、途轍もなく真剣そうな顔で、何かを考えている。

やがて考え終わったのか、手を差し出す。

この手は一体何なのだろうか？ なんて内心首を傾げる。沖野はなにかを待っている様子だが、生憎ストロングブラッドの脳内にこの手の対処法は無い。

「またもや新手のセクハラなのか。」

「ああ、これは握手だよ」

「セクハラじゃ無いんですか?」

「断じて違う! 人をそうやって、変態に貶めようとするのは止めろ!」

握手。

一瞬躊躇ってしまうのだが、それでも沖野と握手を交わす。ごつごつとした、男性の手。じんわりと仄かに温かく、自分の手と比べてみても一回りも大きい。不愉快な筈だ。気持ちの悪い筈だ。

今すぐ手を払って、罵倒すべきだが、出来ないでいた。どうしてなのかわからない。

「約束だ。俺が絶対に、お前を世界一のウマ娘にしてやる!」

あの人は——沖野は夢を肯定してくれた。

只思い出したただけだ。

あの時の記憶に、特別な感情は無い。別にこれから心を入れ替えるだとか、何かが変わる——劇的な変化などは存在しない。

そんなモノは只のご都合主義であり、ある種の幻想に他ならないからだ。仮にそう思ったとしてもそれは戯言や虚言に他ならない。

けれど、思ってしまった。

ふと、思ってしまったのだ。

だから伸ばされた手を振り払う。パチン、と乾いた音が響き渡り、ストロングブラッドは拒絶の意を示した。

最初は驚いた表情を浮かべ、今度は不思議そうに此方を見る。まるで意味が分からない、とでも言いたげに。

「……どうして、ですか?」

自分自身が問いかける。

改めてみれば、目の前に自分自身が居るなんて、ましてや自分自身に質問をするなんて、非現実的過ぎる光景だ。

思わず笑ってしまいそうになる。

断った理由は至極単純だ。別段、特別な理由なんて存在していない。聞けば感動する様な、大層なエピソードは持ち合わせていない。

只、

「死にたく無いって、思ったからですよ」

正確に言うのであれば、思ってしまった、と言うべきか。別段理由なんて存在などしては居ない。強いて言えば、ある種の気まぐれ。

決して沖野と交わした約束を守れなくなるから、なんて理由では無い。断じてない。無いと言ったら無い。

「愚かな考えですね。今、生き足掻いた所で、この先に待っているのは地獄ですよ。何度も何度も苦しんで、死ぬだけなんですよ」

言っている事は正しい。

待ち受けている未来は、確実に希望に満ち溢れた、明るいモノでは無い。苦しんで、苦しんで、苦しみにぬいて、最後は暗闇に塗れて死ぬかもしれない。

こんな暗闇の様な場所で。

しかし、未来の話をしていったって仕方が無い。一寸先は闇、だなんて言葉がある様に、未来は誰にも分かりはしないのだ。

「分かっていますよ。でも、死にたく無いって思ってしまったから。それに、未来って案外簡単に変わる事が出来るんですよ」

変える事だって。

覆す事だって。

無くす可能性だって、ゼロじゃない。

だったら、今は考える事を止めてしまおう。ただ、死にたくないから。そんな下らない理由の為だけに、生きて帰ろう。

「……そう、ですか」

呆れた、と言いたそうな表情を浮かべながらも、何も言わない。既に無理だと悟ったのか、諦めたのか。

「きつと、後悔しますよ。あの時、手を取っておけば良かった、とね」

「上等ですよ」

ストロングブラッドは前髪を上げた。

目の前に居る自分自身と同じく、二つの瞳が露わになる。一つは夜空を閉じ込めた様な、紫紺の瞳を携え、もう一方は火傷跡が残る白濁の瞳。

けれど、不出来な笑顔を作り、舌を出す。

人差し指を目元に置き、アツカンベーのポーズ。次第に明かりは強くなつていき、そのままストロングブラッドは呑み込まれる。

テレビの電源が切られるみたいに、唐突に意識は途切れていき、ストロングブラッドは眼を覚ます。

「もう大丈夫だつて、言っているじゃ無いですか？」

心底不満、とでも言いたげな声が響き渡る。場所は病院に設営された庭園。広さはそこまででは無いモノの、様々な種類の木々や草花などが植えられており、気晴らしをするには丁度良いだろう。

上を見上げれば燦々と照り輝く太陽と、青々しい空が待ち受ける。日々、白い天井を見つめている患者たちからすれば、これ以上無いサプライズとも言える筈だ。

しかし、不満げな声を上げた少女——ストロングブラッドの不満が拭われる事が無い。周囲を見ても上を見ても、浮かべる表情は、ブスツだなんて擬音が似合う不満げな表情。ちよつとやそつとで晴れるモノでは無い。

「いい加減に機嫌を直せ。仕方が無いだろ？　まだお前は病み上がりなんだから、絶対安静にしておかないといけない訳だし、第一足も動かない状況だろ？」

なだめるのは沖野。

両手はハンドルが握られている。それもその筈、今現在、ストロングブラッドは二本足で立っているのでは無く、車椅子に乗っているのだ。

あの時意識を失つたと、深刻な状況へと陥つたらしい。手術なども行われたらしく、幸いにも成功だったようなのだが、数日間足は動かす事が困難との通告を受けてしまった。当然、ストロングブラッドこれに反発。

走る事が出来なかったのに、今度は歩く事すらままならない。ウマ娘にとって、これ以上屈辱的な事は無い。

ましてや、車いすを押す係に任命されたのは、何かと縁のある沖野。車椅子は設計上、人に押ししてもらうために作られたが、車輪部分にも自身で動かす為のパーツは存在している。だからこそ、ストロングブラッドは断った。

が、何故かこうして沖野はストロングブラッドの車椅子も押している。それもまた、ストロングブラッドの不満を加速させる原因の一つだった。

「ほら、余り不機嫌そうな顔をするな。今日は良い天気なんだから」「そんな簡単に機嫌が直れば、此方も苦労しませんよ。大体、どうして僕に気を掛ける必要があるんですか？ 僕はもう、スピカを辞めた身ですよ」

意図せず口を開いてしまう。

減らず口を叩くのは相変わらずだし、愚問と呼べる問いかけを投げる。既に、嫌気が差す程に分かっているというのに。

「別にお前がスピカだからとか、スピカじゃないから、なんて理由でこんな事はしない。俺はお前が心配で、ここに来ているんだ」

何の恥ずかしげも無く、断言してしまう沖野。流石と言うべきなのか、もう少し恥じらいをもって女性と接しろ、と怒るべきなのか。

選択に困る現状だ。

ふと、そこで気が付く。

「……心配、だったんですか？ 僕の、事が？」

「？ 当然だろ」

咄嗟に後ろを振り向き、思わず確認してしまう。

沖野はストロングブラッドの顔を見ながら、一体コイツは何を言っているのだろうかと言いたげに首を傾げる。

何故か妙に気恥ずかしくなり、直ぐに顔を背ける。

その後は数分程の沈黙が続く。何方も話す様な事柄が無かったのか、はたまた、切り出すのに覚悟が必要だったのか。

「聞いても……良いか？」

「どうぞ」

さつきとは打って変わって、真剣味を帯びた声。重要な話であるの

は直ぐに分かり、茶化す事も拒絶する事も無く、ストロングブラッドは促す。

少し溜めて沖野は切り出した。

「あの火傷跡は何が、あつたんだ？」

最初は大きかった声も、余り聞くべき話でも無いと思つたのか、段々と勢いを失くしていき、最後はか細い。

只の好奇心、などでは無いのだろう。

心の底からストロングブラッドと言うウマ娘を心配しており、心配しているからこそ、気になつてしまつた。

だから、こうして質問しているのだ。

なんでも無い、なんて言つて突き返すのはとても簡単だ。しらばつくれるのも容易だし、ウソをつくことだつて出来る。

けれど、何故か駄目な気がした。

理由なんて大層なモノは持ち合わせていない。仮にあつたとしても、全ては後付けだ。直感的にそう思つたのだから。

「数年前……とは言つたモノの、そこまで昔の話ではありません。とある事件に巻き込まれて負つてしまつた傷です」

しかし、全てを語らない。

語りたくなかつたから。仮に語つた所で、同情されるのも、心を痛めるのも、自身に対しては不要だつたから。

なにより、全ては終わつてしまつたから。

重要な部分は何一つ言い出す事も無く、簡潔に自身の身に起きた出来事のみを話す。果たして沖野はどう受け取るのか。

「……………そう、か」

それ以上の言葉を紡ぐことは無い。

これ以上は聞くべきでは無い、とでも思つたのだろう。もしかしたら何となく、事情を察していたのかもしれない。

が、何も聞かないのならソレで良い。

一体沖野は話を聞いて、どんな事を感じ取つたのだろうか。話した時、あの時抱いていた感情は全て押し殺していた筈。

怒り、悲しみ、憎しみ、後悔、自己嫌悪。アレにはありとあらゆる

感情が詰め込まれている。良い感情も、悪い感情も。

忘れたいと思っっている癖に、多分一生忘れるなんて出来ない。今も尚、気を抜いてしまえば幻痛は容赦なく襲い掛かる。

だが、別段今は思い出すべき場でも無い。思いを馳せる時間もそこそこに、一瞬で思考の枠外へと追い出す。

カラカラと車椅子は動き、周りの風景は勝手に変わっていく。なんとなく、と言った理由でもう一度空を見上げる。

眩い光を放ち続ける太陽が、嫌でも視界に入り込む。

「……ま、案外悪くない、ですかね」

忌々しいと感じは無かった。

只、明るいな、と思っただけだった。

0に戻った立ち位置

「車椅子、自分で動かせるので動かすのを止めてくれませんか？」
「まあまあ、別に良いだろう？ 誰かに動かして貰った方が、お前も幾分移動するには楽になるんだから」

覆われた前髪の間から非難気な眼差しを向けるが、押し手である沖野は素知らぬ顔で車いすを動かし続けた。

結局ストロングブラッドは突如として容態が急変したのだが、原因は分からずじまい。ただ一つ言える事は、今現在は異常は見られない。

おおよそ健康的と言う訳だ。

しかし、その後遺症なのか足がまともに機能しない。その為、病院に備わる車椅子を用いて、院内を散歩している。

アレからと言うモノ、スピカの面々は面会に来る様になっていた。当然、ストロングブラッドとしては馴れ合うつもりは無い。

よって、断りを入れていた。

しかし沖野は諦めが悪い性格だったらしく、様々な方法を使ってストロングブラッドに会おうとして来た。

木に登って、直接話をしてこようとした時は、普通に驚いてしまった。もしも、このまま謝絶を続けていれば、面倒な事になる。

予言めいた確信をしまったので、不本意ではあるモノの、沖野の面会を許した。そして、この結果。

——やっぱり謝絶にしておけば良かっただろうか？

選択肢を見誤った事実には、若干の後悔を抱くモノの、今更時を巻き戻せる訳も無い。今ではこうして、車椅子を押す役割を果たしている。

本人としては実に屈辱的だ。

実際、何度か反抗してみたモノの、全てが不発に終わっており、如何にかするのは半ば諦めてしまった。

が、為すがままも癩に障るので、こうして何度か抗議の声を挙げている。もつとも、余り効果は無く、虚しくも儂い反抗。

ハアツ、と憂鬱気に溜息を吐く。

場所は外に出られない患者の為に建設された、中庭。多種多様な草木花が植えられており、小規模ながらのジョギングスペース。

柵越しに覗く景色も絶景で、まさしく憩いの場と言えるだろう。

ストロングブラッドも、件の中庭を回っている訳だが——これと言った感想は無い。当然と言えば当然で、幾度となく通っているのだから仕方が無い。

あ——なんか、見飽きたな——。

と、内心思っている。

出来れば外に出たいのだが、未だに外に出る許しは出ていない。なにせ、原因不明の容体悪化に加えて、足の機能が停止するという副作用。

病院側としては、万が一再発した時の危険性も鑑みての判断。仕方が無いと言えば、仕方が無いのだが、やっぱり同じ場所に留まるのは気が滅入る。

「ま、原因は大方想像が付くのですが……」

そう、ストロングブラッド自身は、原因を知っている。ストロングブラッドが持つ『超集中』以外にも、才能が有った。

——『健康的な身体』。

読んで字のごとく、どんなに不規則な生活を送っていたとしても、健康的な肉体を保つという才能。

仮にどんな傷を負ったとしても、数分で治ってしまうし、カビの生えた残飯を食べたとしても、身体に変化は及ばない。

とても便利な才能で、忌々しい才能。

恐らくは機能していなかったのだ。『健康的な身体』が。しかし、何故機能しなかったのかは分からない。

「あの時死ななかったのは運が良かったのか、はたまた悪かったのか」この才能の性質状、自身が迎える終わりは寿命を全うしての「死」以外は有り得ない。そう考えれば、今死ねなかった事を惜しんでも良いのかもしれない。

「ま、死にたくないと思ったから、今もこうして生きている訳ですけ

ど」

周囲の景色を見ていると、沖野が目に入る。

相も変わらず独特な髪型に、口に咥えた棒付きキャンディーが目につく。顔つきこそ、中々のイケメンなのだから、ウマ娘の脚を触るなどと言った変態的な嗜好さえ持つていなければ、さぞかしモテた筈だ。

沖野の顔をずーっと見ていて、思い出す。

「? どうした、急に俺の顔を見て」

「そう言えば、退部届ってまだ持っていますよね?」

「え?」

今までの話の流れをぶった切る発言。しかし、沖野はその『退部届』に疑問を示す訳でも無く、ビックリと身体を震わせて返答を返す。

ああ、やっぱりなのか。

本人は隠しているつもりなのかもしれないが、その反応を見れば自ずと答えは分かる。そして、あの時面会してきた意味も。

沖野は色々と変な部分垣間見えるが、律義な男。流石に自チームでは無い、ウマ娘など面会には来ない筈。

だからこそ、恐らく沖野が持っているであろう退部届。

ストロングブラッドは確かに退部届を出すには出したが、別段出した瞬間、チーム脱退扱いはされない。

トレーナーが受け取り、ソレを受理して、初めて脱退が成立する。つまり、沖野は依然として持っているのだ。

退部届を。

一体何をするのか予想が付かないせいで、やたらと出し渋られたものの、無事にストロングブラッドの手元に退部届は戻った。

退部届を二つ折りにした後、そのまま直線状に引き裂く。びりびり、と破れる音と共に退部届は原型を失っていく。

何度も、何度も、何度も破いた結果、幾つモノ紙吹雪が出来上がる。掌に載せられたソレら風に運ばれ、何処かに飛ばされた。

軽く不法投棄をしているのだが、そこは見なかった事に。

「お前……一体、何を?」

「何をつて、見たら分かると思いますが……」

沖野はストロングブラッドの行動から、意図を察してくれなかった。若干バツの悪そうにしながらも、言葉にする。

少々たどたどしく、口にするのは恥ずかしいらしい。

「止めるんですよー！」

「辞めるって？ やっぱり、スピカをか？」

「だあ、かあ、らー！ そうじゃ無いですよ！ スピカを辞めるって言うのを、ついさつき、今しがた止めたんですよ！」

察しの悪い沖野に、若干苛立つ。が、苛立つだけでなく、頬も若干朱色に染まっており、改めて言うのが恥ずかしいだけなのかもしれない。

少し視線を逸らすが、再度沖野に向き合う。

勢いが良く、隙間から覗かせる鋭い相貌。一瞬睨まれている、と勘違いして身構えたのだが、実際はそうでは無い。

「入部届、下さい」

「入部届？ え？ いや、でもお前、もうスピカに入ってるだろ？」

さつき、辞めるのを止めたって言っていたし」

「それでも、ですよ。それでも、やっぱり、ちゃんとしておかないといけませんよ。一度は、辞めたんですから」

これはある種のケジメだ。

一度は辞めようとした癖に、退部届を取り下げたので、辞めるのは無しになる。そんな中途半端は、ストロングブラッド自身が許せない。

だからこそ、必要な儀式。

掌を出し、何かを求めるポーズ。入部届が渡されるのを待っていたが、途中で入部届など持っていないだろうと言う事実が気が付く。

お見舞いに来たのに、入部届を持ってくる輩が一体どこに居るのか。自身の浅はかな行動に、またもや恥ずかしくなってくる。

が、手渡された一枚の紙。

紛れも無い入部届。

「……なんで、持って来てるんですか？」

沖野に向き合い、傍からは見えないのだが、ジト目で沖野を見る。まさか、この男、こう言った時を待っていたと言うのか。

もしかすると、ストロングブラッドがスピカに改めて入部するかもしれない。否、必ず入部するだろう。仮にそうなった時、入部届が無ければ大変だ。よしっ、何時でもどこでも入部届を持っていよう。

なんてテンションで、お見舞いに来た時から、持ち歩いていたというのか。考えると、得も言われぬ悪寒に襲われ、鳥肌が立つ。

時期は夏なのに、何故かやけに寒い。

「気持ち悪い、ですね」

「どうして急に、俺が罵倒される!」

車椅子を自ら動かし、沖野から距離を取り、罵倒。沖野は身振り手振りで不満を露わにするが、入部届を四六時中持っている方が圧倒的に非がある。

心底呆れた様に、溜息を吐くストロングブラッド。

「ペン……も、どうせ持っているんですよね?」

「ああ、当たり前だろ?」

予想通り、内ポケットから黒ボールペンを取り出す沖野。もう、何も突っ込まない。ボールペンを貰い、入部届に記入する。

——私は、チームスピカへ入団する事を誓います。——ストロングブラッド。

書類に不備は無い。

問題も無い。

「ああ、これで大丈夫だ」

「ま、改めて、これからもよろしくお願いします——沖野さん」

「おう、これからもよろしく……ん? お前、今……何て?」

「中庭は飽きましたし、僕の病室に連れて行って下さい、ほら早く」

「え? あ——、分かった、分かった」

ほんのわずかに感じた違和感。

しかし、ソレが一体何なのか沖野は気が付く事は出来なかった。

「少し遅くなっちゃたかな？」

アハハハハ、と苦笑するスペシャルウィーク。トレーニングが終わった時、既に時間も夜に差し迫っていた。

煌々と輝いていた太陽も、橙色の夕日へと変わり、澄んだ青空も鈍色へと染まりつつある。急いで帰らなければ、寮に着く頃は夜になってしまう。

夜道は危険だし、自身も年頃の女の子。

急いで帰らなければいけないと、石造りの道を急いで駆け抜ける。トレーニング直後で、身体は若干の疲労を感じているのだが、如何せん思い切り走れた興奮の方が幾分強い。

疲労も辛さもなんのその、の要領で勢いよく駆け抜けていく。実際、そこまで疲れていないし、体力は半分以上残っている。

周囲の景色は目まぐるしく変化していき、さながらレースを走っている風にも錯覚してしまう。

——そう言えば、ここから始まった。

トレセン学園へ続く道。田舎から初めてやって来た自分は、一体どんな風にこの場所を見つめていたのか。

少し考えると、懐かしく思えてしまうのは、少々感情が過敏になり過ぎている証拠かもしれない。

『日本一のウマ娘になる』。数年前までは、大言壮語だった目標も、今では手の届く位置——とまでは行かないが、頂が見える場所までは来れた気がしている。

スピカは順調に実力を伸ばしており、皆が皆、仮にレースを行えば勝てるか分からない程に、強い。

それも認め合い、競い合うライバルがいてこそ。
楽しい。

スペシャルウィークは毎日が楽しい。

けれど、悩みが無いのかと言われれば、無いと断言する事は出来ない。今も尚、脳裏にチラつく1人のウマ娘。

——ストロングブラッド。

既にチームスピカを去った、ゴールドシップに続く古参。レース出

場直後に、入院したという話は聞いたのだが、結局お見舞いには行けずじまい。

おまけに、初めて言葉を交わした状況が状況なだけに、仲良くなれてもいけない。一度謝ったり、仲直りした方が良いのかもしれない、と一念発起してクラスを訪れたりしたモノの、結局は会えずじまい。

既に病院は退院したと、トレーナーから聞いていたにも関わらず。もしかして嫌われているのだろうか？ いや、絶対に嫌われていて、なんて若干ネガティブな思考に侵食されつつもある。

徐に吐きそうになったため息。

しかし、直前で手で抑えて留めた。

溜息を吐いたら幸せが逃げる。にわかには信じがたい迷信ではあるモノの、スペシャルウィークは田舎育ち。

こう言った迷信の類は大体、信じている。憂鬱、では無いが、やはりストロングブラッドの事を考えると若干身体が重くなる。

トレーニングを行っても尚、有り余る体力——その筈なのに。考えてはいけないと思っても、考えてしまうのがある種の道理。

しかし、どうして考えてしまうのか。

理由は分からない。確かに、ストロングブラッドがスピカを辞めた事は悲しいと思った。あの時誘いを断られたのも、悲しかった。

けれど、もつと別。

別の理由があった——

「……あ」

思わず挙げた声は、困惑かはたまた驚きか。校門へ差し掛かろうとした時、1人のウマ娘が姿を現した。

腰辺りまで伸ばされた、黒紫色の髪はツーサイドアップに結ばれている。肌は白磁と見紛う程に色白で、身体つきは細めを通り越して華奢。

少々食生活の心配をしてしまうレベルだ。

身に着けているのは何の変哲も無い夏用の制服なのに、やけに様になつており、淡く儂い——今にも消えてしまいそうな雰囲気纏う。

唯一異なる点は、顔。覆われていた筈の前髪が、今は片方が切り揃

えられ、整えられた容姿が、澄んだ紫紺の瞳が露わとなっている。

「……ストロングブラッド、さん」

「その声と雰囲気は、多分スペシャルウィークさんですね」

少々違和感を感じる喋り方。しかし、目の前にて相對する悩みの種に注目して、スペシャルウィークは気が付かない。

何の用事なのか？

考えられるのは入院辺りになるが、そもそもスペシャルウィークには関係が無い。お見舞いに行った時も、断られてしまった訳だし。

じゃあ一体何なのか。

仮に、ここで暴言でも吐かれれば、ソレだけで心は傷つく事間違いない。実際、そんな例が未だに記憶としてこびり付いているから性質が悪い。

「ええと、何か……用が……」

「スピカを辞める、と言うのを止めました」

淡々と、事務的な口調で。

前置きも無く、本題を告げるストロングブラッド。嘘は言っていないと、何となく理解出来た。辞めるのを止めた——つまり、スピカを辞めていない事になる。

「そして、僕はもう1つ、貴方に言っておかないといけない事が有ります」

相も変わらず、声音から感情を読み取れない。

「前は、無礼な態度をとってしまい、大変申し訳ございませんでした。貴方に非は無く、アレは完全に僕の八つ当たりです」

勢いよく身体を90度に傾けた。余りにも勢いが良すぎるので、一瞬地面に頭を打ち付けるのでは、と身構えてしまう。

が、違った。

謝ったのだ。ストロングブラッドは、スペシャルウィークに。

まさか、ゴールドシップと別ベクトルで灰汁の強い彼女から謝罪されるとは。一瞬見つめて突っ立っていたが、ふと我に返る。

「頭を上げて下さい、ストロングブラッドさん。私は別に怒っていませんから」

「分かりました。それでは、失礼します」

スペシャルウィークから許しを貰ったからなのか、ストロングブラッドはゆつくりと身体を元に戻す。

そして、言葉を交わす訳でも無く、その場から立ち去ろうとした。「あの、ちよつと待って下さい!」

「まだ他に、何か?」

スペシャルウィークの発言にストロングブラッドは足を止める。只、何の変哲も無い、発言を待っているだけの姿勢。

その筈なのに、無意識に身に纏う威圧感は、若干スペシャルウィークに緊張感を与えてしまう。具体的には、焦る。

ああ、つい反射的に言ってしまったけれど、一体どうしよう!! 流石にやっぱり何でも無いです、だなんて言える訳がないし、などと心情も荒れ狂う。

が、やっぱり肝心なのは勢い。

頭の中は收拾がっていない。けれど、思いを伝えた。

「私と、友達になってくれませんか?」

「嫌です」

間髪入れずの返答。

ほんの少しすらも、悩む素振りを見せなかった。つまり、自分と友達になるのはそれ程までに嫌だったのか、と解釈して凹みそうになる。

「何を勘違いしているのか知りませんが、前にも言った通り、僕は貴方方と馴れ合う気も、つもりも、一切ありません——それじゃあ失礼します」

軽く会釈をして、何処かへ——恐らくは寮へ——帰るストロングブラッド。その背中姿が、何故か酷く寂しそうで、辛そうで、悲しそうで……。

「ねえストロングブラッドさん。最後に、もう1つだけ質問しても良い?」

「……………」

ストロングブラッドからの返答は無い。

単に聞こえていないだけなのか、はたまた聞こえないふりをしているのか。この際、どうでも良いと思った。

微かな違和感を、明確にする為に質問をする。

「走るのって、楽しい?」

「楽しくないですよ」

ぼそりと、呟く様に返答。

しかしようやくスペシャルウィークは納得がいった。どうして、自分はあんなにもストロングブラッドが気になっていたのか。

——ウマ娘。

彼女達は、走る為に生まれて来た。

時に数奇で、時に輝かしい歴史を持つ別世界の名前と共に生まれ、その魂を受け継いで走る。それが、彼女達の運命。

走る事はとても楽しくて、何時も時間を忘れてしまう。ずーっと走り続けられれば良いのに、と思ったのは一度や二度では無い。

恐らく、スペシャルウィークと知り合っている皆も、同じ意見を述べる筈だ。しかし、ストロングブラッドにはソレが無い。

楽しいという感情が。

寧ろ、あの時見たレースで彼女は、とても辛そうに走っていた。苦しそうに走っていた。哀しそうに走っていた。

まるで、何かから逃げる様にも見えた。

「……………どうして?」

どうしてそこまでして、貴方は走れるのか。口から零れ落ちた返答は、虚空へと溶け込んでいき届かない。

誰も知りはしないのだ。